

アイシールド21 強くてニューゲーム

ちあっさ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気づいたら、小早川瀬那だった、小学五年生の。

原作知識を持った現代人が、原作終了数年後のセナの記憶を持って転生。

うる覚えの原作知識はあれど、特に気にせず原作開始前からアメフトに打ち込み、

高校入学時には原作最終時を超えらとんでもないチート選手になつていた。

目次

1st	down	プロローグ〜小学生時代	1
2nd	down	中学生時代	11
3rd	down	ともしび	17
4th	down	エンカウター	23
5th	down	それぞれの決断	33
6th	down	王城編開始	41
7th	down	姉崎まもり	49
8th	down	小早川セナ VS 進清十郎	56
9th	down	白い騎士達	65
10th	down	蛭魔妖一（前編）	75
11th	down	蛭魔妖一（後編）	85
12th	down	金剛兄弟	93
13th	down	閑話と三回戦	101
14th	down	ワイルドガンマンズ	107
15th	down	雷門太郎	112
16th	down	神龍寺ナーガ 其の壱	117
17th	down	神龍寺ナーガ 其の弐	124
18th	down	神龍寺ナーガ 其の参	132
19th	down	神龍寺ナーガ 其の四	141
20th	down	神龍寺ナーガ 其の五	147
21st	down	神龍寺ナーガ 其の六	155
22nd	down	神龍寺ナーガ 其の七	164
23rd	down	神龍寺ナーガ 其の八	173
24th	down	明日への決意	182

32nd	31st	30th	29th	28th	27th	26th	25th
down	down	down	down	down	down	down	down
それぞれの目標	はじめの一步	帝王 対 四次元の騎士 (後編)	帝王 対 四次元の騎士 (前編)	帝黒学園	そうだ大阪へ行こう	葦 (あし)	漢の選択
249	242	233	225	216	209	201	192

1st down プロローグ 小学生時代

小学五年生の春、階段から転げ落ちた。
頭を打った拍子に思い出した。

世界の秘密を。

自分の名は小早川セナ。

つまり、

ここが「アイシールド21」の世界なのだということを。

落ちていて記憶を整理していくと、驚くことに、三人分の記憶があることがわかった。

一つ目は、今の自分、小早川セナ、小学五年生。

物心ついてから今までの自分のことだ。原作関係なし。

二つ目は、原作の「アイシールド21」の小早川セナの記憶。

しかもこつちの方は、原作をさらに超えて、アメリカに渡ってプロの入団試験に合格し、

クリフォードさんと同じチームに入ってパンサー君と勝負している記憶まである。

この試合あたりから記憶がぼやけているが、自分のことのように思い出せる。

いや、自分のことなんだろう。

そして三つ目、これがよくわからん、「アイシールド21」を漫画として読んでいた「俺」。

こいつは名前も顔も一切思い出せない。性別は多分男。

いや、自分がセナで「俺」という前世の記憶を少し思い出したのかな？

なんだかごちゃ混ぜになっていてよくわからない。

僕はこんな性格だったか？

違ったような気がする。

セナはこんな性格だったか？

これは少し違うような気がする。もっと大人しく気が弱かったは

ずだ。

……もーいや、悩んでも今という現実にかわりないし。

今の自分は誰だと自問自答すれば、

「僕は小早川セナだ」とはつきりと言えるので問題なし。

とりあえず、今の僕を「小早川セナ」とし、原作通りのセナを「小早川瀬那」としよう。

これは、神様が、僕のこの記憶、過去か前世かパラレルかはわからないが、

わからないということとは、つまり気にせず好きに生きよとのお達しに違いない。

なら・・・原作なんて気にしないでおこう、

僕はここに生きている。

それ以上に重要なことなんてない。

やりたいことをやろう。

僕は……………走ろう。

で、試しにアメリカ横断デスマーチで習得したクロスオーバーステップを公園で軽くやってみたら、

あっさりとできた。

何というか、体が覚えていた。

でも全力では出来ない、やったら足を痛めるだろう、必要な筋力も体の柔軟性も足りない。

40ヤード走では4秒2に遠く届かないし、使っていたいろいろな技、

「デビルバットハリケーン」や「フォースディメンション」等もできない、というか禁止。

イメージは完璧に出来るが、体はついてこない。

自分で計画を立てて朝晩のランニングを始めた。

アメフトができるのは中学生からだ。

いじめられっ子にカバンを持たされて走らされるのではなく、自分

の意思で目的を持って走る。

同じ走るにしても、明確なイメージを持っているといかないのでは成果が全く違うという。
でも。

「よう、せなく、おはよう、じゃ、早く持つて走れよな」

と、学校に行く時にいじめられっ子に絡まれた。

同じ集団登校班で、毎日ランドセル持たされてたんだから当然今日も会うに決まってるか。

慣れた様子で半ズボンの数人の小学生がニヤつきながらランドセルを地面に置いてさつきと学校へ行こうとしている。

でも当然、以前の僕ではないので。

「やだよ、自分で持つていきなよ」
と、すげなく断った。

一瞬驚いた顔をしたいじめっ子（名前忘れた）のリーダー格は、妙に顔を歪ませながら

ヨタヨタと僕の目の前まで戻ってきた。

後から気づいたんだけど、彼の顔と動きは僕に威圧感を与えるための動作だったようだ。

僕の数センチ前まで顔を近づけて、

「せくなくくく、お前、ナマ言うようになったじゃねえかよくく」
と、凄む。

半ズボンで。

以前の僕ならビビッて言うことをきいていたんだと思う。

でも、ヒル魔さんと毎日顔を合わせ、進さん、阿含さん、我王さんから強者と対戦してきた記憶がある

僕からみれば、小学生の恫喝は、なんというか、微笑ましかった。

「もっかい行ってみろよ、あつあくん！」

芝居がかっている、ヤンキー物のテレビドラマか漫画でも見て練習したっばい。

現時点で僕より背が高いけど、半ズボンで声変わりしてない甲高い声じゃあ迫力ゼロ。

阿含さんの「あ」に濁点をつけたような声とは比べるべくもない。多分、夜中に鏡の前で一生懸命ポーズとか顔つきとか練習したのだろう。

そう思うとその微笑ましさに笑いがこみ上げてくる。

顔がどうしてもニヤけてしまう。

しかし、流石に笑っては失礼だと思い、顔を伏せて耐える。

「……………ふふん」

それを見たいじめっこリーダーは、僕がびびったと思ったのだろう、

満足するように息を吐いたのがわかった。

「もう逆らうんじゃねーぞー」

そう言っ歩いていこうとする。

どうしてやろうか？

1：彼らが視界から消えるのを待つて、置いてあるランドセルを川に捨てて学校へ行く。

2：大人しくかばん持ちをする。

3：面倒くさい、叩きのめす。隙だらけの背中にデビルバットダイブ！

だが、答えを出す前に助けが入った。

「あななたち、セナに何やってるの!!!」

と言ってこっちに走っってくる女子小学生がいた。

あ、まもり姉ちゃんじゃないか。1つ年上の幼馴染だ。

「どこのアイドル？」っと思うくらいのハーフの美少女。

実際、スカウトの人とかがまもり姉ちゃんの家は何度か来ていたが、

本人は超がつくほど真面目でアイドルなんかやる気ないし、親も、

「まだ人として未完成な子供を世間の晒し者にする気はない」

と、ぴしやりと断ったようだった。

気弱だった僕をずっと弟のように思ってくれていていつも助けられている。

正直まもり姉ちゃんには感謝の言葉しかない。

僕にとって本当の姉のような存在が彼女だった。

「大丈夫？ セナ」

あつと言う間にいじめつ子たちを追っ払ったまもり姉ちゃんが心配そうに僕を見る。

妙な記憶が増えてはいるが、今までの自分のこともちゃんと覚えていたので、

今まで通り、気弱で頼りない小早川セナを演じることはたやすいが、

この人に嘘はつきたくなかったので、今の自分の素で対応することにした。

「大丈夫だよ、まもり姉ちゃん、僕はあるのにはもう負けないから」
にっこり微笑んでそう言った。

「……セナ、なんだか……変わった……よね？」

当然、首を傾げて疑問に思うまもり姉ちゃん。

そりやそうだ、ついこの前まではあいつらに泣かされてたんだから。

「あ！……で、でも悪い意味じゃないのよ、落ち着いたらって言うか……ね」

なんだか顔を赤くして慌てて言い繕う。

「うん、ほら、男子三日会わざれば活目してみよって言うじゃない」

(……何だかよくわからないけど男の子なんだし、成長したってことかしら)

「ふくん、まあいいわ、セナがすっかりしてくれるのなら私も安心だし」

まもり姉ちゃんは納得してくれたようだった。よかった。

よくわからない記憶分、いきなり数年分は成長してるからね、脳内のみの成長だけだ。

「誰だ!!」

って言われる可能性もあったけど、

そんなことまもり姉ちゃんに言われたら流石にショックで立ち直れないよ。

学校が違うのでまもり姉ちゃんとはそこで別れた。

放課後、当然のように朝のいじめっ子達に絡まれたが、

リーダー格のいじめっ子を含めた三人を真正面からデビルバットダイブ一撃で吹き飛ばして決着した。

三人とも数メートル吹き飛んで気絶したので帰った。

次の日の朝、いじめっ子リーダーがいたのでとりあえずデビルバットダイブをかました。

吹き飛んで気絶したので登校した。

下校時、帰り道の公園でいじめっ子リーダーが仲間二人と待ち構えていた。

「せな、よくもさつきはやってくれたな」

と、三人がかりで殴りかかってきた。

が、動きは遅いし単純なのでステップで簡単に避けれる。

試しにロデオドライブをやってみたらできた。

理屈がわかっているとはいえ、子供だからか、この体は異様に飲み込みが早い。

と、考えてたら一人のパンチが避けられないところまで来ていた。

とつさにデビルスタンガン。っというかただの手刀だけだ。

で、パンチを叩き落した。

鍛えていなかった腕が痛かったが、阿含さんの手刀の痛さを覚えていた僕にとっては

無視できる痛みだった。

僕にパンチを迎撃された奴は、腕を押さえて痛い痛いと言っている状態だ、

そんな彼にデビルバットダイブ！

一応フォロワーしておくけど、小学生にやったデビルバットダイブは全て手加減している。

僕のほうもヘルメットないので怪我するし、

相手にぶつかるといふより、頭と両手で押し出すという感じで吹き飛ばしている。

残り二人も同じように吹き飛ばした。

じゃ、帰ろうかな、と思つてたら。

「強いな、3対1なら助けがいるかと思つたが、必要なかつたようだ」と、声をかけられた。

見ると、僕より少し背の高い、髪の短い精悍な感じの子供がいた。ランドセルを背負っているのと同じ小学生みたいだ。

話し方が子供らしくない子だと思つて顔をよく見ると、なんかピンとくる知つた顔だった。

でも知つていたらおかしいので名前を尋ねる。

「俺の名前は進、進清十郎だ」

彼とはその後、いろいろ話をした。

この公園はランニングの途中でよく通るのだそうだ。

その時に3対1のケンカを見て、止めに入ろうしていたが、僕の動きに見入ってしまったて入れなかったのだそうだ。

すまん、と謝られてしまったが、そんなこと言われたらこっちが恐縮する。

で、あの動きは何だと聞かれたので、アメフトのステップの話をしした。

そして将来、というか、中学に入ったらアメフトをやることも話した。

「アメリカンフットボールか……」

進君は僕の話聞いてアメフトに興味を持ったようだった。

僕との出会いが進君のアメフト開始フラグだったのかな。

原作に進清十郎のアメフト開始エピソードはなかったはずなのでまあどうでもいいや。

ちなみに、呼び方が「進君」になっているが、

小学生だとたとえ年上でも「さん」付けはないので自然と「進君」となった。

正直、呼び方に違和感があるがしようがない、高校になったら「進さん」に戻そう。

お互いにケイタイなんか持っていないので、名前と学校名、それと、

いるとすれば大体どの時間にどの公園でトレーニングしているかと教えあつてその日は別れた。

次の日の朝、いじめっ子リーダーを含めた三人が、

「もういじめないから許してくれ、今までのも謝るからごめんなさい許して下さい」

と、土下座してきたのでもーいーよーと水に流してあげた。

アメフトができるのは中学からだ。

なのでタックルなどの実戦経験は小学生の間はどうしようもない。なのでいじめっ子達との喧嘩はよい練習になると思っていたので少し残念だった。

小学校を卒業するまで朝と夕方の二回ずつと続けるつもりだったのに。

それを言ったらいじめっ子達は真っ青になって震えていた。

クラスメートから感謝された、どうもあちこちで悪さをしてた子だったようだ。

まもり姉ちゃんからも褒められた。

「セナ、本当に強くなったわねえ、いじめてた子をやっつけたことじゃないわよ、

あなたが負けない心を持ったことが嬉しいの」

そう言つてまもり姉ちゃんは僕に優しい笑顔を見せてくれる。

「……でも、少し寂しい気もするけどね、ホント、あつという間に成長するんだもん」

小さい声でつぶやくように言う。

自分が庇護しなければならなかった小さな男の子が、

今や強い意志のこもった目をした凛々しい少年になっている。

「え？ 何か言った、まもり姉ちゃん」

「な、何でもないわ……セナ、かつこよくなったよ」

取り繕うようにエへへと笑つて言うまもり。

「そ、そう……ありがとうまもり姉ちゃん」

こんな綺麗な人に眩しい笑顔で言われると照れるし、そこの少年

なら惚れるだろ、と思うが、

前世っぽい記憶と合わせるのもうかなり長い付き合いの姉なので恋愛感情にはなりそうにない。

まあ、まもり姉ちゃんにとっても、僕を弟としての発言なのだろうから誤解などしない。

それからはトレーニングは朝晩もランニングと放課後に公園ですテップの練習を毎日続けた。

過度な筋トレはやらなかった。

筋肉が成長を阻害するとどっかのテレビで見た記憶があったからだ。

そうやって数ヶ月が過ぎて、一つ思ったことがある。

それは……

セナは、天才の部類に入る、才能の塊ということだった。

確かに、原作の小早川瀬那は絶え間ない努力の末に大きく成長し、その結果、日本最速のランニングバツクとなった。

でも彼は、高校入学の時点でもう既に最速だった。

それは小学生の頃からパシリで走らされていたからという理由があるが、

それだけでは説明できない。

登下校時にランドセルを持って走らされたって、1日1往復でしかない。

言い換えれば一日にダッシュ2本しかしていないことになる。

それだけで高校生の初めには日本屈指のスピードだ。

小学生の頃からスポーツの英才教育を受けてトレセンみたいな所で優秀なコーチの下で

理論的なトレーニングに栄養管理等をみっちりやっている子供は大勢いる。

そんな子供達を一日二本のダッシュだけで追い抜いてしまった瀬那は絶対天才だと思う。

最初は速いだけの選手という印象で、神龍寺戦で天才の領域に一步

入ったという感じだけど、

実際の所、その速さだけでも十分天才の片鱗を見せていたと思う。さて、そんな瀬名が小学生の頃から本格的にトレーニングをしていたらどうなっていたか？

それを僕が、小早川セナが実践してみようと思う。

今日は進君と公園で一緒にトレーニングをする約束だ。

「いってきまーす」

僕は家を出て、ランニングで公園に向かって走った。

2nd down 中学生時代

中学生になり、僕は予定通りアメフトをはじめた。

進学した公立の中学校にアメフト部はなかったので、少し離れた町のクラブチームに入った。

中学のアメフト選手権はオープン参加なので学校でなくても出られる。

ずっとトレーニングばかりだったので、アメフトをプレイするのは楽しかった。

まだ40ヤード走4秒2は出せないし、最終奥義のフォーサイドインションも筋力不足で無理。

でも楽しかった。

夢中でただひたすら走った。

……2年後、小早川セナの所属するチームは東西大会で優勝し、日本一になっていた。

一年生の時は関東中学アメリカンフットボール選手権の決勝まで進出した。

中学アメフトのチーム数は高校より遥かに少なかったとはいえ、勝ち抜けたのはセナの力が大きかった。

ほとんどワンマンチームといってもよかった。

しかし、流石に優勝はできなかった。

相手チームはセナに徹底した大人数のマークをつけ、あっさり敗退した。

いくらセナがケタ外れに能力の高い選手であっても、

アメリカンフットボールは一人では勝てないスポーツだった。

しかし、無駄ではなかった。

この敗退で奮起したのはセナのチームメイト達だった。

敗北に下を向かず、上を向いたのだった。

セナがいれば勝てる。と明確な指針が出来たのが大きかったのか、

敗退した次の日から猛練習を開始した。

セナを中心とした、彼を活かすフォーメーションを考え、ひたすら練習した。

セナもそれに答えて懸命に練習し、そして。

中学二年時の大会で見事優勝したのだった。

小早川セナはランニングバックが樹立可能な記録、

ゲインヤード数、タッチダウン数、リターンタッチダウン数等の色々な記録、

一試合における記録も一大会における記録も全て大幅に更新していた。

結局、1対1で止められたことが一度もなかった。

小学生の頃から明確な目的を持ってトレーニングを続けてきたセナは、

そのスピードだけでなく、判断力も覚悟も同年代のそれを大きく上回っており、

最早中学生では彼を止めることは不可能と言ってよかった。

スピードは中学どころか高校、大学でもトップクラス。

スタミナもあり、オフENSスだけなら一試合十分持つほどある。

手の使い方も上手く、相手選手を近寄らせない技術も持っている。

ディフェンスがリードブロックをしても、

それを瞬時に察知してかわす瞬間的な判断力も持っている。

運よくブロックが成功しても、彼に触れた瞬間スピニングしてブロックを弾き飛ばしてしまう。

結論として、小早川セナを止める方法は、大人数で隙間なくラインを作り、

サイドラインに押し出してしまうしかなかった。

当然、世間は彼に注目した。

高校、大学、社会人の一流選手や監督の目からみても、

中学生の彼が日本屈指のランニングバックだった。

このまま成長すれば高校入学時にはどれだけの選手になっていることかと日本中が期待していた。

マスコミもセナを頻繁に取り上げるようになり、雑誌にもよく載るようになった。

当然、アメフト部のある高校からは、特待生としての入学の誘いが沢山きた。

そして中学三年の春。

あっちこっちの高校から誘いが来たけど、僕はどこの高校へ行こうか悩んでいた。

知っている高校からはほとんど誘いが来ていた。

あの帝黒や神龍寺からもきていた。

どこへ行つたつていい。

原作なんて関係ない、そんなものは僕が小学生の時に崩壊している。

でも、ここへきて、泥門へ行つてかつての仲間達ともう一度一緒にアメフトがしたいという、

なんていうか「誘惑」に駆られるようになってしまった。

今の中学のアメフト仲間達との練習と試合で培った想いがそう考えさせたのかもしれない。

過去を、というかこの場合は前世かもしれないけど、を懐かしがっているだけかもしれない。

それでも、一度そう思ってしまったらなかなか頭から離れなくなつてしまった。

「・・・とりあえず、僕はまだ3年になったばかりなんだし、もうちょっと考えて答えは先延ばしに・・・つと」

考えた所で、僕はあることを思い出した。

「僕が中学3年つてことは、ヒル魔さんは今高校一年、今年泥門に入つて栗田さんや、武蔵さんと

アメフト部を創設してる頃じゃないかな？」

ヒル魔さん達は僕より1つ年上なんだから当然だ。

そう気づくと、僕は居ても立ってもいられなくなり、

「そうだ、泥門高校まで見に行つてみよう」

と思いつき、行ってみることにした。
通り慣れた？高校だし、電車でそんなに遠くないので今から行ってみることにした。

泥門高校の校門前まで来ていた。

何年ぶりだろう？

今の僕で言えば生まれて初めて来る場所なんだけど、前世っぽい知識を含めて言えば……

大学4年間、そのあとアメリカに渡って1年くらい、

今の自分になって、小学生で2年間、中学生で約2年だから、9年ぶりくらいかな？

懐かしさに浸りつつ中に入る。

セキュリティ？ 何それ？ みたいな学校なのは知っているのに入るのは躊躇はない。

まっすぐアメフトの部室に行く。

「今日は練習しているかな？今は部室にいるかな？」

いや、ヒル魔さんはアメフトだけは誠実な人だから、練習はしているだろう。

もしいたらどうしよう、あ、何を言えいいのか全く考えていなかった。

なんて考えながら、部室の前まで来る。

「あれ？」

しかし、

そこにアメフト部の部室はなかった。

代わりに……

「な……なんだよ、ラクロス部って!!!」

よく知らないスポーツの部室になっていた。

「ど、どういうことだろう？場所はここで間違いない、間違えるわけがない、

ずっとここに通って練習していたんだ、でも・・・どうして？」
アメフト部があることは疑っていなかったので予想外の事態に戸惑う。

「ヒル魔さんがアメフト部を立ち上げたのはもう少し後だっけ？」

「……………忘れた」

もしくはそもそもそんな時期なんか知らない。

「いや、ヒル魔さんが入学してすぐ動かないわけがない」

部員を集めるには入学直後が一番勧誘しやすい、そんな時期を逃すわけがない。

ヒル魔さんなら入学前から動いていたっておかしくはない。

もう高校生になってずいぶん経つのに何もしていないはずはない。

何かおかしい。

「……………あっ！」

一つ思いついた。

「今は武蔵さんが辞めちゃった直後なんじゃ？」

確か武蔵さんの父親が怪我をして仕事を継ぐためにアメフト部を辞めたはずだ。

戻ってくるまでかなり時間が掛かってたけど・・・今はその時期なのかな？

「それなら今日いないのは納得できるけど…………って部室がない説明がつかないじゃないか」

やっぱり今の僕は少々パニックっているな。

「しようがない、こうなれば最終手段だ」

僕は職員室へ走っていった。

最終手段とは、単純に学校の先生に尋ねることだった。

確か、ヒル魔さんは入学直後に校長を脅したりしてたはずなので、知らない先生はいないだろう。

個人情報？何それ？みたいな学校なので教えてくれるだろう。

で、職員室で聞いてみると、驚くべき答えが返ってきた。

蛭魔妖一

栗田良寛

武蔵厳

『本年度の生徒にそんな名前の生徒はいない』

.....

え？ いない？

今年の入学生どころか、在校生にもいなかった。

いないの？ヒル魔さん達・・・どうして？

当然、泥門にアメフト部は存在していない。

.....

.....

.....

もう、何が何やらわからなかった。

・

呆然とした僕は、家まで歩いて帰ってきていた。

途中何キロかの道のりを歩いたはずだが、覚えていない。

家に着いた頃にはすっかり夜になっていた。

そして、ようやくにして僕は、一つの仮説を思いついた。

「僕という人間、以前と違う小早川セナがいる以上、この世界は単純に過去に戻った世界ではなく、

僕という存在がいた場合の別の可能性の世界なのだろう、

そして……どうやらこの世界は……

ヒル魔さん達がいらないパラレルなワールドなのか……」

僕はショックで熱を出して寝込んでしまった。

そして、その仮説が間違っていたと知るのはもっと先のことだった。

3rd down ともしび

熱は一晚で下がったけど、なかなかショックから立ち直れなかった。

ヒル魔さんの存在というのは僕にとって大きかったことがいとわかって初めてわかった。

僕にアメリカンフットボールを教えてくださいました。

……騙されたのか脅されたのかよくわからないうちにアメフトをやらされていたが。

戦うと言うことを行動で教えてくれた人。

……ハツタリ込みだが。

アメリカ横断デスマーチで膝を腫らしていたが、弱音どころか痛がるそぶりも見せずに

ケケケと笑いながら皆を引っ張っていた人。

……後で治療したまもり姉ちゃんから教えてもらった。

そんな人がこの世界にはいない……

自分でも驚くくらい、気が抜けてしまっていた。

世界が色褪せたようにすら見えてしまい、毎日続けているトレーニングすらやっていない。

魂が抜けたような状態の僕に、まもり姉ちゃんや両親は心配してくれたが、元気が出なかった。

まもり姉ちゃんやんは毎日のように家に来てくれている。

でも何があつたのか話しようがない。

申し訳ない気持ちで一杯になり、心配かけないように、トレーニングだけは再開した。

そんなある日。

家にまた高校のスカウトがやってきた。

以前もきた学校だけど、今回来たのはスカウトの人ではなく、高校の監督らしい。

その監督は一人の今年高校一年になる生徒を連れてきていた。

その生徒を見た瞬間、僕の全身に電気が走ったような衝撃を受けた。

そうだ……この人はいたんだ、いることが確定している世界なんだ。

やってきたのは、王城ホワイトナイトの庄司監督。

一緒にやってきたのは、進君だった。

「……………」

「……………」

僕と進君は、近くの公園でランニングをしていた。

提案したのは進君だったが、やってきた監督は最初から僕と進君を話させるつもりだったようで、

僕らはすぐに家を出て走っていた。

いつも走っている周回を終え、軽く歩きながらクールダウンをする。

「……………セナ、心肺機能が少し落ちているな、トレーニングを休んだのか？」

進君が全く表情を変えずに聞いてきた。

相変わらずすごい人だと思う。

顔がわからなくても筋肉のつき方で人の見分けがつくし、

今のも呼吸の荒さからそう判断したのだろう。

ちよくちよく一緒にトレーニングしていたとはいえ、よくわかるなと感心する。

「……………うん、ちよつと……落ち込むことがあってね、休んでいたんだ、

でももうトレーニングは再開しているよ」

これ以上多くの人に心配をかけたくなかったので多少無理して元気にそう言う。

「……………」

進君は責めるようでもなく、ただ無言で僕を見る。

この人に誤魔化しはききそうにない。

いつそこと、思い切つて僕は話してみることにした。

「……えつとね、聞いてくれるかな？」

「ああ」

「僕がね、アメフトをはじめる切っ掛けをくれた人がね、いなくなつちやつてさ……」

「……それで……自分でもわからないくらいショックで、自分でもわかつてはいるんだけど、」

「気が抜けちやつて……どうしようもなくて……何か欠けてしまつたみたいで……」

「僕は特に考えずに、胸の中に溜まっている何かを吐き出すように話した。」

「支離滅裂なことを言っていることはわかつていたけど、何故か進君にならわかる気がした。」

「……………」

「じつと聞いていた進君は、しばらく黙つた後、僕の目を見て話し出した。」

「セナ、お前はアメリカンフットボールを辞めたいのか？」

「ド直球で聞いてきた。」

「そ、そんなわけないよ、やめるなんて……ありえないよ」

「僕は間髪入れず返事した。迷うこともない質問、それは、それだけはない。」

「それを聞いた進君はほつとしたようだった。」

「続けて話し出す。」

「では、誰かは聞かないが、その人物にアメリカンフットボールを教えてもらつたことに、」

「アメリカンフットボールに出会えたことに、お前はどう思っている？」

「ど、どうつて？」

「考えるな、感じたことをそのまま言えばいい」

「……………」

「……………」

進君はじつと僕が答えるのを待っている。

僕は目を閉じて素直にその想いを口に出してみた。

「……………うん、僕は、出会えたことに、幸せと感謝を感じるよ」

ヒル魔さんに出会えたことや、アメリカンフットボールに出会えたことを思うと、

自然とそう言葉が出た。

「ならば、今のお前は間違っではない。

出会えたことが幸せで、いなくなったことがそれほど悲しいのならな」

「……………！」

進君は、元気を出せと励ますのではなく、落ち込んでいる僕に、それは正しいことだと言ってくれた。

「しかしな、セナ」

進君はゆっくりと話し出す。

「お前がそのまま立ち止まっていれば、その想いはいずれただの軽い思い出になってしまうだろう」

「……………え」

「お前が幸せだと思っていることも、幸せ「だった」思い出になっただろう」

……………それは、いやだ。

「その出会いが全て、無かったことになってしまふ、お前はそれでもいいのか？」

「……………いやだよ、そんなの……………絶対に嫌だ！」

僕は叫ぶように言っていた。

「ならば、進め、小早川セナ、それが……………その人物との絆を繋ぐ唯一の方法だ」

「絆を……………繋ぐ……………方法？」

「そうだ、お前が受け取ったものは、今もお前の胸の中にあるのだろうか？」

「……………ある……………あるよ」

僕は無意識のうちに服の胸の辺りを握り締めていた。

そうだ、覚えている、ヒル魔さんから教えてもらったこと全て、こんな時、ヒル魔さんならどう言うか、何をするか、わかる・・・わかるよ。

ヒル魔さんだけじゃない。

アメフトをやっていて関わった全ての人達の想いも、全て覚えている。

ああ……………いた……………ここにいた。

この世界にはいなくても、僕は覚えている。

僕の中にいたんだ。

よくある言葉だけど、本当にあることだから、よく使われる言葉なんだ、これは。

『大切な想いは、心の中で生き続ける』

僕の中に、アメフトに対する情熱の灯がまた灯った瞬間だった。

気がついたら、僕は涙を流していた。

そんな僕を見て、進君はこう言った。

「ありがとう、セナ、出会ったことを無駄にしないでいてくれて」

「え、礼を言うのは僕のほうじゃないか、どうして進君が？」

涙を拭って言う僕に、進君は続けた。

「それはな、お前にとって出会いの幸せをくれたのがその人であるならば、

俺にとっての出会いの幸せをくれたのが、他ならぬセナ、お前だからだ」

「え」

「え」

驚きの発言だった。

「何をすればいいのか探していた俺に、アメリカンフットボールを教えてくれたのはお前だ」

そんな僕が落ち込んでいるのをみていられなかったという。

そんなことを真正面から目を見てはつきりと言われるのはとても照れくさかった。

でも、嬉しかった。

「ありがとう、進君、おかげで助かったよ、僕はもう大丈夫」

にっこり笑ってはつきりとそう言えた。

照れくさくて言えなかったが、進君と友達になれて本当によかった。

かっこいいよ、進君、僕が女性なら絶対惚れてるよ。

「そうか、ならば来た甲斐があつたな」

と、そう言った進君は、何か思い出したようにいい重ねた。

「そうだ、セナ、今日、庄司監督と来たからわかるように、俺は王城に進学した」

そういえば、そうだった。

王城は中学から大学まで一貫だし、僕の記憶から、進さんが王城に行くのは確定事項だったので

庄司監督ということに疑問に思わなかった。

「俺は王城でアメリカンフットボールの日本一になる！」

力強く断言し、そして、進君は僕を改めて見て、こう言った。

「セナ、俺と一緒に王城でクリスマスボウルを目指さないか？」

4th down エンカウンター

迷いがなくなって、トレーニングにも集中できるようになってきた。

結局、まだ進学先は決まっていない。

進君は、僕を誘いはしたが、返事は今しないでもいいと言ってくれたからだ。

僕の可能性を狭めたくないのだそうだ。

「だが、出来れば来年、お前と一緒にプレーがしたい」

と、まっすぐな瞳で僕に言った。

「……もう、何というか、かっこよすぎだよ、進君。
痺れるよ憧れるよ。」

こんな人が友達だなんて嬉しくなって、まもり姉ちゃんに会った時にその思いを話した。

いかに進君が男らしくかっこいいかを嬉々として話した。すると、まもり姉ちゃんは口の端をヒクヒク動かしてひきつった表情をしていた。

「どうしたのさ、まもり姉ちゃん」

「……せ、セナ、友達と仲良くなるのはいいけれど、それ以上行っちゃ駄目だからね、

いいわね、そっちの道は進んじや駄目よ、ねー」

僕の両肩をがっちり掴んで真剣な表情でそんなことを言うまもり姉ちゃん。

そっちの道ってなんだろう？

とにかく、返事は中学最後の大会後に行うことになっているので、今は練習あるのみ。

そして、最後の大会の関東大会が始まった頃から、ようやくにして、僕の頭の中でのイメージに、

実際の体の動きがついてこれるようになってきた。

車は新車は最初の数千キロは全力で運転してはいけない「慣らし運

「転」というのがあちらしいけど、正にそんな感じだった。追いついた。

僕の脳に体がようやく馴染んできた。

自分ではそんなつもりはなかったが、僕はようやく自分の体に、怪我しないようにリミッターをかけていたようだ。

この前までは40ヤード走のタイムは4秒4を少し切ったくらいだったが、

今、全力で走ったらどうなるのだろうか？

僕は、次の試合で試してみることにした。

才能とは、繰り返し反復練習をして体に覚えさせるというプロセスを飛ばして、

イメージをそのまま体が勝手に正確に動いてくれること。

それを才能というならば、それが出来る人間を天才というのならば。

小早川セナの前世とも言わべき肉体的経験をも含んだ記憶は、一度も聞いたことのない技術を、

走り方の微妙なコツを、

経験からしか得られないような判断力を、

最初から何のプロセスも経ずに自らの経験として知っていたセナの才能は、

正に天才と呼ぶに相応しいものだった。

元々才能のあるセナが、幼少の時から全盛時の未来の自分自身というこれ以上ないコーチを得、

自分の記憶故に100%完璧に内容を伝えられるという、

通常では不可能なレベルの英才教育を受け続けて来た結果。

40ヤード走のタイム：4秒1

という、日本人には不可能とされていたタイムを叩き出すに至った。

え、人間の限界が4秒2で、それを越えたのがパンサー君の4秒1

じゃなかったっけ？

パンサー君と並んじやったよ。

なんかすごいね、僕。

一度フルパワーで走ったけど、脚は大丈夫だった。

流石に脚に来る負担は大きかったけど、セーブしながらなら一試合フル出場もできる。

試合では、本気を出したのはこのワンプレーだけで、後は走るフリをだけしてるだけで、

マークが皆僕についたので、僕以外がフリーになって大量点差で勝った。

その試合のそのワンプレーで、セナは、

日本アメフト史上、最高のランニングバック

という評価を不動のものとする。

そして、本人も気づいていなかったが、反応速度も以前とは比べ物にならないくらい鋭くなっていた。

金剛阿含のリアクションタイムは0.11秒で人類のほぼ限界に達しているが、

セナのリアクションタイムは0.12秒、阿含に百分の一秒差まで縮まっていた。

試合の次の日、休むのも練習だということまで完全休養となつていく。

まだ中学生なのだから休むのも練習だとか、筋肉に穴が開いているから無理はよくないとか、

そこを休むことで超回復させるのだとか、コーチが言っていた。

言ってることは全ては理解できないが、正しいことを言っているのはわかった。

アメリカ横断デスマーチの経験者としては緩い気がするけど、普通の中学生ならばこれが正解なのかな？

練習禁止なのでどうしようかと思つてたら、母親から買い物頼ま

れた。

暇なので引き受けた。

玄関を出た所で、王城大学附属高校の制服を着たまもり姉ちゃんとはったり会う。

まもり姉ちゃんは今年から王城に通っている。

彼女は最初は僕と一緒に高校がいいなと言ってくれていた。

でも、もつとレベルの高い高校へいけるのに僕に合わせたせいで行けなくなるのは悪いので、

まもり姉ちゃんの学力に合わせた高校へ行つてほしいと頼み込んでなんとか承諾してもらった。

で、まもり姉ちゃんは王城大学附属高校を選んだ。

偏差値も高く、僕では絶対受からない高校だが、

アメフトも強く、スポーツ特待生の制度もあるので僕が来る可能性もあるしね。と言っていた。

買い物に行くことを話すと、一緒に行きたかったとすごく残念そうだった。

そんなに買い物に行きたかったのか、女の人って買い物好きっていうからね。

「生徒会になんか入るんじゃないわ、せつかくセナとデートが……」

何かぶつぶつ言っていた。

そう言えば、最近になって僕とまもり姉ちゃんとの関係が少し変わってきたように思う。

具体的には、僕が頼りつきりであったのに、最近は少々頼られるようになってきた。

アメフトで体力がついたからなのだろうか。買い物の荷物持ちなんかもするようになった。

これはとてもよいことだと思う。心配かけてばかりだったので、対等な関係っぽくて嬉しい。

頼まれた物を買ったその帰り、僕はクルクル回る人に会った。
瀧くんだった。瀧夏彦くん。

「アハーハー」

と笑いながらY字バランスを取りつつクルクル回っている。

周りの人はドン引きしていたが、僕は懐かしいなあと、ついまじまじ見てたら、

「ン、どうしたの、ボクの顔に何かついてる？」

と、声をかけられた。

とつさに彼が着ていたアメフト選手のTシャツを指差し、

自分もアメフトやっているとつい、と適当な言い訳をした。

それからその場で彼と話をした。

お互いアメフト好きとあって話が弾んだ。

瀧くんはもうすぐアメリカに行くのだという。

原作ではアメリカで会っているからその出発前だったのか。

高校を落ちたからではなく、最初からアメリカに行くつもりのように。
だ。

なんでも、

「まずプロのアメフト選手になってからハリウッドデビューをするの
さー！」

と、自信満々に言い切った。

英語は話せるの？

俳優って、演技できるの？

そもそもアメフトのルール知ってる？

という当然の疑問にも、

「ボクは天才だからノップロブレムさー！」

と、にこやかに輝く歯を見せて笑うのみ。

そんな夢を叶えるために「とりあえず」渡米するのだそうだ。

すごい行動力だ。素直に感心すると。

「ボクは天才だからノップロブレムさー!!」

とニツカリ笑って同じセリフを言った。

僕はこの人は天然ではあるが決してバカではないと思う。
学校の成績のことではなく、進める人は偉いと思う。

「ところで、どうしてこんな街中でクルクル回ってたの？」
と聞いてみると。

「妹を待っていたのさ、今日は妹と一緒に買い物に来ていてね」
待つのにどうして回るのかと聞くと、

その方が目立つからという理解できない答えが返ってきたが……
妹って。

「え、鈴音が来てるの？」

「?、どうして妹の名前知ってるの、セナくん」

あ……つい昔の呼び方を言ってしまった。

誤魔化さなくては。

「え、えーと、さっき言ったじゃないですか、妹の名前」

「言ったつけ？」

「言いましたよ、確かに言いましたよ、うん」

「そうだったけ？」

「そうですよ、でなきや知ってるわけないじゃないですか！」

「それもそうだね」

瀧くんはコロリと騙された。

……ゴリ押しで誤魔化せた、よかった、瀧くんバカでよかった。

あ、バカって言っちゃった。

そんなことを道路脇で話していると、

「あ、見つけた、バカ兄貴！」

インラインスケートを履いた少女が飛ぶように滑ってきた。

「待ち合わせ場所に来ないから探したわよ、ここで何してるのよ！」

瀧くんの目の前でピタリと停止し、猛然と捲し立てる鈴音。

……鈴音だ、久しぶりだな。

「この方が目立つから移動したって……それならそれで連絡くらいしてよねー」

．．．．．それにしても、鈴音は全然変わらないな。

今は僕と同じ年だから中学三年のはずだけど．．．．．
．．．最後に会ったのは、僕がアメリカにプロテストを受けに渡米する際だから、

その頃と今が同じって．．．色々と成長してなかったんだな．．．
「それで、誰と話してたの．．．．．よ．．．．．」

鈴音はそう言いながら、瀧くんと話していた僕を見る。

．．．おっと、今度はうつかり口走らないようにしましょう、初対面で名前を呼び捨てなんて失礼だしね。

しかし、鈴音はセナと目が合った途端、驚愕に目を見開いて、こう言った。

「うそ．．．．．セナ．．．．．さん」

「え?!」

今、鈴音は僕の名前言ったよね、初対面でまだお兄さんから紹介すらされていないのに。

．．．あ、初対面で相手の名前を言ってしまうのって、今の僕と同じじゃないか？

ひよっとして、鈴音も僕と同じ記憶みたいなのがあるんじゃないか？
．．．ん？でも、今僕のことさん付けで呼んでたような．．．

「あ、あの!!!」

気づいたらすぐ目の前にした鈴音が、ものすごく緊張した様子で僕に話しかけてきた。

やっぱりそうなのか。

鈴音を見ると、何故か顔が真っ赤だった。

そして、カバンから四角い画用紙みたいなのを取り出すと、僕に両手で差し出した。

見ると手が震えていた、どうしてそこまで緊張しているのだろうか？

何か違和感を感じ始めた時、鈴音は大きな声でこう言った。

「セナさん、私、あなたの大ファンなんです、サインください!!!」

「．．．．．え」

目が点になった。

とりあえず三人は近くの喫茶店に移動して話をすることにした。移動する間も鈴音は顔を赤くして俯いたままあまり話そうとせず、チラチラと上目使いでセナを見ているだけだった。

(・・・鈴音どうしたんだろう?)

僕の知っている彼女はもっと遠慮なく話し掛けてきたはずなんだけど・・・

ここはパラレルなワールドなんだから、鈴音の性格も違うのかな?)

鈴音の様子を不審に思うセナだったが、それはセナが鈍いから気づかないだけで、

鈴音の様子は、端から見れば丸わかりだった。

つまり、彼女の様子は、

恋する乙女そのものだった。

セナは、自分の行動でいろいろ変わってはいるみたいだけど、それだけではないこともわかっていった。

偶々覚えていた創立記念日の天気違った。

顔を覚えていたテレビのニュースキャスターのほくろの位置が違っていた。

等々、自分とは絶対関係ないようなことも、記憶とは違っていたのでセナはそう確信していた。

よって、鈴音の様子もそんな違いのうちの一つかと軽く納得してしまっていた。

(・・・それにしても・・・なんとというか・・・話さないといつか、

お淑やかな鈴音って違和感があるというか・・・いや、こんな鈴音も・・・)

「あ・・・あの、セナ・・・さん?」

自分をじつと見るセナについ声をかける鈴音。

「可愛いなって思ってた」

つい思考の続きを声を出してしまうセナ。

「えっ!!!か、可愛い?」

「え、あ、あの……そのですね」

うっかり口説き文句のようなことを言ってしまったセナは慌てて弁解もどきを口走る。

(か……可愛い……私を……あの……セナさんが)

お互い真っ赤になって押し黙ってしまった。

鈴音にとっては大ファンのセナと会えて話ができるのだから緊張の極みだった。

兄が偶然道で会って話をしたのだと言う。

鈴音は生まれて初めて兄に心から感謝した。

セナを知った切っ掛けは、中学一年の時、

いろいろなスポーツをやる兄がアメリカンフットボールを始めようとしたことだった。

瀧兄妹のいる中学にはアメフト部はなかったので、

都大会の試合を見に行った時に試合をしていたのが、セナだった。

セナはアイシールドもしていないし、本名で試合に出ていたので顔は見れた。

そのプレーは衝撃的だった。

鈴音がセナのプレーをみて最初に思ったことは「美しい」だった。

速いものは美しい。と、どこかの本で読んだことがあったが、納得はしていなかった。

しかし、セナのプレーをみると納得できた。

もつとずつと見ていたいと思った。

そして、セナの顔を見た瞬間、心臓が跳ね上がるのがわかった。

……なんて楽しそうなんだろう。

セナは、アメフトをしていることを心から楽しんでいて。

プレー中も、ハドル中も、ベンチで応援中も、全て楽しんでいて。

特に、彼の目が、鈴音の気を引いた。

なんて力強くて綺麗な瞳なんだろう。と気づいたら見惚れていた。そんな鈴音がセナに夢中になるのに時間はかからなかった。

それ以降、セナの出ている試合は可能な限り見に行き、

彼が乗っているアメフト雑誌は全て買い、

切り抜いて部屋に飾っていた。

試合の休憩中にヘルメットを取って汗を拭うしぐさすらキョンとくるようになってしまった。

実は泥門時代より今の鈴音の方がセナに詳しかったりする。

本人は自覚がないが、セナに恋焦がれる女生徒は沢山いた。

泥門でのプレイ時代、エースとしての自覚を持つてからのセナは戦う強い意志を持つて

試合に臨んでいた。その覚悟は顔つきや目に表れる。

元々が整った顔の美少年だったセナに凜とした印象を加えたセナは同姓でも見蕩れる程だった。

セナ自身、告白をされたことはある、だがやはり、本人の鈍さもある上に、

その好意は、アメフトで活躍しているからで、自分自身にはないという思いもあり、

何より、アメフトが最優先のセナは、告白を全て断っていた。

アメフトを始める前は学校のクラスでも空気扱いであったことがその思いの根拠となっている。

ちなみに、彼に想いを寄せる女性に、彼の幼馴染や、来年から王城でマネージャーをする子がいるが、

当人は全く気づいていないし、知らない。

お見合いみたいに黙り込んでしまった二人に、全く空気を読まない瀧兄は、

こんなことを言い出した。

「セナ君、君ほどの実力なら日本はもったいないよ、一緒にアメリカに行かないかい？」

5th down それぞれの決断

アメリカに行つて、今すぐプロに挑戦する……
正直迷う。

いずれは行くつもりなのだ。ならば今行かない理由はないのではないか？

……

悩んだ末、僕は答えを出した。

・

中学最後の大会を優勝で終えた。

大会MVPとか、獲れる賞はみんな獲った気がする。

一つの区切りのような感じもするが、

僕にとってはようやくスタートラインの前まで来たという感じだった。

瀧くんに渡米を誘われた後、連絡先を瀧兄妹と交換し、

鈴音とは何回か電話やメールでやりとりし、だいぶ前のように話せるようになってきた。

でもやはり、今の鈴音はお淑やかな印象がある。

言いたい事をガンガン言わないし、兄をインラインスケートで踏んだりしない。

大きな声で笑わないし、よく考え事をするのか、ぼうっとしてることが多い。

前のように「やー」と言うことはたまにあるが、言った後慌てて俯いたりする。

お転婆なイメージが消え、友達という感じより、女の子という感じが強いので、

なんだか話していて照れる。

・

鈴音にとっては、好きな人の前でみつともない姿は晒せないし、

まだセナと会って話すだけでも緊張してどもるくらいだったので、

なかなか素の自分を晒せていなかった。

ふと気づいたらセナの顔に見惚れていたことも一度や二度ではない。

大会が終了し、表彰式の後、雑誌やテレビの共同インタビューとやらに出させられた。

色々と聞かれたが、最後に聞かれた「この先の進路」についてははっきりとこう答えた。

「僕は、王城に行こうと思っています」

小早川セナの王城ホワイトナイト入りの宣言は、彼の予想を大きく超えてあちこちに

影響を与えることになる。

これで王城ホワイトナイトには、

「高校最強のラインバッカー、進清十郎」

と

「日本最高のランニングバック、小早川セナ」

が揃うことになり、マスコミも大きく取り上げた。

色々悩んだが、決め手は彼の一言だった。

「セナ、俺と一緒に王城でクリスマスマスボウルを目指さないか？」

進君、いや進さんにこう言われて断れる人がいるだろうか？ いやいやない！

この日本には、戦ってみたい人が何人もいる。

僕はまずは、日本一の高校生を目指そう。

瀧くんの誘いを断ることになるのでその旨を電話しようとしたが、通じない。

鈴音に聞くと、彼はなんともうアメリカに行っていた。

「キャンセル待ちの便があったのでつい乗っちゃったよ、アハーハー！」

という、鈴音宛のメールを最後に連絡が取れないらしい。

海外でも使える携帯を持つてるから大丈夫だと思っけど、どうして

も連絡が取れなかったら、

アメリカまで探しに行くかもしれない。

と、鈴音は溜息を吐いていた。

王城に行くことを決めたのを一番喜んでくれたのは、まもり姉ちゃんだった。

「セナが後輩か・・・小学校以来だね」

見間違いかもしいないが、まもり姉ちゃん、泣いていたような・・・

特待生のテストというのを受けに、王城へやってきた。

スカウトをしておいて誘いに乗ると試験をするというのはおかしな話だと思ったが、

実質合格していて、いわゆる顔見世みたいなものなのだという。

相手をしてくれるのは、今年引退した三年の人達で、

黄金世代といわれる世代らしい。

前から思っていたけど、そういうのは周りから言われるものであつて、

自称するものではないと思う。

「俺達黄金世代」なんてよく恥かしげもなく言えるなあと思った。

仁王様みたいな人が話しかけてきた。

黄金世代のキャプテンのようで、プロレスラーにしか見えない。

今年黄金世代は神龍寺に惜敗したらしいが、お前がいれば勝てたかもしれないのにと、

非常に惜しんでくれた。見た目よりいい人みたいだ。

進さんもいたので少し話す。

「来たか、セナ、待っていたぞ」

進さんも嬉しそうだ。僕にしかわからない微妙な表情の変化だが。

呼び名を進君から進さんに変えた。学校の先輩後輩の関係で君付けは示しが見つからない。

他の1年2年の部員は後で紹介してくれるということで、グラウンドへ出た。

テストは簡単な試合形式で行われるのだそう。

僕は攻撃でポジションは当然ランニングバック、守備は全員が黄金世代。

現役の先輩達は見学ということらしい。

「負けを恐れずにぶつかってこい!!!」

と、黄金世代は僕に上から目線で言ってきた。

まあ、大先輩なんだから上から目線は当然なんだが、

我々は黄金世代なのだから、勝って当たり前、中学MVPとやらでも、

所詮は中学レベル、ちよつと揉んでやろう。

くらいの感じで正直舐められていた。

なので、先輩が蹴ったボールをキャッチした僕は、

そのままキックオフリターンタッチダウンを決めた。

プロレスラーの集団みたいな人達だけど、その分スピードがない、

触れられなければどうということはなかった。

庄司監督が満足そうに頷いていた。

呆然としていた先輩達であつたけど、我に返ると豪快に笑い出した。

「いや、まいったまいった、我々黄金世代の完敗だ」

そうは言っているが、まともなポジションやフォーメーションを組んだわけでもなく、

僕を走らせるのが目的の雑なものだったので、これがこの人達の実力ではないだろう。

・・・でも、完敗したと言いながらも黄金世代は自称するんだ。

その後、現役の先輩達と挨拶する。

「高見伊知郎だ、よろしく小早川君、君には期待しているよ」

「大田原だ、オマエすごいこのう、速くて見えなかったわ」

「桜庭春人、一緒にがんばろう」

「進清十郎、共にプレーできる日を待っていたぞ」

この辺はよく知っている方たちだ。

他にも次々と挨拶していく。

「神前」

「眉村」

「安護田」

「頂」

「岩鼻」

「具志堅」

「石丸」

「井口」

「中脇」

「上村」

「薬丸」

「艶島」

「釣目」

「金剛」

「え．．．．．ん？」

何か、看過できない人がいたような．．．．．こんごう？

現一年生で、僕の入学からは二年生になる先輩の中で、

進さん桜庭さんくらいしか知らないと思つてたけど、

すぐくよくよく知っている人が一人いた。なんでこの人が王城にいるのだろう。

金剛雲水さん。

「え．．．．．金剛．．．．．阿含さんの？」

僕のつぶやきを聞いた雲水さんは、軽く息を吐くと、

「そうだ、金剛阿含は俺の双子の弟だ」

と言った。

「．．．．．あ．．．．．そーなんですか」

驚きのあまりにしたりアクションができない。

「．．．．．ふ、阿含が神龍寺に行ったのに何故俺がここにいるのか疑問だという顔だな」

雲水さんは、何回か同じことを聞かれたことがあったのか、僕の考えをあっさりと見透かした。

「あ……は、はい……すいません、何か無礼なことを聞いて」すぐに謝っておいた。

捉えようによつては、雲水さんは阿含さんのオマケみたいに思つたと誤解されかねないからだ。

僕の場合は泥門時代の記憶から知っていたからなので、そんな失礼なことは考えていないのだが。

雲水さんは、気を悪くした風もなく、むしろ親しみをこめた目をして僕に言った。

「俺がここに居るのは……そうだな、ある意味、小早川セナ、お前のおかげでもあるな」

切欠はささいなことだったという。

雲水は最初、神龍寺に進学し、弟の踏み台になるつもりだった。

それでこそ、凡人である自分が浮かばれる。

それでいいんだ。

そう思っていた。

そんな時、小早川セナを知る。

彼も、阿含や進のような天才だと思った。

その考えは今も変わっていない、彼は自分達凡人が決して到達出来ない高みをゆく選ばれた人間だ。

努力はしているだろう。だが、同じトレーニングをしても自分はあの位置にはいない。

凡人は天才には適わない、諦めるしかない。そう思った。

だがしかし、一つだけ、雲水の心に引掛かることがあった。

それは何か？セナのプレーを見てわかった。

彼は、小早川セナは、アメリカンフットボールを心底楽しんでいる。

羨ましくなるくらい、彼はプレーを楽しんでいた。

そこに、才能のあるなしなど関係なかった。

アメフトを楽しむのに才能はいらない。

天才に叶わず、追いつけず、苦しんでのたうち回っていた雲水にとつて、

その単純な答えは笑いを催した。

雲水が阿含の踏み台になることは間違っではない。

「……だがしかし、正しいとも言えない。」

ならば、正しいこととは何か？

「……」

雲水は、考えて悩んだ末、こんな答えに辿り着いた。

小早川セナの在り方がその答えなのか？

つまり

自分に嘘をつかない、いや、自分に嘘はつけない。

俺は何をしようとしていた？

弟を最強選手にしようとしていた。

それが俺の野望……違う！

それは諦観した結果だ、嘘をつくな雲水。

諦める諦めないでもない、出来る出来ないでもない、勝つ負けるで

すらない、

やりたいかやりたくないかだった。

「……」

雲水は、高校の進学先を決める前に、その思いを阿含にぶつけた。

「阿含……俺は、お前と戦いたい……お前に……勝ちたい!!!」

搾り出すように叫ぶ雲水に、阿含は静かに睨んでいたが、

「……そうかよ……勝手にしな」

とだけしか言わなかった。

「ああ、俺は、勝手に生きるよ」

そう言う雲水の顔は憑き物が落ちたように晴やかだったという。

凡人の兄の決断が天才の弟にどのような心境の変化をもたらしたのかは定かではない。

だが結果的に、それは大きな変化を伴うことになる。

雲水は進学先に、神龍寺に対抗できる学校ということで、王城を選

んだという。

そして、特待生ではなく普通に受験入学を果たす。

そして今に至る。

さすがパラレルなワールド、こんなこともあるんだ。

この分だと、来年入学する一年生の中に知ってる人がいたりするかもしれない。

楽しみだ。

余談だが、今回のテストにはまだ入学していない若菜小春もこっそり見に来ていた。

実は彼女もセナのファンだった。

若菜は中学から王城に在籍していたため、セナが王城に行くと言った時には飛び上がって喜んだという。

春。

とうとう僕は高校生になった。

泥門ではなく、王城の生徒になって。

「原作」なんて全く意味がなくなっていた。これはまあ前からだけど。僕は自分の意思でここにいる。

泥門時代のアメフトメンバーは今どうしているのか？

同じように泥門高校に入学していた場合、

泥門にアメフト部はないのでそのまま普通の高校生活を送ることになるだろう。

少し気になったけど、調べるようなことはしないようにした。

僕しか知らない知識で、その人がアメフトをやっていないからといって、

アメフトに出会っていればもつといい高校生活を送っていたのにと考えるのはこの世界に生きる人たちに失礼じゃないかと考えたからだ。

アメフトに出会えなければ・・・

雪光さんは勉強漬けの生活なのだろうか。

十文字さん達三兄弟は不良のままだろうか。

小結くんは何かを見つけれらるだろうか。

瀧くんはアメリカに行ったままなのだろうか。

そして、一番の親友、モン太は・・・

僕やヒル魔さんが誘わないで野球を辞めるとは思えない。

誰もが、何かを見つけれられるかもしれないし、見つけれられないかもしれない。

もつと打ち込める何かを見つけるかもしれない。

そもそも、泥門時代と同じという前提も不確かなものだし。

それは、唯一無二のこの世界に生きる人達が自分で決めることに価値があることで、

僕の妙な知識が正しいわけでは決していない。

まあ、要するに、
なるようになるのが一番ってことで。

・・・でも、やっぱり寂しいという気持ちもある、そう簡単には
割り切れないや。

彼女がいてくれなければ、また少々落ち込んでいたかもしれない。

「あ、セーナ〜！」

と、僕に声をかけてきたのは、新品の王城の制服に身を包んだ鈴音
だった。

「鈴菜も今年から王城生だった。」

なんと一般入試で合格した。

合格理由には、まもり姉ちゃんの存在が大きい。

僕経由で鈴音とまもり姉ちゃんが知り合い、

二人はあつという間に意気投合し、「まも姉」「鈴音ちゃん」と呼び
合う仲になった。

まもり姉ちゃんも去年、王城の入試を受けて合格しているので、
その傾向と対策を鈴音にみっちり教えてくれたのだ。

泥門時代は鈴音は学校が違ったので成績はよく知らなかったが、大
したものだと思う。

一緒にいてくれるなんて嬉しい限りだ。

お互いの呼び名も「セナ」「鈴音」と慣れ親しんだ呼び方に戻ってい
る。

「なるようになれ」と考えてはいるんだけど、やはり落ち着く。

「同じ学校だね、鈴音、これからよろしく」

「うん！一緒に頑張ろうね、セナ」

「一緒にって言うことは、鈴音もマネージャーをするの？」

泥門時代に盛り上げ隊長をしていたから、王城でもそれを勧める。
なんてことは僕はしなかった。どうするかは彼女が決めてほしい。

「ん〜、私はまも姉えみみたいに頭よくないし、

サポートよりも応援するほうが性に合っている気がするんだ、

だから、私はチガガール部に入ることにしたの、アメフト専門の応援部よ」

「……そうか、うん、いいと思うよ」

鈴音は鈴音だった。変わらない。

違った道を歩んでも「それはそれ」と考えるようにしていたけど、やはり嬉しいものは嬉しい。

「ホントー！いいと思う?」

「もちろん、鈴音が応援してくれるなら元気出るよ」

これは確信を持って言える、事実だし。

「へへへ」

と、鈴音は照れてはにかむように笑う。

呼び方だけではなく、話しぶりも変化が出てきた。

お淑やかな振る舞いだったのが、だいぶ元気が出てきた。

かと思うと、話す際の立ち位置が泥門時代の頃よりさらに少し近くなった気がする。

以前は話ながら歩いている時は、ローラーブレードを滑りながら先を進んでいたけど、

今は必ず僕の隣を歩かし、普通に話をしている時も、僕の正面に立って、じつと目を見て話す。

以前のように何かをしながらというのがなくなった。

同じテーブルに座って話をしている時など、気づいたらびっくりするくらい顔が近かったりする時がある。

話に夢中になって身を乗り出して喋る。ではなく、顔が近いのだ。そういう時の鈴音はぼうつとしていることが多い、いや、考え事をすることが多いというべきか。

鈴音ってまつ毛長いんだなくって見ていたら、鈴音が顔が近かったのに気づいて慌てて離れて、

顔を真っ赤にして俯いて、チラチラと上目遣いで僕を見上げてくる。

泥門時代とは違い、鈴音は明らかに照れ屋になっているように思う。

些細な違いだけど、僕は、今の鈴音は可愛いと思う。
もちろん、そんなことは恥かしくて言えないが。
いや、顔は以前から可愛いとは思ってはいたけど、鈴音はかけがえのない親友だ。

確か、帝黒の偵察に大阪に行った時など、モン太と三人でネットカフェに泊まったのに、

鈴音が女の子だと意識しないで普通に同じ部屋で寝ていた。

今は・・・無理だな絶対。意識してしまっただ寝れないと思う。

・・・いかんいかん、自重しないと。

鈴音は僕にとつて、身近で友人でいてくれる貴重な人なんだから。

・・・しかし、僕がそんなことを考えるなんて、僕も変わってきたように思う。

僕は、泥門時代の「小早川瀬那」ではなく、「小早川セナ」なんだ。
つて、またアメフトから思考が外れている。

心って難しいな・・・もつと集中しよう。

結局、鈴音の想いには気づかない、とことんまで鈍いセナだった。

入学初日から練習が始まった。

一年生も結構いる。全員で70人くらいいるみたいだけど、すぐ辞めて半分以下になるとか。

残念ながら雲水さんのように泥門時代と違う進路の人はいないようだった。

と言つても、知っている人が二人しかいないので不確かだけど。

一人目はマネージャーの、確か、若菜さんだったと思う。話したことはない、と思う。

周りは皆、可愛い娘だと言うけど、そういうのはよくわからない。

二人目は、ランニングバックの猫山君。泥門時代の王城との二度目の対戦時、

前半終了間際にタッチダウン寸前の王城のランニングバックを
タックルで倒したが、

その相手が猫山君だった。当然話したことはないけど、何故か印象に残っていた。

後、元々知っていた人が二人。

チア部に入った鈴音と、

今年からマネージャーをやってくれることになったまもり姉ちゃん。

去年は生徒会と風紀委員も兼任してて、アメフト部のマネージャーは臨時の手伝いのみだったそうだけど、

今年からアメフト部を最優先にしてくれるのだそうだ。

練習初日。

「よし、まずは一年生全員の40ヤード走のタイムを計るぞ」

庄司監督の指示に、何か器械が用意された。

レーザー測定器とやらで、ストップウォッチより正確に百分の一秒台までタイムが計れるのだそうだ。

僕は最後だった。

「位置について、よーい、スタート！」

………どンドン走って計られていくが、5秒切る人はほとんどいないな。

確か、高校生で4秒8出せればどこ行ってもエースだとか昔ヒル魔さんが言ってたような。

「猫山、4秒82！」

お、出た、エース級。猫山君は泥門時代も攻撃のレギュラーだったし納得。

「速いな」

「ええ」

「他の高校ならエースだったな」

「今年は彼がいますからね」

庄司監督と隣にいる高見さんが話している。

「では、最後、小早川！」

出番だ。

ぎざぎざぎざぎざわ……………

彼がスタートラインにつくと、周りがぎざわついで、すごい人数が集まってきた。

「おい、あの小早川セナが走るんだってよ」

「え、あの中学MVPの？」

「知ってる、雑誌でも日本最高のランニングバックだって書いてた」

「あ、私も雑誌を見た、すごい、本物なあ！」

「どんな速えんだろ？」

「でも進さんの4秒4は超えられないだろ」

「いや、最後の大会で超えたって噂だぜ」

「あれがセナ君？ かつこい」

「やかましい!!!」

騒然としてた所を、庄司監督が一喝して黙らせた。

「……………ふう〜」

スタート地点に着いて、ゆっくりと息を吐く。

それだけで騒がしかった周囲が静かになる。

自分に必要な音以外を無意識にシャットダウンしてくれる。

それと同時に、周りの動きがスローモーションになっていく。

周りが水の中で動いているような、それでいて自分だけが陸にいるような。

集中力が増しているのだろう、最近はこれを意識的にできるようになってきた。

意識を体内に向ければ、筋肉の収縮などの躍動、血液が体内を駆け巡る様子が感じ取れる。

ギョングョンと感じ取れる、気がする。実際気のせいだろうけど、そんな気がする。

「位置について」

自分の身体を完全にコントロールしているという確信がある。
なんでも出来る気がする、というのは重要な自己暗示だと思う。

「よ～～～～い」

ビデオのスロー再生を見ているように、声が間延びして聞こえる。

「・・・ス」

飛び出せるよう脚に力を溜める。

「・・・ター」

遅い、まだか。

「ト」

力を解放した。

・

・

「こ、小早川・・・よ、4秒09!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

さつきまでの賑わいが嘘のように静まり返った。

そして、次の瞬間、歓声となって爆発した。

「す、すっげえ～～～～!!!」

「マジかよ～～!」

「え、これって、日本最速?」

「バツカ、世界最速だよこんなの」

「即、プロ入りできるレベルじゃない?」

「これでまだ高1って・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・これほどまでとはな」

庄司監督も流石に言葉が出なかった。

「すごい、予想以上ですよ、彼は」

高見も少々興奮して監督に同意していた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

周りが大騒ぎする中、進と桜庭だけが、一言も発せずセナを見ていた。

しかし、二人の胸中はまるで違っていた。

進はこの時、うつすらと微笑んでいた。

それは、頼もしい味方が来たことによる笑みであり、同時に、

自分に匹敵、もしくはそれ以上の好敵手を得たような楽しそうな笑顔だった。

(・・・そうだ、セナ、そうでなくては困る)

一方の桜庭は、笑みどころか、凍りついていた、動けなかった。

(・・・これが・・・これが、天才、小早川セナか・・・、

・・・あの進に匹敵するという・・・追いつける気がまるでしない、
一体、彼はどんな高みにいるんだ・・・追いつける気がまるでしない、

・・・勝てるわけがない・・・
・・・でも！・・・それでも、俺は・・・)

端から見れば泣いているようにも見えたが、幸いにも誰にも気づかれなかった。

いや、一人、桜庭の様子に気づき、しかも彼の内心を正確に見抜いた人物がいた。

金剛雲水。

同じように天才が側にいた彼にとって、今の桜庭の苦悩は手に取るようにわかった。

そして、彼の心が折れていないことも。

だから、声はかけなかった。

(・・・大丈夫だ、桜庭、お前は強い、諦めないお前が弱いわけがない)

かくして、新生王城ホワイトナイツはスタートした。

7th down 姉崎まもり

「じゃあね、おやすみ、セナ」

「おやすみ、まもり姉ちゃん」

下校時のいつもの光景。

部活動の練習で遅くなるため、セナがまもりを家の前まで送って別れる。

セナが走って行くのを視界から消えるまで見届けた後、まもりは家に入った。

「ただいま〜」

「おかえり、まもり」

母が迎えてくれた。

「まもり、アメフト部のマネージャーに専念してるそうだけど、こんな夜遅くまでたいへんね」

「ううん、たいへんじゃないよ、すっごく楽しいよ」

強がりではなく、本心からだった。

ここ数日、いや、マネージャーを本格的にやるようになってから楽しくてしょうがない。

「ふふ、その楽しいは、部活が楽しいというのは少し違うんじゃない？」

アメリカ人とのハーフの真美は、とても女子高生の娘を持つ母とは思えない若々しい笑顔で言った。

「え、何が違うの？」

まもりは意味がわからず聞き返した。部活が楽しいと思っ込んでいたからだ。

「そんなの、セナちゃんと一緒にいられるからに決まってるじゃない」
真美はあっさりと言った。

「な！・・・え、せ、セナと？」

まもりにとって全くの予想外の母の発言に驚く。

それを見た真美は溜息をついて言った。

「はあく、まったくもう、全然気づいてなかったのね・・・」

あなたね、セナちゃんが王城に行くの決まってから、自分の後輩になるんだって、

小学校以来だって、それはそれは嬉しそうに私に何十回言ったと思ってるの?」

「え、そ……そうだっけ?」

「……まったく……我が娘ながら純情というか鈍いというか……」

「え、お母さん、何か言った?」

「なんでもないわ、もういいからお風呂入っちゃいなさい」

「……は……はい」

脱衣所で服を脱ぎながらまもりは今のやりとりを思い出す。

(……私が楽しいと感じているのは、部活じゃなくて、セナと一緒にいるから?)

アメフト部が楽しくないわけがない、確かに部員も多く、やることは山のように忙しい。

その分やり甲斐もあり、毎日充実している。

(その楽しいと、今私を感じている幸福感は確かに違う……気がする)

セナちゃんと一緒にいられるからよ

母の言葉が蘇る。

だとすれば……

(あれ?……私つてもしかして……セナのこと……好き?)

降って沸いたような結論にまもりは慌てた。

(いやいやいや……確かにセナのことは好き……だけど、それは、姉としてであって、

セナってば頼りないから弟みたいで放っておけないってゆうか……)

頼りない

放っておけない

それは、セナが小学校低学年あたりの話だ。

セナは強くなった。

いじめっ子にも敢然と立ち向かい、負けない心を持つようになった。

(なら・・・私の今のセナに対する気持ちは・・・いえ、落ち着くよ、まもり)

一旦落ち着いて深呼吸した後、湯船に浸かって考えをまとめることにした。

(・・・そもそも、私ってどういったタイプの男性が好みなんだろう?)

よく考えたことなかったわ、そういうの興味なかったし・・・

・・・ちよつと、考えてみよう)

まもりは、湯船に顔を半分沈めて口からブクブク泡を浮かばせながら自問自答を始めた。

(・・・身長は・・・私より低くても全然おつけゝね・・・)

(・・・顔は・・・うゝん、かつこいいより可愛い感じかな・・・)

(・・・性格、これは優しい人ね、ルールを守る真面目な人)

その他にも様々な項目の一番好感度の高いものをモニタージュのように繋ぎ合わせてまもりにとつての

好みの男性像を作り上げていく。

カシャカシャ・・・チーン

まもりの脳内で好みの男性像が完成した、それは・・・

「つて、セナじゃない!」

そう、まもりが作り上げた理想の男性像は、セナそのものだった。

「・・・私・・・セナのこと・・・弟としてじゃなくて、一人の異性として・・・

・・・好きだったんだ」

自分で正直に自問自答した結果なので疑いようがなかった。

お風呂から上がり、バスタオルで髪を拭きながらリビングでジュースを飲んで、

ようやく少し落ち着いてきた。

(でも私、セナと恋人同士になりたいとか思ったりしてなかったんだけどな……)

……もしも、セナに告白されたら……ちよつと想像してみよう)

と、まもりはそんな状況を妄想してみた。

何故か豪華客船の甲板で、蝶ネクタイにタキシード姿のセナが、まもりを見つめて言う。

「まもりさん……僕と、結婚してください」

「……」

「……」

……はい、喜んで、セナさん」

(……うわ……嬉しい!……これ以上ないくらい)

クツションを抱きしめたままソファで転げまわるまもり。

「……」

母親が目の前で呆れていた。

「……まもり」

「なななななに、お母さん」

母親が目の前にいることによく気づいたまもり。

「まもりがお嬢さんを連れてきてくれる日もそう遠くないようね」

「な、何言ってるのよ、セナとはまだそんなんじゃない……」

「……まもり、誰もセナちゃんだなんて言っていないわよ、しかも「まだ」って、

これからそんな仲になるつもり満々ね、頑張ってるね、母さん応援してるわ」

「……」

顔を真っ赤にして逃げるように部屋に走っていくまもりだった。

部屋に戻って頭から布団をかぶってなんとか気持ちを落ち着けようとするが、

全然動悸が治まらない。

(・・・はあ、明日からどうしよう)

セナは自分にとつて世話のかかる弟だと思っていたのに、今更喜欢きですなんて言えない。

そもそも肝心のセナは自分のことを姉としか思っていないのは明白だ。

姉と慕ってくれるのは嬉しいが、告白すればその成否に関わらず姉弟という関係は終わる。

成功して恋人同士になれるのならいいが、失敗すれば目も当てられない。

怖くて言えない。告白なんてしたこともない、自分にとってこれは初恋だ。

まさか相手がセナだとは夢にも思わなかったけど、好きになってしまったのはしょうがない。

(・・・とにかく、今の関係が終わるのは嫌だし、うん、セナもアメフトに集中しなきゃいけないから、

あんまりそれを乱すのも悪いし、マネージャーとして一人の部員とつきあっているなんて知られたら、

他の部員との関係にも良くないし・・・)

とにかく、そう、いつも通りにやっついていかなくちや・・・) 母親の見立て通り、純情で奥手なまもりは、なまじ頭がいい分、大量の言い訳を思いつき、

現状維持を選択してしまった。

そして、自分の気持ちに気づくのと同時に、セナを弟してではなく、異性として正確に見た時、

元々洞察力も優れていたまもりも、恋愛に関してだけは疎かったフィルターは外され、

周りの人の様子も正確に判るようになっていた。

(・・・落ち着いて周りの様子を思い出してみると、

セナに惹かれている女生徒って、結構な人数いるわね・・・)

・・・あ、干徳さんは進君のファンみたいね・・・)

・・・小春ちゃんは・・・恋愛というより芸能人に対する憧れに近いわね・・・
・・・鈴音ちゃんは・・・間違いない、セナを見る時のあの娘の目・・・
うわ・・・もうセナにベタ惚れじゃない・・・気づかなかったわ・・・
・・・私・・・全然周りを見てなかったんだ・・・マネージャーなのに・・・)

自分の気持ちに気づいて動揺し、周りの人達の気持ちに気づかなかったことに落ち込み、

まもりはその夜、なかなか寝付けなかった。

翌朝

「おはよう、まもり姉ちゃん」

「お・・・おはよ・・・セナ」

家が近いこともあり、二人はいつも一緒に朝練の為に登校していた。

「どうしたの、まもり姉ちゃん？」

いつもと様子の違うまもりにセナが訝しんで声を掛ける。

「だ、大丈夫よ、セナ、昨日ちよつと夜遅くまで勉強してて寝不足なだけだから」

まもりにしてみれば、顔が真っ赤になっているのを誤魔化すので精一杯だった。

「そうなんだ、無理しないでね、まもり姉ちゃん」

「うん、大丈夫大丈夫」

朗らかに答えがまもりだが、内心ではそれどころではなかった。

(は、恥かしくてまともにセナの顔が見れないし、喋り掛けられない・・・)

・・・セナの顔って・・・すごく整っていて可愛いのに、目がキリツとしててかっこよくて・・・

・・・私の好みのタイプそのものだったんだ・・・よく今まで私

は……)

二人は他愛ない会話をしながら登校していった。

「あ……でも、今何だか私、幸せ」

「え？」

「えつとね、私、今すつごく毎日が楽しいなって思つて」

「うん、そうだね、僕も今、毎日が充実してて楽しいよ」

そう答えるセナを見つめてまもりは、何かに祈った。

(あともう少し、あともう少しだけ、このままですらられますように)

8th down 小早川セナ VS 進清十郎

紅白戦をすることになった。

僕はランニングバックとして出場する。

この頃すでに僕は、攻撃側の一軍スタメンになっていた。

ちなみに同級生で同じポジションの猫山君は一軍の控えだった。

組み分けを大まかに説明すると。

赤組。

クォーターバック：高見

ラインバッカー：進

ワイドレシーバー：桜庭

白組。

クォーターバック：金剛

ランニングバック：小早川

ライン：大田原

となっている。

僕のいる白組の攻撃時には、守備に進さんがいる。

昔からたまに一緒に練習はしていたが、こうやって直接対決するのは

実は初めてだった。

監督の指示で完全非公開の紅白戦となっている。

手の内を曝け出すのを恐れずに全力を出せということか。

試合前、いつもなら進さんと二言三言話すのだが、今日は全く話さ

なかった。

それどころか、目も合わせなかった。

僕もそうだが、進さんも気合が入っているようだ。

「小早川」

同じ白組の雲水さんが話しかけてくる。

「大田原さんがいる以上、中央はこちらが有利だ、

なので走^{ラン}を中心にして攻撃する、

最初のプレーで小早川、お前がボールを持って中央突破だ、いいな」

「はっ」

大田原さんがいるので相手の壁の隙間ラインを抜けるのは容易いだろう。問題はやはり、その後ろに控えるラインバックカー、進さんだ。

試合が始まり、白組の攻撃となる。

雲水さんからボールを受け取り、中央へ走る。

大田原さんは流石で、二人を相手に押し勝っている。

中央に空いた大穴を簡単に抜ける、と、当然のように正面に彼がいた。

進さん・・・泥門時代、僕は実はこの人に勝ったことがほとんどない。

最初に戦った春大会の2回戦、散々潰されて、最後に一回だけ抜くことができた。

一回だけだ。負けた回数は数え切れない。

二回目の対戦の関東大会の準決勝、これも同じ、最後の一回だけ勝てた。

それ以外は止められている。

周りの人は僕を、実力があるのに謙虚だとか言うけれど、

1勝99敗で、勝率1%で、どうして増長できよう、傲慢になれよう。

僕は挑戦者だ。故に、今僕の持っているモノを全てぶつける、それだけを考えて・・・

走ろう。

(行くよ、進さん)

小早川セナ、俺の目標としている人物。

最初に会った時のことは昨日の事のように思い出せる。

その見事な動きと、素晴らしいスピートに、生まれて初めて見惚れた。

その後、セナがやっているというアメリカンフットボールを始め、努力を重ねても、常に先を走っている人物。

この日を一日千秋の思いで待った。
相手にとつて不足などあろうはずがない。

(行くぞ、セナ)

進さんと一対一、勝負は一瞬で決まる。

確か今の進さんの40ヤード走のタイムは4秒36、

このスピードとベンチプレス140キロという凄まじい怪力から
繰り出されるタツクルが、

スピアータツクルと言われて恐れられている。

まともに食らえば勝ち目はない、しかし、今の僕なら、今の進さん
になら勝てる。

先に動いてしまうとその移動先にタツクルがくるが、スピアータツ
クルを先に撃たせ、

それを見てからクロスオーバーステップでよければそのまま抜け
るはずだ。

今の僕ならそれが出来るはずだ。

よく動きを見て、間合いを見計らってから動けば……って、え
？

もう目の前にいる！

スピードに極端な緩急がついててタツクルが来るタイミングを取
りそこなった。

……この動きは……グースステップ！

ということは、これは、スピアータツクルじゃない……これは、
トライデントタツクル!!!!

いつの間にマスターしてたんだ進さん……わ……もうステップ
じゃ避けきれない！

驚いている場合じゃない、槍を、進さんの腕を逸らせるしかない。

進さんは右手を目一杯伸ばしてタツクルにきている。

僕は右手にボールを抱えているので左手が空いている。

左手で進さんの伸ばした右手の外側をフックのような軌道で掌打
を当てれば、

槍の軌道は僕の身体からズレるはずだ。

実行！

……うまく横から掌打を当てたのに、槍の軌道はこれっぽっちも動かない。

公園の鉄棒を横から殴ったみたいな感触だ、単純に腕力が違いすぎるんだ。

ならば作戦修正、槍を逸らすのではなく、こっちから避けるしかない。

僕の左の手のひらは、まだ進さんの右手の外側に触れている状態だ。

ここを支点にして、自分の身体を左へ押す。

同時に、身体を時計回りに半回転して横向きになり、槍を少しでもよける。

チツ

つと音がして、右を向いている僕の腹部を進さんの右手がかすめていった。

一見、セナが長考していたように見えるが、実際には刹那の間にか経過していなかった。

子供の頃から鍛えた脳が思考を圧縮させ、一瞬で流れるような判断力を完成させていた。

端から見れば進のタツクルに対して、瞬時に手を使って横っ飛びしたようにしか見えなかったろう。

やった！

回避成功した。

このまま方向転換して前を向いて、そのままタツチダウンだ。喜んでいた僕はこの時、たまたま進さんの目を見た。

ゾクツ!!!

寒気がした。

彼の目は、タツクルを避けられて驚いている目ではなかった。

獲物を狩る、虎の目だった。

セナと初めて会った時、彼がやっていた走法を聞いた、ロデオドラ
イブという。

少しずつ練習し、タツクルに取り入れることに成功した。

グースステップを取り入れることで、タツクルの成功率は飛躍的に
上がった。

グースステップとは、脚を伸ばしたまま上体を揺らすことで、ス
ピードが上がるわけではない。

元々避けられたことはほとんどなかったが、

これを使つてからは、相手が逃げる前に捕まえられるようになって
た。

QBがボールを投げ捨てる前に、ランナーが膝を着く前に、タツク
ルが決まるようになった。

いつの間にか、トライデントタツクル、と呼ばれるようになってい
た。

このタツクルを、セナに使えばどうなるのか？

そしてこの紅白戦でセナと対戦した際、最高のタイミングでトライ
デントタツクルを繰り出した。

しかし、セナは尋常ではない反射速度と超スピードで俺の手を弾い
て横っ飛びでかわした。

だが

(信じていたぞ、セナ、お前がこれをよけることができるぞ！)

進さんの次の動きは信じられないものだった。

ダイビングに近いくらい上体が前に伸びきったタツクルなのに、

左足を無理矢理に出して強引に踏みとどまった。

たった一步で堪えただけでもすごいのに、進さんはなんとここで止
まらなかった。

一瞬も停止せず、踏み込んだ足を軸に跳ねるように上体を起こし、
同時に腰を回転させて体をこっちへ向け、

もう一度、今度は左腕でトライデントタックルを撃つて来た。
右で撃ち、かわせばすぐに追撃して左で撃つ。
トライデントタックルの・・・連撃。

進の伸ばされた左腕が、セナの腹部を・・・貫いた。

「やった！ 進の勝ちだ・・・ってええええ、貫いたあ？」
プレー中であることも忘れて二人の対決に見入っていた桜庭は、
あり得ない状況に叫びをあげた。

「いやいやいや、いくら進のタックルが槍を冠しているからって、貫く
のではないだろ！」

「違う、よく見ろ桜庭・・・小早川は・・・」

慌てる桜庭に冷静に指摘したのは雲水だった。

デビルバットゴースト。

つまり、後ろに下がりながらの超スピードでのクロスオーバース
テップ。

あまりの速さに、周りの人間には進の腕がセナを貫いたように見え
たのだった。

（あ・・・危なかった・・・進さんの目をみていなければ、2撃目
はかわせなかった）

進を完全にかわしたセナは、そのままタッチダウンした。

セナ対進の対決は、セナに軍配が上がった。

紅白戦は全部員が出ることもあり、この後二人が対戦することはな
かった。

自分の出番が終わり、ベンチに座ってドリンクを飲んでいるセナ
は、少しへこんでいた。

（・・・増長してないと思っていたけど、今の進さんになら勝てると、
泥門時代のデータから推測してそう思うことがそもそも進さんに

対して失礼だった)

目の前に誰かやってきた、進さんだった。

「進さん」

「セナ……お前の勝ちだ……お前が、王城のエースだ」
手を出す進。

セナは立ち上がると、その手をがっちり握った。
そして思う。

(反省しよう。進さんに謝っても意味がないので、今の自分と、過去の自分に謝ろう。)

それは、これからの自分の覚悟として表そう……

そう、僕にとつての、時代の最強ランナーの称号としてのアレを……
掲げよう)

セナの、全く慢心のない、自分に勝っても露ほども驕らないどころか、

更に何か決意のようなものを秘めた強い瞳を見て、進は思う。

(俺は、まだまだ甘い、修練が足りない……この男に追いつくためには、

……小早川セナを超えるためには……)

「監督、お願いがあります」

セナは、次の日より、背番号を21とし、アイシールドをつけてグラウンドに立つようになった。

おまけ

「よし、名前をつけよう」

紅白戦後のミーティングで、高見はそう言った。

「……誰の？」

桜庭が聞く。

「人じゃなくて、技の名前だよ」

「進のスピアータックルやトライデントタックルみたいな？」

「その通り、名前をつけるという行為にはね、メリットが大きいんだよ」

「へえ〜」

「大技ほどメリットもデメリットも大きくなるので、それを自覚すること、

技の出し所を明確にすることができる、ここぞという時に出すのがいいね、

なにより・・・相手を威圧することができる」

「あ、それわかる、名前がつくほどのタツクルってそれだけでビビっちゃうもんね、

進のスピアータツクルなんて、威力はすごいけど、実は普通のタツクルなのにな」

「そうだ、なので、セナにも何か名前をつけようと思うんだ、

今回のセナには技の名前をつけていいのがある」

「紅白戦で進の二撃目のトライデントタツクルをよけたあの動きだね」

「そう」

「あれはすごかったね〜、一瞬、貫いたように見えたもの」

「何か名前の候補はあるかい？」

参加していた部員達から色々な名前の候補があげられた。

「忍法影分身の術」

「超」反復横とび」

「デビルバットゴースト」

「スーパークロスオーバーステップ」

「六式紙絵」

「科学忍法竜巻ファイター」

「全部却下」

「なんでさ」

「優雅でないから。相手を威圧するのも目的だが、王城ホワイトナイツらしく、

名前にも品格がないと駄目だ」

「そんなこと言われてもな……」

「実はもう考えてある」

「なら聞くなよ」

「蜃気楼の騎士というのはどうだろうか？」

「へえ、いいんじゃないか」

「うむ、これは決まりだ。次に、進のトライデントタツクルの二連撃だが……」

「あれは、ダブルトライデントタツクルくらいでいいじゃないの？」

「駄目だ、技名をちゃんとつけたほうがパワーアップ感が増す」

「そんなものか」

「そんなものだ、ではまた候補はあるか？」

「……もう考えてあるんだろう？」

「もちろんあるが」

「……もうそれでいいよ」

「……なんだか消極的だな……まあいい……この技は……」

「……ホワイトベイリン「双剣の騎士」と名付けようと思う」

「なんだかかつこよさげだからいいけど、ホワイトは王城ホワイトナイツから取ったとして、

ベイリンって何さ？」

「ふふ……円卓の騎士に出てくる二刀流の騎士の名前さ」

「ふくん、じゃあそれで」

(……所変われば名前も変わるとはいえ……)

一瞬で却下されたな、デビルバットゴースト……)

三番目の案はセナだった。

9th down 白い騎士達

小高い丘の上に庄司監督が腕を組んで立っていた。

隣にはストップウオッチを持ったマネージャーの若菜小春がいる。そこはマラソンのゴール地点だった。

トレーニングの一環で行われているそれは、途中にはアップダウンの激しい坂や、

長い階段などがあり、普通のマラソンよりもきつい内容になっていた。

トップが帰って来た。

走ってきたのは、監督の予想通り、進清十郎だった。

(・・・ふむ、やはり進か)

当然の結果だが、同時に監督として悩みのタネでもあった。

進が強すぎるのだ。

去年、一年生にしてすぐに彼に勝てるどころか対抗できるものさえいなくなり、

進のトレーニングは個人で行うそれと同じものとなっていた。

監督にとって練習とは、部員同士で競わせるからこそお互いを高め

られる、

いわゆるミックスアップが大切だと常々考えていた。

だからこそ、進の現状が残念でならなかった。

誰も進に勝てないと早々に諦めている。

いや、何人か諦めていないのがあるが、進の相手にはならない。

進がストイックな求道者でなければどうなっていたかと思う。

「相手のやる気まで奪っちゃったら、何が楽しいんだよ」

と言って練習をサポートしていたかもしれない。

だが、そんな心配は、今年から杞憂となった。

彼が来たからだ。

小早川セナ。

進のすぐ後ろにぴったりついて走ってきている。

去年までは、進の後ろには視界範囲にすら誰もいなかった。

進をさらに高めてくれるライバルの存在に、庄司は内心安堵を覚えていた。

（……進さんやつぱりすっごい、ついていくのが精一杯だよ……
……短距離ならともかく、スタミナではまだまだ進さんがずっと
上か……）

セナが思う通り、フラフラでなんとか走っているセナに対し、
進はまだまだフォームも崩れておらず、呼吸もリズムを乱していな
かった。

（だがしかし！ このまま終わってなるもんか！

……流石にきついけど、もつときつい練習をいろいろやってきた
んだ！）

進の真後ろにつけていたセナは、根性でラストスパートをかけた。
二人の差が縮まる。

（……む）

セナが横に並んだ時に進が気づいた、そして。

「うおおおおお!!」

進が雄叫びをあげてスパートをかけた。

そして、セナを数十メートル引き離してゴールした。

ゴール後、大の字になって荒い息をつくセナ。

「セナ、クールダウンをしたほうがいい、少し歩くぞ」

大きく息をつきながら進が言った。

「は……ふあい」

セナは何とか立ち上がって進とゆっくり歩いていく。

「進さん……完敗です、結局、一度も前を走れなかった」

「ふふ……先達として負けてばかりいられないからな」

歩いていく進とセナを見て、庄司監督は思った。

（……進は、楽しそうだな）

春大会が目の前に迫ってきた。

初戦の相手は……えくと、恋ヶ浜キューピッドか……
……
……ぜんっぜん思い出せない。

二回戦くらいで泥門だったと思うのだけど、泥門アメフト部ないので、

トーナメントの組み合わせを覚えていても意味ないだろうけど。

「よし、恋ヶ浜戦のスタメンを発表するぞ、呼ばれたら前に出て来い！」

庄司監督が大きな声で言う。

「まず攻撃、オフエンスライン、大田原、岩鼻、安護田、鈴木、鏡堂、
タイトエンド、金剛、

ワイドレシーバー、桜庭、神前、

ランニングバック、小早川、石丸、

クォーターバック、高見……以上だ、続いてディフェンス……」

監督による、スタメン発表が続けられていたが、僕は聞こえていなかった。

「高校の公式戦初試合だね、一緒に頑張ろう小早川君」

そう言っって今僕と握手している同じポジションの人が石丸さんだったからだ。

『あの』石丸さんだ、泥門時代の陸上部の助っ人の！

「……いい」

「どうしたんだい、小早川君？」

いたんですか？

という失礼極まりないセリフをかろうじて飲み込むことが出来た。

汗をダラダラ流して固まる僕に石丸さんは怪訝に思っているようだが、それどころではない。

いや、本当にいたっけ？

過去の記憶を呼び起こしてみる……

……最初に王城に行った、特待生の試験の後、今の2年生と挨拶した時……

……いたよ、普通に挨拶してた。

その後に挨拶した金剛雲水さんがいたという衝撃で、完全に石丸さんの記憶が抜けている。

「……いえ、何でもありません、よろしく願います、石丸さん」

(……とりあえず、心の中で全力で謝っておこう………
……気づかなくてすいませんでした〜!!!)

石丸と握手しながらセナは、心の中で土下座していた。

(……しかし、泥門時代はともかく、今の王城でスタメンが取れるほど石丸さんってすごかったっけ？

控えになった猫山君の方が40ヤード走のタイムもいいし、何より彼には、

「キヤットラン」と呼ばれる気配や足音を消して走る走法がある……なのはどうして?)

僕がそう思ったのが顔に出たのか、他の部員達も同じようなことを考えてしまったのか、

それを察した高見さんが説明した。

「ああ、確かに猫山のほうがタイムはいいよ、だけどね、経験による判断力、パワー、スタミナ、

……総合で評価すると、石丸が上なんだよ……え、キヤットラン?……」

ふふふ、確かに猫山のキヤットランはたいした技だけどね、でもね………

……石丸はそんなこと日常的にやってるからねえ」

「ああ、石丸は地味だけど何をやらせてもいつの間にか出来てるんだよな」

桜庭さんが同意する。

「ああ……石丸は、気配を消す術に長けている」
進さんも高評価だ。

「……………」

石丸さんは周りの高評価にも微妙に諦めたような笑顔だ。

わかる、わかるよ僕には。

おそらく石丸さんは、

「普通に走ってただけなんだけどなく」

と思っっているのだろう。

もう一つ、疑問というか、理由が知りたいことが一つ。

QBが高見さんで、雲水さんではないのは何故か？

QBの実力がどちらが上なのか、僕にはわからない、監督が高見さんを選んだのだから、

恐らくそうなのだろうけど、努力家の雲水さんの実力も相当なように見える。

この理由はかなり後になってからわかったことだが、実力は伯仲していたのだそう。

そして監督は、高見さんの高さに期待し、その高さを生かせる選手の成長を期待していたのだそう。

そして理由にもう一つ、雲水さんのオールマイティーさにもよるそう。

努力家の雲水さんは、阿含さんに勝つためにあらゆる努力をし、なんと全ポジションをこなせるという。

投げれる、捕れる、走れる、ラインも出来るとあれば、今度は一つのポジションに固定するのが

もったいなくなってきたらしい。

僕はキャッチは出来ない、ラインもできない。

進さんだって、キャッチは出来ない、投げられない、彼は守備だけ

ど。
それを考えたら、プレー毎に役割を変えられる雲水さんは相手にとって脅威となる。

というのが理由らしい。

「……以上のメンバーで春大会に挑む、初戦の相手の恋ヶ浜は恐れる

相手ではない、

だからといって手を抜くことは許さん、初戦を甘く見るな、全力を
尽くせ、いいな！」

監督からの激が飛ぶ。

それを聞いて僕も、いい感じに緊張してきた。

やる気が出てきた。

早く試合がしたい。

「……………セナ」

まもりはそんなセナを見て、自分の中でここ最近思っていたセナへの
答えが出たような気がした。

次の日。

春大会一回戦前日、今日は完全休養ということで練習は休み。

セナを早く帰宅させ、まもりはマネージャーとしての仕事を片付
け、

鈴音を誘って帰路についていた。

二人で他愛ない会話をしながら、まもりは昨日見つけた答えを話し
出した。

「……………ねえ、鈴音ちゃん」

「ん、なあに、まも姉え？」

まもりは、ゆっくりりと、穏やかに話し掛けた。

「鈴音ちゃんは……………セナのこと……………好き？」

「ヒョッ!!」

ひよこが鳴いたような声を上げた鈴音は、隣を歩くまもりを驚いて
見る。

そこには、穏やかに微笑んで自分を見ているまもりがいた。

それを見た鈴音は、顔を真っ赤にさせて俯きながらも、

「……………うん」

と、誤魔化さず正直に答えた。

まもりの顔を見て、そうするべきだと思ったのだ。

「そっか・・・私もね、セナのこと、好きよ」

まもりは自分でも驚くくらい、好きという言葉が言えた。

「・・・まも姉え」

実は鈴音は、まもりの気持ちに薄々気づいていた。

彼女のセナに対する気持ちが、自分と同じ「恋」だということに。

「ふふ・・・同じ人を好きになっちゃったのね」

「・・・まも姉えが相手なら、私・・・」

鈴音は、セナの気持ちはわからない、でも、相手がまもりならば、お似合いに違いない。

相思相愛になった二人に、自分の気持ちを押し付けることなんて出来ない。

鈴音にとつて二人とも大事な人なのだから。

「私はね、セナに、私がセナのこと好きだって言わないことにしたの、今はね」

「・・・え」

「鈴音ちゃんが言うかどうかは、鈴音ちゃんの自由よ、

でもね、私はね、こう思ったの・・・」

女として男の子の成長を妨げるような愛し方はしないでおうつて・・・

・・・
昨日や今日のセナ、試合に向けて楽しそうだった、とても集中していたわ、

今のセナに、恋愛は妨げにしなければならないような気がするの、

人によつては、強くなるというけど、セナは、そんなに器用じゃないと思う、

私は・・・セナの・・・あの人の支えになってあげたいの・・・

・・・だから、今は言わない・・・言うのは・・・もつと成長してから・・・

・・・私も、セナも・・・」

「・・・」

衝撃だった。

まもりが、自分より遙か先にいることに。
セナのことは確かに好きだ。

試合を見て憧れ、

偶然知り合うことが出来て、彼の人となりを知ることによって更に想いを
深め、

会う度に惹かれていき、自分の憧れが恋であるとはつきりと自覚
し、

現在一緒にいられる幸せに満足していた。

だからこそ、この仲が進展することによってこの関係が壊れること
が怖かった。

だから今の幸せに浸っていた。

なのに、彼女はそうではなかった。

意中の相手に告白しないのは同じでも、中身がまるで違った。

まも姉えはセナのことを考えてのこと。

なのに私は、今の関係が壊れること、つまり自分のことしか考えて
いなかった。

．．．駄目だ．．．私は全然駄目だ。

まも姉えとセナはお似合いだと文句なしに認めてしまえる。

でも、私は駄目だ、このままでは．．．もつと成長しないと。

もし、私がセナに告白して、恋人同士になれたとしても、

たぶん、私も、セナも、駄目になると思う。

セナはアメフト選手として成長せず、私は彼に依存して墮落しかね
ない。

考えて怖くなった。

「．．．まも姉え．．．私も．．．頑張る」

鈴音は何とかそれだけを言えた。

「うん．．．頑張ろう．．．一緒に」

ニッコリ笑ってまもりは言った。

「．．．」

「……………」

「……ふふふ」

「……ふふ」

二人はしばし見つめあった後、どちらともなく笑い出した。

「しかしセナもさく、こくん美少女二人に惚れられるなんて、果報者よね」

鈴音がさばさばした表情で元気に言う。

「ふふ、そうね、でもセナはそのとこに全然気づいてないと思うわ」

「あ、やつぱり」

「そう、ホントにセナってそうだったことに鈍いのよ、昔から」

「ふくん、しかし、さっきのまも姉え……………」

「こよかったなあ」

「え？」

「まも姉え……………惚れちゃいそう」

「ちよ…………ちよつと鈴音ちゃん」

はしやぐように話しながら歩いていく二人は以前より仲が良さそうに見えた。

(…………でも、セナが好きになったら、絶対まも姉えよね、

美人だし、スタイルいいし、胸おつきいし、頭いいし、性格よくて

優しいし…………)

…………私なんて全然勝ち目ないよ…………)

ため息をつく鈴音。

(…………でも、セナが好きになるとしたら、絶対鈴音ちゃんよね、

可愛いし、細くてスタイルいいし、並ぶとセナとお似合いだし、性

格いいし、

…………私なんて姉としか見られていないから全然勝ち目ないわ…………)

ため息をつくまもり。

後日、二人は、

『小早川セナを愛でる会』を結成した。

彼の成長を見守り、応援し、愛でようというだけの秘密の会。
現在会員数二名。

しかし後に、この会は会員数数千人に登る一大ファンクラブとなる。

おまけ1 くある日の金剛家く

固定ポジションの決まらない雲水。

食事中にふと気づいた。

「・・・あれ、俺もしかして器用貧乏？」

それを聞いて、テーブルの対面で一緒に夕食を食べていた阿含は呆れて呟いた。

「あゝくく、いまさら何いってやがるよ」

「・・・」

おまけ2 く石丸が王城にいる理由く

「石丸さんがアメフトを始めた切っ掛けって何ですか？」

「君だよ、小早川君、実はね」

「僕ですか」

「うん、中学の頃はね、俺は陸上をやってて、高校も通学で近い泥門にして、

陸上を続けようかと思ってたんだけど・・・

君が中一の時のアメフトの試合を偶々見てね、僕もやってみたくなっただ、

で、アメフトの出来る王城を受験して、受ければアメフト、落ちれば泥門で陸上って決めて、

・・・それで今の俺がいるのさ」

「そうだったんですか、陸上をやめることには悩まなかったのですか？」

「んく、少し悩んだかな、でも、走ることをやめるわけじゃないしね、今の方が走ってるよ、楽しくね」

10th down 蛭魔妖一（前編）

春の東京大会初戦、対戦相手は恋ヶ浜キユーピッド。地区大会とは思えない大観衆だった。

大勢の観客に、録画中継するためのテレビカメラ。リポーターのお姉さんが、

「エース桜庭君率いる王城ホワイトナイトの試合が間もなく始まります！」

と元気にテレビカメラに向かって喋っていた。

それを聞いた桜庭さんは、落ち込んでいた。

「お、俺が率いているわけじゃ……ないんだけどな」

「気にするな桜庭、注目されるのもモデルの仕事だろ？」

それに……悔しければ本当のエースになってやればいいじゃないか」

高見がフオローを入れる。

「お、俺なんかが……」

（無理だ……進と小早川に勝ってエースになんてなれるわけが……でも、無理だなんて、言いたくない）

そんな桜庭の心情を察したように、高見は言った。

「できるさ……お前なら……だがそれは、お前の覚悟次第だがな」

「それは、どういう……」

「サクラバちゃんくん、テレビの方がインタビューしたいんだって」
マネージャーが割って入り、桜庭を連れて行ってしまった。

「……まだか」

高見の呟きは誰にも聞こえなかった。

例え聞こえていても、理解できたのは庄司監督だけだったろう。

それは、試合開始二時間前に、最後の栄養補給をしている時だった。最初に気づいたのは大田原さんだった。

「お、やっぱり来たな、あいつら」

「あいつら?」

「神龍寺ナーガだよ、うちと神龍寺が関東では双璧って言われてるんだよ」

僕の問いに高見さんが答えてくれた。

桜庭さんのインタビュを終えたリポーターとカメラクルーがその神龍寺の人達に向かっていく。

「去年、うちの先輩達、黄金世代って言われている三年生がいる時、うちは惜敗してるんだ」

高見さんが説明をしてくれる。

リポーターが神龍寺のドレッドヘヤーの選手に声を掛けている、阿含さんだな。

あ、ここなんか憶えている。

「桜庭君の偵察ですか?」って聞くリポーターに、阿含さんが鼻で笑って、

「そーです、サクラバ君のてーきつでくす」と答えるの。

聞こえないけど、そうであろう場面が見えている。

「本当に惜しかったんだ、最終クォーターまで勝ってたんだよ、彼らが出てこなければ勝ってた、

神龍寺の監督は出来れば出したくなかったんだろうね、彼ら四人を……」

高見さんの話が続いているが、僕はもう聞こえていなかった。
「……え?」

思わず立ち上がった。

阿含さんの隣に座っている人に目を奪われていた。

そこにいたのは……

ヒル魔さんだった。

神龍寺の制服を着た、蛭魔妖一が座っていた。

よく見ると、その隣に栗田さんが、さらにその隣に武蔵さんもいた。
(……うそ……ヒル魔さん達……いるじゃないか、それも、神龍寺に……)

……じゃあここは、ヒル魔さん達がないパラレルなワールド

じや・・なかつたんだ)

「.....ヒル魔.....さん?」

僕の眩きが聞こえた高見さんが話す。

「ん、ああ、そうだ、今言った四人とは、彼らだよ.....」

金剛阿含、雲水の弟だね、神速のインパルスと言われる天才だ、

栗田良寛、ベンチプレスで進や大田原を越える怪力ライン、

武蔵巖、60ヤードマグナムと呼ばれる高校屈指の強力なキツ

カー、

そして、悪魔の司令塔と呼ばれるQB、蛭魔妖一、

彼らの加入で、試合はあつというまにひっくり返されてしまったんだ」

そういえば、泥門時代に聞いたことがあつた。

最初は三人は泥門ではなく、神龍寺に行く予定だったと、

しかし、学力では入れない栗田さんの特待生入学を、阿含さんが潰してしまった。

なので、ヒル魔さんと武蔵さんも栗田さんとアメフトをやるために、

神龍寺ではなく泥門に入学したんだと。

.....

つまり、ここは三人がいない世界ではなく、うまく神龍寺に入学できた世界ということなのか。

阿含さんに何があつたのだろうか?

少なくとも、栗田さんを見て、ぷちつと潰してやろうとは思わなかったようだ。

雲水さんが王城にいることに関係がありそうな気もするが、理由はわからないだろう。

「.....」

驚愕に声も出なかつた僕だが、徐々に沸きあがってきたのは...嬉しさだった。

ヒル魔さんがいる。今度は敵だけど、一緒にアメフトができる。また戦えるんだ。

高校の時、一緒にプレーして思ったことは、彼が敵でなくてよかつたと心の底から安堵した。

そして大学で敵となったときに思ったことは、その逆ではなかった。

ヒル魔さんは敵に回してはいけない。とは思わなかったのだ。

思ったのは、ヒル魔さんと戦うということは、アメフトを100%楽しめるということだった。

何をしてくるかわからないということは、次は何をしてくるのだらうと思うことであり、

予想を裏切るということは、ある意味期待を上回るということでもある。

何も考えず身体能力にあかせて突っ込むだけでは勝負にすらならない。

アメフトというスポーツを「100%使いこなして」初めて対等な勝負ができる相手。

そんな相手だった。

ヒル魔さんという人物を何も知らなければ、ただの怖い人なのだが、

一緒にいて知ってしまったらこんな評価にかわってしまう。

それが、高校大学と「一緒に」プレーした僕から見た蛭魔妖一という人だった。

「あ、ヒル魔く、あの小早川セナ君、こっち見てるよ、ヒル魔を見てるんじゃない？」

栗田がフランスパンを頬張りながら言った。

「確かにヒル魔を見ているな、なんだ、知り合いか？」

武蔵が言う。

「・・・知ってるわけねーだろ、会った事もねえよ」

間を置かず返事をするヒル魔だったが、確かに自分を見ているセナに疑問を感じていた。

（あのセナっていう糞^{ファツキン}チビの目は、知らない人間を見る目じゃねえ、

どこかで会ったか？

「……いや、俺の記憶にはねえ……あいつの目は……
驚愕？」

「……何にだ……俺がここにいることがか、神龍寺が偵察に来る
ことはおかしなことじゃねえ、

「……警戒してるわけでもねえ、俺個人を見て驚いてやがる……
なんだ？」

相手が自分を見て怖気づくというならわかるが、

まるで昔の知り合いに会ったかのような目で見られるなどという
ことは想定外であったので、

相手の対処方の分類ができず、セナに対して警戒と興味が沸いたヒ
ル魔だった。

「……よくわからねえが、こいつは本気で小早川セナについて調べな
きゃな」

ともかく、試合が始まる。

恋ヶ浜は選手全員が彼女持ちらしいのだが、

あいにくその彼女全員が桜庭さんの応援に行ってしまった、
ベンチは寂しいことになっていた。

こつちを睨まれても困るのだが……

「試合前のこの感じはいいよな、なんだかこう、血が冷たくなるって
うか……」

石丸さんが懐かしいセリフを言っていたが、誰もリアクションを
取っていなかった、

おそらく去年も毎試合毎に言っていたのだろう。

円陣を組み、大田原さんが声を掛ける。

「騎士の誇りにかけて勝利を誓う、そう我々は敵と戦いに来たのでは
ない、

倒しに来たんだ！」

全員が拳を握った手を出し、ガチガチと合わせあう。

「Glory On The Kingdom!
」王国に栄光あれ!」

恋ヶ浜が先行で攻撃、なので僕はベンチスタート。

僕の仕事は攻撃のみ。両方出てもいいのだけど、実際の話、王城
デイフェンスの守備ゾーンと

フォーメーションに僕なんかが入っても邪魔になるだけだ。

今の王城の守備を完全に破れるチームでも出てこない限り、僕が守
備をする機会はないと思う。

最初のワンプレーで、相手のQBが、進さんのトライデントタック
ルの直撃を食らい、

数メートル吹き飛ばされて動かなくなった。

こぼれたボールを進さんが自ら拾い、そのままタッチダウンして先
制した。

進の凄まじいプレーに観客がざわめく。

「すつげえ、あれが高校最強のラインバッカー、進清十郎か」

「社会人リーグでも即戦力として欲しがっている逸材なんだってさ」

「おい、進のプレーは全部撮れよ」

「なんつーパワーとスピードだよ、バケモンだな」

「すごい、さすがサクラバくん!」

「いや、桜庭出てないし」

試合を理解していないリポーターのお姉さんがプロデューサーに
つつこまれていた。

吹き飛ばされた主将でQBでキッカーの正にチームの柱の初條さ
んだったかは退場。

応援してくれる彼女もおらず、残された選手は士気だだ下がりです
る。早くも勝負が見えた感じがする。

その後は1ヤードも進めずに攻撃権が王城に渡った。

「監督、神龍寺が偵察に来ています、小早川は温存してもよいのでは
?」

高見さんが監督に提案する。

「……いや、データはいずれ取られる、勝負はそれからだ、小早川、行け」

「はい」

「いよいよ高校デビューだ。心地よい感じで緊張している。相手が誰であろうと負ける気はしない、甘く見たりもしない。」

「対戦相手に敬意を払って全力を尽くし、そして必ず勝つ。」

「それが、進さんからお前がエースだと言われるということであり、自ら最強の選手であるアイシールド21を名乗るということだと思っている。」

「プレー前から観客がざわつきだした。」

「王城ホワイトナイツの攻撃、つまり、サクラバ君の順番ですね」

「リポーターのお姉さんが嬉しそうに言う。」

「そうだけどね、でもこの観客のざわつきの半分は、彼に対するものだろうね」

「プロデューサーが言う通り、歓声の半分は、ミーハーな女性の黄色い歓声とは違った、

「彼に対する期待のようなものが窺えた。」

「ついにどうぞ、小早川セナが」

「今日高校デビューなのに既に日本最高のランニングバックって言われてるあいつが」

「噂では進と一騎打ちで勝ったそうだけ」

「マジかよ」

「おい、小早川セナのプレーも全部撮れよ」

「ケケケ、アイシールド21か……知ってて付けてんのか、アイツは、だとしたら……顔に似合わず豪胆なヤロウだけ」

「そうなの、ヒル魔？」

「知ってて付けてんならな、謙遜なんて誰だって出来るんだよ、

「自らの最強を謳って自分を追い込むなんて、そうできるもんじゃねえ」

「(……出し惜しみはしない……今までの自分が身に付けたこと……

・・・新しく身につけたこと・・・全部出そう・・・
彼がみているんだ・・・ヒル魔さんが・・・今の僕のこととは知らなくても、

僕は彼を知っている・・・自己満足なのだろうけど、これは僕の「恩返し」なんだ)

ポジションにつく。

リターンで石丸が持つて走ってかなり進み、ゴールまでもう残り約20ヤードとなっている。

「くっそく、もうこうなりや、あのアイシールド21だけは潰してやるぜ、

パスも他の奴のランもどうでもいい、噂のあいっだけは止めてやる」

恋ヶ浜の選手が自棄になってそんなことを言っていた。

それを知って尚、高見は最初のプレーをセナによるランを選択した。

(これは恋ヶ浜だけに対するプレーではない、これを見ている神龍寺に、

これから対戦する相手に、今年の王城は違うぞと見せつける為のプレーだ)

「HUT」

セナがボールを受け取り、中央を突破にかかる。

大田原に蹴散らされ、がら空きのラインを突破する。

しかし、そこにパスも他のランも無視した恋ヶ浜の選手の残りがわらわら詰め寄ってきていた、

その人数、ディフェンスラインの4人を除く残りなんと7人。

「わ、恋ヶ浜、捨て身の作戦がズバリの中だ」

「あれじゃあランだけじゃあ抜けるスペースがねえ」

観客から声があがる通り、すり抜けるスペースすらないように見える。

(・・・スキマがない・・・スピードだけで抜けようとしてもどこかで

捕まる・・・

横一列にラインを作られたらどうしようもないけど、個別に寄せられていだけなら・・・

・・・ないならば・・・作るまでだ！)

一人、二人、三人

クロスオーバーステップを使ってすり抜けるルートをジグザグに走る。

しかし狭く、そのまま走っても相手の腕に当たってしまう。

一人目は、伸ばしてくる腕を、手刀、泥門時代というデビルスタンガンで打ち落とし抜き去る。

二人目は、一人目に近く走った分、急なカットで横を抜けた。

三人目は、真正面に来てしまったので、スピン、泥門時代というデビルバッドハリケーンで、

相手を弾いてこれを抜いた。

四人、五人

左右からタツクルの体勢に二人が既に入っている。

このまま加速しても捕まってしまう。

相手のタイミングを崩させるロデオドライブを使ってスピードに緩急をつけ、

加速直前の位置にタツクルがくるようにズラすことに成功し、一気に二人を抜いた。

六人

セナは、ステイファームを使って相手を抜き去った。

ステイファームとは、伸ばした腕をつつかえ棒にして距離をとる技術のことだが、

普通、小柄なセナが使うと、相手のほうが腕が長いので逆に捕まってしまうが、

セナは、相手の身体を押すのではなく、その脅威の動体視力で相手が伸ばしてきた腕に対して、

手を当て、自分の身体を押し出すようにして抜いていた。

これは、紅白戦で進を相手にとっさに使った技だが、セナはあれ以降、練習し、今では意識して使えるようにまであっていった。

七人

ゴールラインまで残り数ヤード、

真正面から突っ込んで行き、相手とぶつかった瞬間、

相手との接点を軸として「縦」に回転して相手を登り上がり、越えた。

縦のデビルバットハリケーン。

泥門時代に白秋のマルコ相手に一度だけ使った技。

凄まじいスピードで回転しながらもセナは空間を把握し、足から着地した。

「タッチダウン」

審判が宣言する。

瞬間、大歓声が沸き起こった。

セナの凄まじい走りに観客から大歓声上がる。

「す、すごい、早送りみたい……」

リポーターのお姉さんさえ素直に驚いていた。

（…やべえ、この小早川セナといい、進清十郎といい、すごすぎる、この二人に比べたら、桜庭はフツウだ、全然目立ってねえ……か
とってどうしようもないし）

プロデューサーはテレビ映りの驚いていた。

「すごい、すごいよ小早川君、ねえ見た、阿含君？……あれ？ いない」

栗田が興奮して言う。

阿含はリポーターのお姉さんをナンパしてメルアドを交換していた。

「阿含君、ねえ見てたの？ 小早川君すごいよ」

栗田がわざわざ言いに行く。

「あゝゝゝうっせえな、足がちよつと速い「だけ」のチビじゃねるか」
全てにおいて才能がない奴はいるだけで邪魔だと考えている阿含
にとって、

足が速いだけで筋力のないセナは見るに値しない相手だと思い、ろ
くに見ていなかった。

それを聞いていたヒル魔は思わず舌打ちしていた、

小早川セナの実力は、とてもじゃないが、足が速い「だけ」ではな
かったからだ。

（糞ドレッドの奴、進ばかり見ていて糞チビはちゃんと見てなかった
な、

言っても聞くわきゃねえし……対戦の時はなんとかして最初か
ら出させるしかねえか……）

「バケモノだな、小早川セナ」

武蔵がぼそりを呟いた。

「……………」

(…あのスピードにあの曲がり、人間の動きじゃねえ…
…しかもあの反応の速さは、阿含の神速のインパルスに匹敵している…)

阿含と小早川セナの能力を、反応速度、スピード、パワー、判断力で見てみると…

反応速度…互角。

スピード…小早川セナの圧勝。

パワー…阿含の圧勝。

判断力…アメフトの経験値の分だけ少し糞チビが上か…
七人抜きの際にいくつ技を出した？

手の使い方が抜群に上手い、ついこの間まで中坊だったガキのプレーじゃねえ、

目の前の状況の認識からベストの行動の選択、実行の間にタイムラグがほとんどない、

反応するだけなら阿含と同じ、いや、ほんのゼロコンマ何秒は阿含が上かもしれねえ、

だが経験による判断力…これはいくら阿含が天才でもどうしようもねえ、

阿含の才能なら一度見た技は使えるだろうが、逆に言えば見るまでは出来ねえってことだ。

…つまり、現時点において、総合で俺から見たらあいつは阿含を少しだが上回りやがる…

とんでもねえ奴だ…)

チームメイトから祝福を受けるセナを見ながら、

ヒル魔は自分が冷や汗を流していることに気づいていなかった。

だが同時に…

(…ヒル魔の奴…笑っていやがる)

武蔵から見たヒル魔は、とても楽しそうに見えた。

その後の試合展開は圧倒的だった。

僕は攻撃のみだが、石丸さんや猫山君と交代で何度か出場し、出る度にタッチダウンをとった。

桜庭さんは何度もパスをキャッチして、その度にフアンの悲鳴のような歓声を浴びていたが、

本人は悩みでもあるのか、終始憂い顔のままだった。

一度、ゴールライン前だったので、以前から打ち合わせて練習していたラインの上を飛ぶダイブ、

泥門時代でいう、「デビルバットダイブ」を慣行した。

これは練習で何回も見せているうちに、いつのまにか名前がついていた。

「ホワイトアロー」

そう呼ばれるようになっていた。

結局、150点差以上の大差で試合終了となった。

「ヒル魔、今年の王城をどう思う？」

もみくちやに祝福されるセナを見ながら、武蔵が尋ねてきた。

「……黄金世代が抜けた分、ラインは明らかに落ちてるな、まともなのは大田原だけだ。

クオーターバックの高見はなかなか優秀な奴だが、ラインが壊滅状態な以上、

ろくに仕事はできねえだろう、受け手のレシーバーも、エース桜庭クンは、一休の敵じゃねえ、

総合じやあウチが圧倒している、今年の王城で怖いのは、進と小早川だけだ……

まあ、この二人を抑えるのが至難なんだがな……

アメフトは一人で勝てるほど甘くはねえ、だが、一人いれば流れを変えられる、

試合を作ることができる……それが二人もいる今年の王城は……

……去年より強え」

「……黄金世代は抜けたが、天才二人がいる王城か……簡単に
はいきそうにねえな」

やれやれとため息を吐く武蔵。

ヒル魔は少し考えてから、

「………会ってみるか、小早川セナに」

と言った。

「珍しく直球だな、ヒル魔」

「ケケケ、裏は裏で調べるさ、でもアイツは、どう分類していいか決め
かねているタイプでな、

なら、直接この目で見て、この耳で聞くのが一番いいに決まってる、
行くぞ」

観客席から腰を上げながらヒル魔は言った。

「ほう、試合後に健闘を称えに行くとは見上げた心掛けだね、俺も行こ
うじゃないか」

と爽やかな笑顔で言ったのは、金剛阿含だった。

「………」

「………」

胡散臭いものでも見たような怪訝な顔をするヒル魔と武蔵。

そんな阿含の謎の言動の意味をぶつちやけたのは栗田だった。

「わかった、阿含君は王城のマネージャーの姉崎さんて人をナンパし
に行くんだね」

「………あゝ！！うるせえんだよ、カスデブがあゝ！！！」

凶星を指されて一瞬で化けの皮が剥がれた阿含は栗田をガシガシ
蹴って八つ当たりする。

「あいててて……ごめんよう、阿含くん」

試合後、ファンによる桜庭の出待ちで通路は埋め尽くされていた。
なので王城の選手は更衣室のある建物の裏口から出てバスに乗る
ことにした。

すると裏口を出た所に、ヒル魔達が待っていた。

「いよう、王城ホワイトナイツの諸君、初戦突破おめでとう、

黄金世代が抜けて弱体化したんじゃねえかと心配したぜ、ケケケ
ヒル魔が楽しそうに話しかけてくる。

「ありがとう、ヒル魔、おかげさまで「何とか」勝てたよ」

高見がメガネをクイクイさせながらヒル魔に返事した。

「あ、ヒル魔さん」

セナはつい、泥門時代と同じように素で呼んでしまった。

セナの呼び方は、まるで昨日ぶりだねとでも言うような気軽な呼び方で、

とても初対面の相手とは思えなかった。

ヒル魔の眉がぴくりと上がる。

「小早川君、ヒル魔を知ってるんだ」

栗田はセナが自分の仲間を知っていたことが嬉しかったのだろう、目をキラキラさせて言う。

ヒル魔は、ゆっくりと歩いてセナの目の前まで来た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

お互い無言で見つめあう。

この光景を見て、後ろにいた武蔵はやはり違和感を感じていた。

(・・・やはり、小早川セナの目に恐れや怯えは全くない・・・度胸のある奴だ・・・)

だが、何故あいつの目は嬉しそうなんだ？・・・どっちかというところ懐いているかのようにさえ見える・・・ヒル魔はそんなキャラじゃねえだろ・・・小早川が分類できねえ奴とはそういうことか)

目の前に、あのヒル魔さんがいる、僕を見ている。

すぐ後ろには、栗田さんと武蔵さんもいる。

あと阿含さんが何故かキョロキョロしてるが、あ、雲水さんが話し掛けた。

この後、ヒル魔さんはどうするのだろうか？

挨拶に来ただけ？

健闘を称えに来た？

絶対に違う、彼はそんな人じゃない。

敵にはとことん悪になれ。

アメフトはビビらせたら勝ちだ。

常にそう言っていた人なんだ。

ならば、ここはどうする？

・・・威嚇か・・・挑発か・・・どちらかだと思う。

すると、ヒル魔さんはニヤリと笑い、

「ケケケ、こんなチビがレギュラーだなんて、王城も落ちたもんだなあ」

と言った。

・・・挑発だった。

わざと相手を怒らせるような発言をして煽り、そのリアクションから相手の性格を分析する。

相手のエースを小馬鹿にすることで、相手を見下している、つまり、油断していると誤解させる。

打てる手はどんな手も打つ。

勝ち目が1%でも残っているならば諦めない。

勝つ確率が99%でも、1%負けるのなら油断しない。

そんな人だ。

ああ、目の前にいるのは、間違いなく、ヒル魔さんだ。

僕は嬉しくなって、つい、微笑んでしまった。

ザワツ！

神龍寺の面々も、王城の面々も、セナのこのリアクションに驚いた。普通、あんなことを言われたら怒るものだ。

事実、高見は言い返そうとしていたし、

栗田は、ヒル魔の発言に相手を怒らせたかとハラハラしていた。

だが、セナはそんな挑発に意も介さずニツコリと微笑んで見せたのだ。

心底楽しそうに、嬉しそうに。

周りがぎよつとして停止してしまうのも無理はない。

しかし、ヒル魔だけは驚かず、じつとセナの目を見ていた。

小早川セナの目は、ヒル魔を知っているではなく、会ったことのある目だ。

ならば、せつかく本人が目の前にいるのだ、聞いてみればいい。

(コイツ・・・コイツは、楽しんでいやがる、俺との会話を・・・駆け引きを・・・)

プレー以外でもアメフトに関わることは全て楽しい、そんな笑みだ・・・そんな目だ・・・

さっきの俺の挑発も意味を理解してるな・・・・・・面
白え)

だが、聞いたことはこれだった。

「・・・どこかで・・・会ったか？」

本当のことを言っても信じてもらえないのはわかっている。

でも、この人にも嘘はつきたくない。

「いえ、初対面です・・・でも、あなたのことは前から知っていました」

と、部分的ではあるが、正直に言った。

(・・・嘘はついてねえようだ・・・が、全部話したってわけでもねえな)

「・・・そうか」

それだけ言っただけ背を向けるヒル魔。

「気に入ったようだな、ヒル魔」

武蔵が聞く。

「まあな、とりあえず合格つてとこだ・・・・・・ケケケ、

強えぞ、アイツは、小早川セナは、身体能力だけじゃねえ、メンタルもなかなかだ、

全てのトリックプレーを駆使してブチ潰さなきゃならねえ相手だ、

テメエらも気合入れるよ、去年の黄金世代みたいに「簡単」にはいかねえぞ」

楽しそうに話しながらヒル魔達は去って行った。

「小早川は、ずいぶんヒル魔を買ってるんだな」

高見がセナに話しかけた。

「はい、ある意味僕は、彼が神龍寺で一番の難敵だと思っています」

セナははつきりと答えた。

「それほどの男か、蛭魔妖一は？」

セナの隣に来た進の問いにも、迷わず肯定するセナ。

「・・・そうか・・・筋力は並のようだが、注意すべきはそんなことではないということか、

セナがそう言うのだから、そうなのだろう」

進は右手を出し、拳を握った。

ゴキキ、と骨が鳴る。

「面白い」

と、進はヒル魔達が去って行った方を鋭い眼光で睨みながら言った。

それを見ている王城の面子からは、もう恋ヶ浜に大勝した緩みは全くなかった。

「勝つぞ、セナ」

「はい、進さん」

こうして、春の東京大会は始まった。

12th down 金剛兄弟

少し時間を遡り、ヒル魔とセナが会話していた頃。

阿含は雲水に声を掛けられて話をしていた。

「がんばっちゃってるのか、雲子ちゃんよ」

「ああ、お前に勝ちたいからな」

見下した顔で接する阿含に、いつも通りのクールさで対応する雲水。

それを見て、阿含はニヤリと、意地悪な笑みを浮かべた。

「ククク、そーかいそーかい、それじゃあ、お望み通り遠慮なく、プチつと潰してやるよ」

指で虫を潰すような仕草を目の前で見せる阿含に、雲水はフツと笑うと。

「望むところだ！」

と、言い切った。

「・・・あ？」

間違った、しかも雲水らしからぬリアクションに、阿含は一瞬、言葉を失った。

「・・・お前・・・変わったな」

阿含は馬鹿にするでもなく、静かに聞いた。

一瞬でも阿含を唾然とさせたことに満足したのか、雲水は今まで見せたことのないような、

少しいたずらっぽい笑顔で話し出した。

「ああ・・・俺はな、楽しむことにしたんだ・・・アメフトとか、人生とか、色々な・・・」

・・・で、そのついでに、お前を倒してやろうと思ってな」

「・・・倒す・・・この俺を・・・ついでに・・・」

クワツと目を見開いて雲水を睨み、齒の間から掠れるように声を漏らす阿含。

知らない人が見れば、人を殺しそうな阿含の様子にも雲水は毛ほども動揺せず、見つめ返していた。

阿含は少しの間、そうしていたが、段々と獰猛な笑顔になっていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・クククク、なかなか言うようになったがな、雲子ちゃんよ、

俺はそんなもんじゃ認めてなんかやれねーよ、むしろ、思い知らせてやるよ、

お前が今まで培ってきたもの、積み上げてきたもの、信じてきたものが・・・・・・・・

才能の前には、何の意味も無かったってことをな」

雲水の数センチ前まで顔を近づけて擦り込むように言う阿含。

しかし、それに対して雲水はクールだった。

「・・・例え、思い知らされたところで、俺は折れんよ・・・もう二度と」

そう言うと、雲水はくるりと阿含に背を向けた。

「じゃあな・・・次はフィールドで会おう」

そう言い、去っていった。

いや、行こうとしたら、阿含が後ろから雲水の肩をがちり掴んで止めた。

「待て、雲水」

「え、な・・・何だ?」

話はこれで終わりっぽい雰囲気だったので、まさか呼び止められるとは思わず、少しももる雲水。

阿含はさつきとはまた違った鋭い眼光で雲水を睨み、こう言った。

「お前のとこの、姉崎とかいうマネージャーのメルアド教えろ」

阿含は当初の目的を忘れていなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ?」

予想外の内容に、つい阿含みたいな「あ」に濁点をつける返事をしってしまう雲水。

「あの女をナンパしに来たってのに、いねえじゃねえかよ」

まるでいないのは雲水の責任であるかのようになじる阿含。

先程までのピリピリした空気はもうなく、ただの兄弟の会話になっ

ていた。

「マネージャーは荷物の整理とかで別行動だ、もうバスに着いてるだろう」

ここにいないのだから諦めろと言外に言う雲水だが、

阿含がそれで納得するわけもなく。

「だったらお前に聞くしかねーだろ、ハーフだろ、あの姉崎ってのは？」

「いや、アメリカ人とのクォーターだと言っていたな」

律儀に答える雲水。

「ほう・・・聞いたのか、話をしたのか」

「まあ・・・クラスメートだしな、メールアドレスや携帯番号の交換もしている」

さらりとのたまう雲水に、阿含は激昂した。

「なっ・・・なんだと！貴様、何故それを言わない？」

「何故言わなきゃならないんだ」

雲水とまもりはクラスメートだった。

王城高校で1、2を争う美少女の姉崎まもりと仲良くなりたいたい、ケータイ番号を知りたい男子は大勢いた。

しかし、アメフト部員を含めた王城の男子生徒で、まもりのメルアドを知っているのは、

セナを別にすれば、立場上知っているキャプテンの高見と、偶々ラッキーで知ることのできた猫山君、そして、雲水くらいのものだった。

雲水が知ることになった理由は、まず彼が生真面目な性格であったことによる。

キャプテンの目の届かないレギュラー以外の選手を取りまとめたり、選手の相談にのってあげていた雲水は、いわゆる選手内部のバランスーのような立場でもあったため、マネージャーとの連携で、練習以外にも、学校で休み時間に打ち合わせをしているうちに、連絡先をとりあうことになったというのが真相である。

周りから羨ましがられたが、

雲水にすれば、便利だから連絡先を教えあつたにすぎず、姉崎まもりに対して恋愛感情は持っていなかった。

綺麗な女性だな、くらいの認識はしていたが。

というより、それ以上踏み込む気もなかったし、踏み込まないようにしていた。

先ほど阿舎には人生とか色々楽しんでもか言つたが、あれは見栄と意地で言つただけで、

実際の所は天才阿舎を相手にそんな余裕は一切なかった。

そんな時に、恋愛などにうつつを抜かす暇などあろうはずもなく、寧ろ害であると思つていた。

強くなる為の不純物であると断定し、忌避してさえた。

ギリギリと自分を肩を掴んで締め上げてくる阿舎に、雲水は諭す様に言つた。

「………阿舎……姉崎は諦める……」

何故なら、俺の知る限り、彼女はルールを破る、いわゆる不良という輩が大嫌いだからだ、

つまり、お前みたいな奴だ」

雲水は阿舎を傷つけないように、などとはこれっぽっちも考えず、ストレートに言つた。

言いつつ、手に力の入っている阿舎に手を離すようゼスチャーで伝える。

「………ふん、わかつてねえな、雲子ちゃん、嫌よ嫌よも好きのうちってな、

人間つてのは自分の無い部分に惹かれちまうもんなんだよ、嫌つてゐるのは意識してゐることだ、感情の裏返しなんだよ、ま、お前みたいな朴念仁にやあわかんねえだろうがな」

雲水の肩から手を離しながら、ヤレヤレと呆れたように声をあげる阿舎だった。

「いや、嫌なものは嫌なのだろう」
雲水がまつとうな意見を言う。

セナとの話も終わり、帰ろうとしていたヒル魔達三人は、未だ終わらない金剛兄弟の会話を見ていた。

「仲いいんだねえ、阿含君と雲水君」

栗田が今日何本目かのフランスパンを頬張りながら言った。

「ケケケ、いいっていやあ、いいよな、人間ってのは自分の無い部分に惹かれちゃうもんだからな」

そう言うヒル魔の言葉に武蔵が疑問を投げた。

「無い部分だったって、才能で見れば阿含が皆持つって、雲水は何も無いじゃ成立しないんじゃないか？」

「そう見えるかもしれないけどな、確かに雲水にとって阿含は自分に無い才能を持っている、

憧れるだろう、しかし阿含にとって雲水はそんな対象になり得ない、はずなんだが、

そこが人間のオモシレエとこでな、何でも持っている阿含はな、何も持っていない雲水の気持ちを理解できねえんだよ、

山の頂上からじゃあ麓からみた景色が見えないように、持っているからわからねえことがあるんだよ、これで雲水が年下で女で妹なら庇護の対象としてみれるんだろうけど、この兄弟は複雑なんだ」

「・・・そんなものか」

「ああ、見てて飽きねえ兄弟だぜ」

そう言うヒル魔は、大声でその兄弟を呼んだ。

「おい、その糞仲良し兄弟の弟、もう行くぞ！」

ヒル魔がからかい気味に声をかける。

「あ”あ”っ、誰が仲良し兄弟だゴルア!!!」

阿含が怒鳴り返してきた。

「いいか、今度教えろよ」

雲水をビシッと指差して去っていく阿含。

「だから、本人に聞け、無駄だろうけど」

そんな阿含にしれつと返す雲水。

言い争いながら金剛兄弟は別れた。

おまけ くまた名前をつけようく

「よし、名前をつけよう」

「またですか、高見さん」

「ああ、小早川がまた沢山技を出したからね、お兄さん考えてきたよ
(お兄さん?)」

「皆で名前を考えようじゃなくて、高見さんの発表会だよ、これ」

「いい名前なら採用するよ、王城に相応しい優雅な名前ならね」
「……………」

「今回は、腕で相手を叩き伏せたやつと、

ステップにスピンを加えた走法と、

縦のスピント、

ロデオドライブと、

ステイファームの5つだな」

「……………最後の2つはもう名前ついてるんじゃない?」

(上の2つは、デビルスタンガンとデビルバットハリケーンだな)

「最初の手刀だが、相手に対して反応速度の限界を超えたような、まるで雷のような一撃だった、

なので、この技を「ナイトオブサンダー」と名付けよう……………え
く次に……………」

「我々の判定とか意見とか無視っすか」

「……………ステップにスピンを加えた技だが……………台風のよ
うな回転だったので、

この技を「ホワイトトルネード」と名付けよう……………うむ、い
い名前だ、で、次だが……………」

「はい、高見さん」

部員の一人が挙手した。

「ん、なんだい」

「次のロデオドライブとかステイファームは、もう名前があるのだからそれでいいと思います」

その部員の意見に、大多数の部員がうんうんと賛同を示した。ぶつちやけ、もう彼らは帰りは帰ったかった。

「……ふ、違うよ、敢えて名前を変えるべきなんだよ、プロレスを見てごらん、

ラリアートと言う技だつて、ハンセンが使うとウエスタンラリアート、鶴田が使うとジャンボラリアート、

長州が使うとリキラリート、と皆違うだろう……そういうことさ」

「……はあ……よくわからないような、全然理解できなような……」

「つまり、ちよつと変えればオリジナルと言い張ってもいいんだよ、つまり……」

「……ホワイトロデオドライブ」と「ホワイトステイファーム」で決まりだ」

「……ホワイト付けただけじゃん！」

「それが何か？……えくと次で最後だね、ホワイトトルネードの縦回転か……どれがいいかなあ」

「高見さん、最後までいろいろは多数決で決めませんか？」
また部員の一人が発言した。

「ん……まあいいか、ここまでやれば、名付けの方向性もわかったろうしね」

で、早く帰れたかった部員達は、猫山君が適当に付けた、

「ホワイト廬山昇竜破」

に満場一致の採択をし、会議を終えた。

会議終了後、意気揚々と引き上げる高見に対して、残りの部員達は同じことを思っていた。

（……絶対、次の試合までに忘れてると思う、

高見さんのネーミングって妙に凝ってて覚えにくいんだよねー、
さらに最後のとか使いたくねーし)

セナは思った。

(ホワイト廬山昇竜破はないだろ、なんて名前つけてくれるんだ猫山
くんは……)

……まあ、監督からは、あれは怪我するのでもう使うなって言
われてるし、封印だね)

く猫山君から見たセナく

クラスメイトになった小早川セナ。

彼のことは中学のころから雑誌やテレビで知っていた。

中学MVPで日本最高のランニングバック、

同じポジションとしてライバル心もあったが、それ以上に、憧れた。

高校に進学して、彼がチームメイトになると知ったときには嬉しかった。

クラスメイトで、席が隣になった時は、最初は緊張した。

テレビや雑誌によく載っている人物が隣にいるのだから当然だろう。

芸能人が隣にいてもここまでは緊張しない。

モデルの桜庭さんと最初に会ったときは「ほく」で終わったし。

しかし、言った通り、緊張したのは会うまでだった。

彼があまりにも、普通だったからだ。

試合中のセナは、活き活きしていて、かっこいい印象が強かった。

なんとというのか、目が生きていてというのか、小柄な体格なのに大きく力強く感じた。

だけど、教室で会ったセナは、のほほんとしているというのか、気が抜けているようだった。

フィールドにいる時とは別人のように、目立たない。

こうして見ると、小柄で細身で童顔だ。

これで男子の制服でなく、髪の毛が長かったら女の子にしか見えな

い。

一度、クラスの女子がどこから持ってきたのか、ロングヘヤーのツラ、ウィッグって言うのかを、

セナに被せてみたことがあった。

さらに膝下まである長めの白いエプロンを着させられていた。

……どこからどうみても美少女にしか見えなかった。

不思議の国のアリスを連想する白いワンピースを着た女の子。

女子はもちろん、男子ですら呆然と見蕩れていた。

俺も冗談抜きでマジで惚れそうになった。可愛いすぎだろ！

セナは女子が写メを撮ろうとすると慌ててウィッグもエプロンも脱いでしまったが、

その前に俺が一枚こっそり撮った。

憧れの姉崎マネージャーと会話をするネタにその話をしたら、めちゃくちゃ食いついてきて、

その写真を転送してあげるかわりに彼女のメルアドをゲットすることができた、なんてラッキー。

姉崎さんはほとんど鼻血をださんばかりにセナの女装写真に見入っていた。

女装少年が好きなのだろうか、俺もやってみようかな？

・
く最近のまもりく

最近、まもり姉ちゃんは綺麗になったと思う。

元々綺麗な人だとは知っていたけど、

ちよつとした仕草にドキツとするようになった。

なんて言うか、色恋沙汰を全然わかっていない僕がいうのもおかしいが、

大人の色気が出てきているというか。

クラスメイトになった猫山君は明らかにまもり姉ちゃんを意識していると思う。

「お、女の人って、恋をすると美しくなるって言うけど、あ、姉崎さんはひよつとして、

誰か好きな人が出来たんじゃ？」

そんなことを猫山君が何故か焦って言っていたことがあった。

わからないなら聞いてみようと思ひ、今度一緒に帰る時に聞いてみることにした。

・
ある日、セナとまもりが二人で帰宅している時、セナが尋ねた。

「まもり姉ちゃんは、最近好きな人とか出来たの？」

「はにゃ!!」

無警戒時にど直球の質問に、猫のような素っ頓狂な声を上げてまもりは驚いた。

「ど、どうしてそんなこと聞くの?」

「いやね、猫山君とかが最近まもり姉ちゃんが綺麗になったのは恋をしているからでは、

なんて話してたからそうかなって」

「…そうかな…綺麗になったって言われても、よくわかんないな」

照れて俯いたままと答えるまもり。

「せ、セナは…どう思う?」

俯いたままと、目だけ動かしてセナの顔色を窺うように尋ねるまもり。

「僕も猫山君と同じ意見かな、まもり姉ちゃんは綺麗になったと思うよ」

至極あっさりとももりの期待していた答えをセナは言った。

「ほ、ホント!!」

ガバっと顔を上げてセナを見るまもり。

「うん」

にっこりと笑って答えるセナ。

「……………ありがとう、嬉しい」

嬉しきにどうかかなりそうだったまもりは、何とかそれだけ返事できた。

そして、この場でセナに抱きつかなかった自分を褒めてあげたいと思っただけという。

しかし、セナから見れば、褒め言葉に対する冷静な返事に、

大人の女性の対応だなあ、さすがまもり姉ちゃん。

と、思っただけという。

「……………ふう」

セナと別れ、家に入って玄関で溜息をつく。

まもりは、最近の自分のセナに対する「好き度」がメーターを振り

切っていることを自覚する。

今日のこと、もし言われてたのが、

下校中でなかったら？

人前でなかったら？

二人つきりだったら？

抱きしめていたと思う。

ほっぺたにキスしていたかもしれない。

押し倒すまではさすがにない・・・と思いたい。

セナの成長を妨げたくないとは思うものの、自分の想いは募つていく。

どうすればいいのか悩みは尽きないまもりは、ふと思った。

(…セナの成長を妨げなければいいのかな…)

……つまり、バレなきやいいのかな)

我慢度が限界に達しているまもりは、思考が迷走しはじめていた。

セナの成長を見守ると決めたまもりではあったが、まだ17歳。

これが、恋煩いであることに気づいていなかった。

三回戦、三閣。パンクス戦。

「王城の時代は終わりました、これからは我々の時代ですよ、

優秀なルーキーが一人入ったくらいでこの流れは止まりませんよ」

と、その監督が記者に豪語していたチームに、大勝した。

しかし、問題もあった。

まず、僕が試合途中にアクシデントで交代した。

僕がボールを持って走り、クロスオーバーステップで相手を抜こうとした時のことだ。

(…え〜と、なんだっけ技の名前…確か、ナイトオブゴールド…だっけ？

いや、違う、全然違う…ナイトオブオーナー…いや、これも違う、

…しまった…忘れた！)

なごど考え事をしていた僕は、相手と正面衝突してしまったのだ。

幸い、僕も相手も怪我がなかったのだが、調子が悪いのかと下げら

れてしまった。

監督にも、何をやっているんだと怒られながらも呆れられてしまった。

ふと観客席を見ると、ヒル魔さんが、腹を抱えて大笑いしていた。激突した理由を理解されてしまったのだろうか、

恥かしいところを見られてしまった。

：言えない、恥かしくてとても言えない。

何をやってるんだ僕は。

そうして、ベンチで自分達のチームの攻撃を見ている時、気づいたことがあった。

気のせいならそれでいいのだが、そうでなければ問題だ。

うちのチームは、ひよつとしたら、オフエンスラインが脆いのかもしれない。

守備の際は進さんが相手の防御を早々に切り崩してしまうため、全く問題にならなかった。

しかし、進さんがいない攻撃時にはラインの力はより重要性を増す。

三閣パンクスとの試合。

万全の試合展開のように見えた。

大田原さんはオフエンス時にも相手をなぎ倒していた。

大田原さんは本当にすごいと思う、頼りになる。

しかし、大田原さん以外のラインは特に相手を倒したり抜いたりしていなかったのだ。

攻撃なのだから抜く必要はなく、QBに近づけさせなければよいので問題ないはずなのだが、

これは考えようによっては、ラインの力は互角だったと考えられるのではないだろうか。

三閣パンクスで互角では、それ以上のチームだと致命的となる。

攻撃時に相手からのブリッツがガンガン来れば、クォーターバックは何もできない。

ラインはレシーバーが上がるまでの時間は持つてくれなければ試

合にならないのだ。

現時点では、問題にもなっていないが、大丈夫なのだろうか。

ラインは弱体化している？

だとすれば、その原因は先代の黄金世代と言われている先輩達が原因と思われる。

彼らは優秀であったがために、王城の悲願である、打倒神龍寺を果たせるかと期待された。

結果的に駄目であったが、それを成し遂げるために、常にベストメンバーで戦い続けた。

それ故に、次世代の人材を育てるということをおろそかにしてしまったのだった。

よく、黄金世代の言われる世代の次は谷間の世代と言われる原因がこれにあたる。

経験の無さと、先代の強さを見続けていたための自信のなさが拍車をかけているのか。

では、どうすればいいのか、明確な解決策が見当たらない。

合宿などで試練を与え、乗り越えさせる時間はない。

都合よくラインの出来る強力な選手が入部するはずもない。

春大会はもう始まっているのだ。

試合で経験を積ませ、自信をつけさせるくらいしか現状で打てる手はなかった。

決勝で当たるとであろう、西部ワイルドガンマンズ戦に向けて、やることは沢山あった。

いや、そもそもラインの弱体化が僕の杞憂であれば一番いいのだが・・・

14th down ワイルドガンマンズ

春の東京大会決勝。

順調に勝ち進んだ僕達王城ホワイトナイツは、決勝戦まで駒を進めた。

相手は西部ワイルドガンマンズ、

これに勝ては関東大会に出場が決定する。

ワイルドガンマンズには、陸がいたはずなのだが、何故かスタメンにも控えにもいない。

泥門時代にはどうだったのか、あまり憶えていないが、いなかった気がする。

憶えているのは、王城が勝ったということだけだった。

陸とは、僕がこの記憶みたいなのに目覚める前に出会っている。

短い間だったが、その時に走り方を教わったのだった。

この記憶を思い出してすぐにクロスオーバーステップが出来たのはそのおかげだろう。

でなければ筋力が足りなくて出来るわけがない。

「たは〜、参ったね、こりや、王城相手に20点か、良すぎる日はたいていロクなことがねえ」

西部ワイルドガンマンズのQB、キッドさんが謙遜しているのか自慢しているのかよくわからないことを言っていた。

前半が終わって20-13。

この決勝戦まで、王城は対戦相手に1点も取られていなかった。

しかしこの試合で初めて失点し、しかもリードまでされてしまっている。

攻撃に関しては、僕の2タッチダウンのみで抑えられていた。

トライフオーポイントはキックが一回成功のみ、

デビルバットダイブ：じゃない、ホワイトアローは怪我の危険性のある技だということ、

終盤以外は使用禁止という命令が出ているので使っていない。

進さんのいる中央へのパスは避けているようだが、そこ以外がガンガン通る。

西部のパス特化フォーメーションであるショットガンと、QBのキッドさんのパスを王城の守備が止められないのだ。

特にレシーバーの鉄馬さんとの連携がすごい。

鉄馬さんが、決められたルートを数センチとズレずに走れる上、走るスピードも一定なので、キッドさんは投げたい時に彼がどこを走っているのかわかるので、

投げる前にレシーバーの位置の確認を必要としないという早撃ちを実現させていた。

進さんがブリッツに行った場合でも、なんとキッドさんのパスはそれより速い。

両手を交差させるような投げ方で、腕のバックスイングもないのでよく遠くまで投げられるなどと思うが、とにかく速いのだ。

進さんのトライデントタックルは、スピード自体は元々のスピアータックルと変わらない、

グースステップを織り交ぜたフェイントが重要なのだ、かく言う僕も引つかかった。

しかし、キッドさんにはそれも通用しなかった。

冷静に、進さんの手が届く前にパスを出していた。

さすが、泥門時代にヒル魔さんが認めただけはある。

分の悪い王城は、状況打破の手として、僕が守備に出ることになった。

守備で試合に出るのは初めてだが、練習はしている。

以前も言ったように、僕では守備のフォーメーションやゾーンディフェンスの邪魔にしかならないので、やることは決まっていた、それは…。

守備に出てくるセナを見て、キッドが一人ごちた。

「……セナ君が出てきたねえ、彼が守備に出てくるのは初めてじゃないかな、

…ポジションは…鉄馬のマークか…

…なるほど、鉄馬がボールに触る前に彼のスピードで先回りしてボールを叩き落そうって所かな？

いくら鉄馬が最強のレシーバーでも、ボールに触れなければどうしようもないからねえ…さて」

キッドはチームメイトに指示を出す。

「王城は鉄馬をセナ君に任せてディフェンスは他のレシーバーに集中している、

ここは、鉄馬へのヒッチで行こう、いくらセナ君が速くても、ショットパスなら競り合いになる、

そうなれば、鉄馬が勝つ」

ヒッチとは、走行ルートの名前で、少し前進後、左斜め後ろに戻るルートのことである。

今まで防がれたことが一度もない、キッドー鉄馬の鉄板のプレーだった。

作戦会議が終わり、プレーが開始される。

そして、ボールを持った瞬間、キッドは、自分に向かって来る選手がいることに気付いた。

（誰だ、ど真ん中から突っ込んできた、…進氏か…いや、彼はポジションを離れていない、

残っているのは……金剛雲水か…いや、冷静に対処するんだ、誰でもあろうと関係ない、

このタイミングなら間に合う、いつも通りリリースすれば、このまま鉄馬に投げられ……!）」

その時、一筋の光のような速さで間合いを詰め、キッドの目の前まで来たのは、セナだった。

「なっ!!」

キッドが驚愕に目を見開くが、その時にはもうセナはキッドのボールを持つ腕に両手でタックルしていた。

セナはそのままボールを弾き、宙に浮いたボールをキャッチした。

「何故、何故アイシールドがあんなところに！」

「あいつ、鉄馬のマークをしてたんじゃ？」

「じゃあ、鉄馬のマークは…？」

鉄馬には、誰もマークしていなかった。

「…あの鉄馬を、完全なノーマークで、放置…」

驚く西部の面々に、高見がメガネをクイッと上げてニヤリと笑って言った。

「ここで、あのエースレシーバーの鉄馬をノーマークに出来るわけがない、

…だからこそ、無視するのさ、小早川の考えた作戦だよ」

これは、泥門時代に神龍寺の金剛兄弟からボールを奪ったヒル魔の奇策を、

セナが覚えていてそのまま応用していたのだった。

「タッチダウン」

ディフェンスラインの崩れた状態でセナを止められるわけもなく、セナはあつという間にタッチダウンした。

「はくあ、やるねえ、まさかこんな手で来るとは…やっぱ良すぎると…って、鉄馬？」

何とか建て直しを考えていたキツドの横を、鉄馬がすごい勢いで通り過ぎ、トイレに駆け込んでいった。

「どうしたんだ、鉄馬？」

「そーいや、さっき水分補給しとけって言ったたら、アホみたいにガブ飲みしてたな」

キツドの疑問に監督が答えた。

「……やれやれ、やっぱ、良すぎるとロクなことがねえってことだな」
テンガロンハットを深く被り直しながらキツドはごちた。

逆転され、鉄馬は使い物にならず、セナが両面で出場してくる今の状況を打破する策は、

今の西部にはなかった。

それ以降、西部に1点も許さず、王城は着実に追加点を重ねていった。

そのまま試合が終了し、結局、20点差をつけて王城が勝利した。関東大会出場に沸き上がる選手と観客。

ハイタッチで勝利を祝う選手達。

進清十郎も流石に嬉しそうな表情を見せている。

満足そうに頷く庄司監督。

手を取り合って喜んでいる姉崎まもりと若菜小春のマネージャー。

飛び上がって喜んでいるチアガール、その中には瀧鈴音がいる。

そんな中で揉みくちやにされ、一緒に喜びながらも、セナの心は静かだった。

感慨深いというべきか。

(……やっつと、ここまできた、やっつと、彼と戦える……ヒル魔さんと)

神奈川大会をあつさり制した神龍寺ナーガ。

間違いなく最強の相手。

だが、こちらとて昨年黄金世代が敗れてそのリベンジに燃えている。

阿含さんと戦うために王城に来た雲水さんや、

進さん、高見さん、大田原さん、桜庭さんと、神龍寺に引けをとらない面子も揃っている。

これから戦うヒル魔さん達がいる強敵神龍寺ナーガ、王城ホワイトナイツの頼もしい仲間達、

そんな彼らに囲まれて、セナは思った。

(素晴らしい、僕はなんとという幸運児なのだろう。)

長い人生の中で、こんな檜舞台で、こんな人達との試合なんて、そう出会えるものじゃない。

その主役の一人として僕がいる、素晴らしい経験だ、ここで彼らを破らずしてどうするか?)

関東大会の一回戦の相手が神龍寺ナーガに決定した。

皆が試合直前の最終調整をする中、僕は親友「だった」彼と邂逅した。

「キャッチMAX~~~~!!」

校外にランニングに行った帰り、王城高校敷地内の多目的グラウンドの近くを通りかかった時に聞こえたこの声に飛び上がって驚いた。

「モ…モン太!!!」

セリフといい、声といい、間違えるわけの無い懐かしい声。

慌てて全力ダッシュでグラウンドの脇まで走る。

(ここは王城高校の敷地内…ってことは、モン太は王城に入学してた…同級生全員の名前の確認なんてしてないけれど、気付かなかったなんてあり得ないんじゃないか…)

グラウンドでは、野球部が練習試合をしていた。

スコアボードを見ると、「王城高校 対 泥門高校」と書いていた。

声はグラウンドから聴こえた、そして現在は王城高校の攻撃、つまり、あの声は泥門高校の選手だということになる。

見ると、ボールをキャッチしたレフトが返球するところだった。

フェンス際でダイビングをしたのか、帽子が脱げていてすぐわかった。

雷門太郎。

自分と変わらない身長、短いツンツン頭、鼻の上の絆創膏、太い眉、そしてお猿さん顔…は失礼か。

間違いなかった。間違えるわけがなかった。

モン太がいる、野球をしている、レギュラーとして試合に出ている。でも、どうして？

確かモン太ってノーコンで三軍落ちだったはずでは。

と、思ってた。

モン太は、ヒュッとボールを内野手へ投げて返した。

「あ…れ？」

つい声に出してしまう。普通に返球した。ノーコンなんかではない。

僕がいた泥門時代には、モン太のノーコンは結局直らなかつた。ではこの世界はモン太がノーコンではない世界ということになるのか。

そう思っている間にまた王城の選手が打った。そしてまたレフトに飛んでいく。大きな当たりだ。

フェンス際まで飛ぶ、普通なら完全に抜ける当たりだが、

モン太はほとんど打球を見ずに全力で走り、フェンス際でそのままジャンプして背面でキャッチしてしまった……これ……デビルバツクファイアじゃないか。

「……すごい」

僕の独り言に、答えを返してくれる人がいた。

「すごいだろう、あいつは、キャッチに関してだけは天才だよ」

そう言ったのは、泥門の監督のようで、タバコを啜えた不機嫌そうな人だった。

「え……つと、泥門の監督さん？」

「ああ、そうだ」

僕はどうやら泥門側のベンチ脇に来ていたようだった。

ならばこれ幸いと隣に移動し、話をきいてみることにした。

「今のキャッチもな、あいつはバッターが打った瞬間に打球の勢いが上がった角度で落下地点がわかるんだよ、だからあいつは打球をほとんど見ないでキャッチできるんだ、すごいだろう」

泥門野球部の監督は、王城の生徒である僕が、自分の高校のチームの選手に感心しているのに気を良くしたのか、機嫌よく話してくれた。

「まあでも、最初はキャッチ以外は酷いもんだったんだがな、雷門は」と言うど？」

「信じられないくらいノーコンだったんだ」

来た、モン太はやっぱりノーコンだった。ノーコンじゃない世界な

んかじゃなかった。

では何が、彼を変えたのだろうか。

「二年が入部テスト前にある程度の実力を見るんだがよ、あいつのノーコンは常識じゃあり得なかったんだ、投げる球が真横とか、下手すりゃ後ろに行くんだぜ、信じられるか?」

そーいえば、そんなノーコンの場面を何度も見たことがあるなあ、言われてみれば、信じられないくらいのノーコンだな。

「普通に投げてりやあな、真横とか後ろに行くなんて人間の骨格じゃあり得ないんだ、骨が変形でもしていなければな、あまりに変なんで、俺がちよつと雷門の投げ方を見てやったらよ、もうすごい投げ方してんの」

身内の恥の話なのだろうが、もう過去の話なのだろう、思い出し笑いをしながらサバサバした表情で楽しそうに話す監督。

「間違ってるのよ、投げ方を、しかも全部」

「投げ方を…全部って、どういうことですか?」

「詳しく聞きたい?」

「はい、是非!」

「よろしい、えつとな、球を投げるスローイングってのはな、簡単に分けると三つに分類できる、

ボールの握り方、腕の振り、ボールを離すリリースポイントの三つだ。

ボールを持って、腕を振って勢いをつけて離す、それだけのことなんだ、慣れれば簡単なもんだ。

「ここまではいいか?」

「はい」

身振り手振りを加えて判り易く説明してくれる泥門の監督さん、不機嫌そうな見た目に対して結構親切な人のようだった。

「雷門はな、この3つを3つとも致命的に間違ってたんだ、

まず握り方だが、普通は腕の力がまっすぐ伝わる中指と人差し指の2本と親指で掴んで後の指は添えておくだけだ、だが雷門はまず手の平にボールをぴったりと当てて、五本の指で包むように鷲掴みだ、

掴むことばかり考えてて離すことが念頭になかったんだな」

確かに、そんなに深く握ったら離しづらいことは確かだな。

「次は腕の振りだが、投げる方向へ向かって腕を振る、当たり前のことなんだが、これも出来ていなかった、上から投げる場合、投げる方向さえ合っていれば上下に外れることはあっても左右にずれることはない、バツティングマシンが判り易いな、リリースポイントが一定ならズレるわけないんだ、それを雷門の奴は、後ろから振りかぶって横へ腕を振ったりな、真上へ腕を振ったりな、最初見たときはふざけてるのかと思つたが、真面目にやってるのがわかった時は驚いたぜ」

キャッチに100%集中していたモン太は投げることに関しては1%も考えていなかったってことなのだろうか。

「最後はリリースポイント、ボールを放すタイミングで、まあこれが一番難しいんだが、普通は練習を重ねて一定させる、あいつはキャッチに関しては何も覚えはないんだが、それ以外は、なんて言うか、鳥頭なんだよ、すぐ忘れるの、リリースポイントなんて、気が向いたらボールを離すみたいなの、投げる度に違つてたな、腕のバックスイング中にボールを離すなんてアホなことしたこともあるな、だから真後ろにボールが飛んでいく。で、この三つが組み合わされば、脅威のノーコン怪人の出来上がりってわけだ」

……キャッチに集中し過ぎて正しい投げ方を覚えなかったのがノーコンの原因だったのか。

「…それを、あなたが矯正したおかげで正しく投げられるようになったのですか」

「まあな、と言つても基本を反復練習させただけだけどな、まともに教わったことがなくて自己流だったし、何よりアイツはバカだ、全部間違ふ程なんだから間違ひねえ、

全く、小学生から野球やってる奴に基礎から教えたのは初めてだよ」

そこで一旦言葉を止め、監督はモン太を見ながら、「でもな……」と続けた。

「アイツは努力家で、真面目で、一途で、キャッチに関してだけは天才

だ、俺はアイツのファンでもある」

モン太は元気にチームメイトと声を掛け合っている。楽しそうだ、目がキラキラしている。

「…そうですか、お話してくれてありがとうございます」

僕は礼を言っつて監督から離れ、ランニングを再開した。

僕に出来ることはなかった。

アメフトに誘うという選択肢は完全に僕の中からなくなっていた。もし彼が泥門かどこかの高校で野球で三軍に落ちて燻っていたら、アメフトに誘ってみようかと思つたことはあつた。

でも、それはもうない。

なぜなら

彼は今、夢の中にいる。

子供の頃から夢見ていた世界へ向けて挑戦している。

モン太とまた一緒にアメフトが出来れば楽しいだろう、それはとても幸せだろう。

だけど、それは出来ない、もう出来ない、決して。

ここで話しかければ知り合いになれるだろう、続ければ彼は人見知りしないので友達になれるだろう、

でも、それもしない、無理に知り合おうとはしない。

彼は彼の道を行つていく。

僕は僕の道に行く。

縁があればまた会えるだろう。

僕は、最後にもう一度振り返り、グラウンドを駆け回るモン太を見てこう言つた。

「がんばれ、モン太」

16th down 神龍寺ナーガ 其の壱

春の関東大会の一回戦、王城ホワイトナイツの対戦相手は神龍寺ナーガ。

まだ一度も勝ったことのない強敵、王城にとっての大一番。

試合が始まるまで後少し、試合会場の観客席はほぼ満員に埋まり、会場の周りには露店が多く立ち並んで、雰囲気は祭りの前のような熱気に覆われていた。

東京大会とは桁外れの客の多さ、客の種類も多く、にわかファンやスカウトの数も今までよりもずっと多い。もともと、その中で最大の勢力が桜庭春人ファンクラブの面々であることには変わりはないが。テレビ中継も今までの録画放送ではなく、生中継のようで、カメラや機材の数が違う。

マスコミの取材陣も、他の試合よりここが一番多かった。

百年に一人の天才「金剛阿含」を擁する大会無敗の神龍寺ナーガに、高校最強のラインバッカー「進清十郎」と、

史上最高のランニングバック「小早川セナ」のいる王城ホワイトナイツの対戦は、

どこよりも注目されていた。

まだ試合には時間があり、それぞれのベンチが荷物整理をしている時、

王城サイドのベンチに、金剛阿含がフラフラとやってきた。

どうやら姉崎まもりをナンパしにきたようだった。

両チームの選手はまだバスか控え室でベンチにはいない。

「あれ、どうしたの神龍寺の人？」

対応したのは、応援の準備でたまたま近くにいた鈴音だった。

「あゝ〜」

ジロリと鈴音を見、女だと判るや、瞬時に自分の好みに合うか査定を始める阿含。

(…ガキ…じゃねえな、チアのユニ着てるから高校生か…この体型で

高校生：迷子の子供かと思っただぜ。

：カオは悪くねえ、いや寧ろ整ってていい方だが、チビすぎて俺の守備範囲外だな、だから…)

「失せろ」

一瞬で判断し、一言で結論した阿含。相手チームのベンチで言うセリフではない。

「ねえ、どうしてそんなニョロニョロした髪してるの?」

だが、鈴音は全く頓着無く阿含に聞いた。彼女には見た目が不良な阿含に対する恐れとかいう感情はこれっぽっちもなかった。

「……………」

相手をする気もなかったので、阿含は無視してまもりを探していた。

しかし、鈴音に回り込まれた。

「ねえねえ、どうして?」

阿含は鈴音の周りにはいないタイプだったのか、興味があるのか珍獣でも見つけたかのように目をキラキラさせて詰め寄る鈴音。

「…これはドレッドヘアーっていう立派なファッションなんだよ、わかったらどっかへ行け」

子供に懐かれたことがないのであしらい方がわからないし、流石に殴るといつもの選択肢も子供には使えない、そもそもここは人目が多い、よって仕方なく普通に答える阿含だった。

心底嫌そうな顔で手をシツシツと振って追い払おうとする阿含。

「ふ〜ん」

興味深げに阿含の周りをグルグル回りながらジロジロ見回す鈴音。

「ねえねえ、ちよつと引つ張ってもいい?」

「あ?」

「いや、なんかバネみたいにビヨ〜ンって伸びるかな〜って」

「……………」

ここまで来ると怒りを通り越して呆れてしまう阿含だった。

(男なら100%殴ってるな、いや、ヤローならこの俺にこんなこと絶対言わねえ、なんだコイツ)

珍獣でも見るような目でマジマジと鈴音を見る阿含。

数瞬の間、二人は見つめ合っていたが、それを破ったのはまもりだった。

「どうしたの、鈴音ちゃん、あれ…そこにいるのは、金剛…阿含君？」
トレイに乗せたスポーツドリンクの束を持って来たまもりが、二人に気付いて声をかけた。

まもりの声を聞いた阿含は瞬時に反応した。

（来た！姉崎まもり、おおっ、近くで見るとマジ美人じゃねえか、流石アメリカ人とのクォーター、スタイルもいい、俺が今まで付き合ってきたどの女よりいい女じゃねえの？こいつは絶対落としてやる…つて、この女、俺のこと知ってたな、名前呼んでいたし、俺が有名だからじゃなく、雲水から聞いていたな、ならばちよつとマズイかもしれんな、俺の武勇伝を雲水から聞いていたのだとすれば、雲水からの情報によればコイツは真面目な性格、俺の第一印象は最悪となってしまう。そこから挽回するのはかなり骨だ…とりあえず、現状を確認しねえとな）

「えくと、君は？」

しらばつられて名前を聞く阿含、まもりが声をかけてから、このセリフまで1秒足らず、阿含の思考と反応は、神速のインパルスの名に恥じないものだった。

「王城ホワイトナイツのマネージャーをしている、姉崎といいます、金剛さんのことは雲水君からいつも聞いていました」

礼儀正しく答えてペコリと軽く礼をするまもり。

「そうなんだ、よろしくね、姉崎さん、俺のことは名前で呼んでくれよ、金剛じゃ雲水と被ってしまうしね、ところで、雲水から俺のことをどんな風に聞いてたの？興味あるな、教えてくれないかな」

ナンパ専用のサワヤカ笑顔で話している阿含だが、内容によってはナンパはぶち壊しになるので内心ヒヤヒヤしていた。

「えつとですね…」

まもりは、雲水から聞いた情報以外にも、マネージャーとして集めた情報から、阿含の口クでもない本性を知ってはいたが、それを初対

面の相手に言うのは憚られたので適当に濁した。

「天才の弟だと…」

「はっはっは、雲水の奴、照れるなあ天才だなんて」

と、照れたフリをして頭を掻いている阿含だが、

(でかしたぞ雲水イ！)

と、内心ではガッツポーズをしていた。

「それで、王城側のベンチに何か御用ですか？」

「ああ…ちよつと雲水と話をしにね…」

そんな阿含とまもりの会話をさりげなく近くから見ている選手がいた。

細川一休だった。

王城のビデオに映っていた彼女を見て、彼はまもりに一目惚れしており、わざわざ見に来たのだった。

(うっわ、近くで見たらやっぱ鬼カワイイ)

まもりに見蕩れる一休に、神龍寺側のベンチ方向から彼を呼ぶ声でした。

「おっい一休」

「一休」

「一休！」

呼んだのはチームメイトの、八淨、斉天、河籐の三人だった。

それぞれのあだ名がハツカイ、ゴクウ、サゴジョーという、これにサンゾーというあだ名を持つ釜田を加えて彼ら四人は西遊記カルテットと呼ばれていた。

それを見て一休、

「はっい、慌てない慌てない」

と言つて、肩に担いだ荷物を背負い直し、

「今行きますよ」

と言った。

「いや、そこは「ひとやすみ、ひとやすみ」だろおっ！」

直後、三人にツッコまれた。

「えっ！ な…何が？」

驚く一休に、三人はやれやれと肩をすくめ、わざとらしく呆れて見せた。

「ふう〜、一休さんは空気読まないなあ」

「俺達なんかと絡んでられないってな」

「やっぱ天才さんはちがうなあ」

三人は明らかに一休をからかっているのだが、

「な、何言ってるんすか三人とも」

一休は弄られ体質でもあるのか、気付かずに慌てていた。

このような、普段は気のいい一面がある一休だが、アメフトに関しては全く違った。

一休は王城の偵察には一度も来なかった。

他の高校への偵察に行っていた為だ。

監督に頼めば王城へ行くことも出来たが、

彼のマッチアップの相手が桜庭と聞いていたので、興味がなかったのだ。

桜庭のこれまでのプレーは、一休にとってなんら注目にならなかったのだ。

一度、一休は桜庭のプレーをビデオで見ている。その時に言ったのは。

「なんだ、こんなもんか」

と言い、それ以降、一休から桜庭の話は一度も出ていない。

そうこうしている間に、監督や選手が入ってきて、阿含のナンパは失敗に終わる。

ベンチにやってきた石丸は、いつものセリフを言っていた。

「試合前のこの感じはいいよな、なんだかこう、血が冷たくなるっていうか・・・」

実は初戦の恋ヶ浜戦から全試合で言うという快挙だったが、そんなこと誰も気付いていなかった。

「金剛阿含がいるな」

両選手がそれぞれのベンチに集まった際、高見さんが気付いて言った。

「そうなのだ、阿含さんが試合の最初からいるのは予選では一度もなかったらしい。」

「試合の最初から出場するのはそれだけ気合が入っているからなのだろうか。」

「あ、あのニヨロニヨロヘヤーね、みんなが来る前からウロチョロしてたよ」

と、怖いもの知らずな発言をしたのは鈴音だった。

「瀧、本人の前でそんなこと言うなよ、その…:によるんよとか」

と、危険な発言を控えるよう諭したのは雲水だったが、

「もう言っちゃった」とあっさりのたまう鈴音にため息を吐いた、全員。

「阿含さんか…:」

セナは阿含を見て思う。

セナが泥門時代に神龍寺ナーガと対戦した時、阿含に一度勝っている。叩きのめされた方が多いので一度しか勝っていないというべきか。1試合のうちのたった1プレーの話だ。進の時と同様だ。

(…:僕は挑戦者なんだ)

そう思ったセナは、心の中で少し笑った。

王城のエースとして自覚を持ってプレーし、最強のランナーの称号であるアイシールドをつけているのに、自分は挑戦者なんだという思いも持っている、そんなちよつと矛盾した自分の心が楽しくてセナは笑った。

試合開始直前、フィールドに入った選手は円陣を組み、大田原さんが声を掛ける。

「騎士の誇りにかけて勝利を誓う、

そう我々は敵と戦いに来たのではない、

倒しに来たんだ！」

全員が握った拳を突き出し、ガチガチと合わせあう。

「Glorv On The Kingdom!
王国に栄光あれ!」

一方、神龍寺側でも円陣が組まれていた。

声を掛けているのはヒル魔。

「俺らは敵を倒しに来たんじゃねえ、殺しに来たんだ!」

全員が腰を低く落とし、腹の底から響くように叫んだ。

「ぶっ殺す! Yeah!」

それを聞いたセナは、泥門時代にいつも自分もしていた掛け声に懐かしさを感じていた。

(やっぱりヒル魔さんだなあ、神龍寺にいても変わらないや)

そう思っていると、隣にいる猫山君が誰にもと無く呟いた。

「神龍寺って書いて字の通り「寺」だよな、ならその生徒は寺の坊主ってわけになるよね、

お寺の関係者が「ぶっ殺す」って…シヤレにならないよなあ」

(まあ、そう言われればそうだけど、ヒル魔さんならそんなのお構いなしだろうし、

…ヒル魔さんらしいや)

試合が始まる。

17th down 神龍寺ナーガ 其の式

コイントスの結果、選択権は神龍寺が取った。

そして、ヒル魔が選んだのは、後攻だった。

(ヒル魔なら攻撃を選択するとはかり思っていたが…何を考えている?)

怪訝に思い、ヒル魔を見る高見だが、ヒル魔はいつものように笑っているだけで全く意図が掴めなかった。

キックオフで王城の攻撃が始まった。

神龍寺はキックはセナのいない石丸の方へ蹴った、

セナに走られればどこまで持っていていかれるかわからないので、どのチームもする当然の策だった。

ボールをキヤッチした石丸は、そのまま走ってほぼ中央までリターンした。

王城の最初の攻撃時、観客が大きくざわめく。

いきなり守備に金剛阿含が登場し、更に阿含が明らかにセナのマークにつこうとしていたからだ。

100年に一人の天才と、史上最高のランニングバックの対決といういきなりの展開に観客は盛り上がった。

しかし、明らかに自分に向かってこようとしている阿含を見て、セナは違和感のようなものを感じていた。

(…なんだか、阿含さん……気が抜けてないかな?)

自分を見て見下したようにニヤリと笑ったかと思うと、次に王城のベンチを見てクククと笑う。

どうみても集中していない。

(つまり僕は…舐められているんだな)

今までならそれでもよかった、自分個人に言われているなら気にしなかった。でも今は違う。進さんに王城のエースだと言われ、自ら最強の選手である証のアイシールドをつけて試合に臨んでいる、舐めら

れるのだけは許してはならない、誰であろうとも。

セナは深く、静かに集中を増していった。

実際の所、セナの思いは正しかった。

阿含はセナのプレーはビデオで少し見ただけでセナの実力を決め付け、見下してダレていた。

(確かにスピードはある、あるが、それだけだ、パワーが無さ過ぎて相手にならねえな。)

俺の神速のインパルスで反応すれば捕らえるのは容易い。

俺の反応速度が人類のほぼ限界である以上、それより早く動けるわけがねえので懸念材料など全く無い、

後はどう派手に倒して姉崎のナンパに繋げるかだ、何もさせずカットよく派手にブチのめして強さをアピールするか？

いや、このカスチビは足だけは速いので有名らしい、ならば、わざと泳がしてそこを俺が捕らえることによって俺の才能をアピールするか…)

阿含は試合が始まっているのにそんなことを考えていた。

そんな阿含の様子を王城側から見ていた雲水は、阿含の油断にチャンスとは思ったが、それ以上に不気味さを感じていた。

(阿含は例え試合終盤からしか出なくても、出るときは集中していた、あいつの集中力は常人よりも遥かに高い、今は確かに小早川を軽んじて珍しくダレている、と言うより、あいつの視線から判断するに、姉崎へのナンパ方法に集中しているといったところか、これはチャンスだ…だがしかし、それに気付かないヒル魔ではないだろうに、何故阿含に何も言わない、これまでだって、試合までに小早川のプレーをちゃんと見せていれば頭のいい阿含は彼の才能と危険性に気づき、ここでダレるようなことはしなかったはずだ、そして今も、ヒル魔は阿含に一声掛けるくらいしてもいいだろうに、俺から見るに、アメフトに關してだけは阿含はヒル魔を信用している、言い方によってはちゃんと聞くはずだ。

にも関わらず、阿含を放置している。

ヒル魔も小早川を舐めている？

いや、ヒル魔に限ってそれはない、断言できる。

ならば、ヒル魔にとつて、この状態が望み通りの状態なのだということになる。

……わからない、自分のチームを不利にすることがか？

阿含に小早川との勝負で負けさせることがか？

……！……負けさせる……だと

雲水がそんなことを考えている間に、両チームがポジションについてた。

「おつと、始まつちまつたか、それじゃあ…プチつとチビカスを潰しちまおうかね」

驚くべきことに、阿含はプレーが始まる瞬間に思考を試合に切り替え、深く集中し、それを完了させた。

即時反応し、正しい行動に移れるのは瞬時の状況認識の高さを現している。

神速のインパルスという呼び名は伊達ではないということがこの一連の行動からでもわかった。

ポジションにつきつつ、阿含はセナに声をかける。

「おい、そのチビカス、この俺が直々にマークしてやるんだ、喜べ、そして死ね、クアハハハ」

ニヤニヤ笑いながら超上から目線でのたまう阿含。だがその様子に、さつきまでのダレた様子は微塵も無い。

阿含がセナにかけた言葉は、まもりにも聞こえていた。

セナをチビカス呼ばわりされ、まもりの目がスツと細められる。怒っているようだった。

セナとまもりが幼馴染であることを知らない阿含は、セナをチビカス呼ばわりしたことでまもりを怒らせ、ナンパ成功フラグを自らへシ折っていたことに気付いていなかった。

もつとも、結果的に阿含はそのことに気付くことはなかった。何故なら、試合後にまもりに声をかけようと思っていた阿含だったが、試合後にはそんな余裕は欠片も残っていなかったからだ。

この試合以降の金剛阿含の目には、心には、小早川セナしか見えて

いなかった。

阿含の潰し宣言を聞いた細川一休は密かに息を吐いた。

「阿含さんはやるって言ったらやるからな、あのアイシールド、死んだな」

「HAT!」

高見のコールで王城の攻撃が開始された。

セナがボールを受け取ってサイドを回って走る。

素晴らしいスピードで走るセナだが、走る先には当然のように阿含が回りこんでいた。

それを見てもセナは阿含を避けず、真正面から向かって行く。

事実上の一対一の勝負になった。

最初の1プレー目で両チームのエース同士の激突に観客が固唾を飲む、

プレー中の選手でさえも一瞬二人の対決に見入ってしまった。

「行くよ、阿含さん」

セナは深く集中したまま阿含に向かっていった。

ザザザッとセナの身体がブレるように揺れる、

細かいステップで身体が分身したように見えるほどの速さだった。

クロスオーバーステップでセナが阿含の脇を一瞬ですり抜ける。

「出たアアア、阿含相手にいきなりナイトオブミラージュ蜃気楼の騎士　だ、小早川の勝ちだ…あ?」

王城の選手の誰かが叫んだが、その言葉が言い終わる前に、阿含はセナの前に立ち塞がっていた。

神速のインパルス。人類の限界とも言われる超反応だった。

「テメー、この前見た時より速くなってやがんな」
「……」

セナは周りの驚愕をよそに、阿含の反応をむしろ予測通りと言わんばかりに続けて行動に入っていた。

阿含を軸として自分の身体をスピンさせて、まるで阿含の身体の表面を横に転がるように抜き去った。

「こ、今度はホワイトトルネードだ、これで決まっ…ああ」
しかし、さつきと同じだった。

セナがその超スピードで抜いたと思った次の瞬間には阿含は超反応で回りこんでいる。

「ま、だからといって、100の力に対して10の力が15になったつう…」

余裕綽々に阿含が言い放つ、セナの力など取るに足らないと。

しかし、そのセリフは途中で止まってしまった。

何故なら。

セナが手を伸ばして攻撃してきたからだ。

「この俺を…攻撃」

絶句して一瞬動きが止まってしまいが、そこは超反応で対応し、セナの手を手刀で叩き落す。

しかし、セナは止まらずに叩き落された手をもう一度手を伸ばして阿含を攻撃する。

「この…非力なチビがあー!」

二度目は虚を突かれなかった阿含は、さつきより遥かに強い力で手刀を振り下ろした。

まともに食らえば腕ごと地面に叩きつけられる程の力が入っていた。

しかし、この手刀は空を切る。

二度目のセナの攻撃はフェイントで、阿含の手刀をスピンドでかわし、横をすり抜けた。

が、阿含はそれにすら反応する。

阿含はスピードだけでパワーのない「ただの」チビに攻撃されたという怒りに任せて放った手刀をかわされ、一瞬、虚を衝かれたが、

それから反応し、セナを追いかけ、追いついた。観客から見れば、セナと阿含は同時に動いたように見えた。

それほど阿含の反射速度は速かった。

努力でどうこうできる世界ではない、神に愛された、天賦の才能。いくらスピードがあっても、見てから超反応できる金剛阿含を抜く

ことなど出来ない、と誰もが思うような動きだった。

だがしかし、セナはそれを「知っていた」。

ガッ

セナの手は、視線は前を向いたまま、別の生き物のように、来ることが判っていたかののように、横に並んだ阿含の後頭部を押しえた。

「阿含の死角から腕で押しえた!」

「いくら神速のインパルスでも、見えなきゃ何も…できない!」

完全に体勢を崩された阿含は、もうどう反応してもどうしようもなかった。

「がああああ…このカスが…俺を…この…」

セナはそのまま、腕を振り切って阿含を地面に叩きつけ、完全に抜き去った。

阿含のフォローになど、誰も入っているわけもなく、セナはそのまま一直線に走りきった。

「タツチダアーウン!」

審判が両手を挙げて宣言する。

「……………」

一瞬だけ静まり返った観客が、審判のコールに我に返ったように爆発的に歓声上がる。

「すげ〜、小早川セナ、あの金剛阿含に勝ちましたぜ!」

「…阿含くんが負けるとこなんて初めて見た」

「阿含って100年に一人の天才って呼ばれてたんだろ？」

じゃあその阿含に勝った小早川セナって…どうなんの、千年に一人の天才?」

「阿含は百年に一人ってわけじゃなかったんだろ、進だって天才だって言われてんじゃないん、セナもそうだから、阿含を入れて三人で、100年を3で割って…33年4ヶ月に一人の天才ってことだったんじゃないねえの」

「速すぎてわけわからなかったけど、とにかくすげ〜!」

チームメイトに祝福される中、セナは泥門時代にヒル魔が言ってい

たことを思い出ししていた。

「同じコマ22枚なんてチームほど、ぶっ殺しやすいカモもねえわなあ」

「同じ奴は同じ状況で同じ行動を繰り返してくっからだ」
今のプレーも、最初は意識して狙ったわけではなかった。

以前と同じ状況に陥ったので、同じ行動を繰り返してしまったのだ。

セナと、阿含が二人とも。

もつとも、セナの場合は途中からは「憶えていた」分、一瞬速く動けたので差が出たのだった。

「…阿含……金剛阿含」

目を見開いたまま呆然とする阿含。誰もが恐れて声をかけられなかった彼に、ヒル魔は静かに語りかけた。

「認めろ、阿含」

「あ？何をだ」

返事はするが、阿含は微動だにせず、ヒル魔に目もくれない。

「わかってるだろ、あいつは、小早川セナは、お前の隣にいるぞ」

ヒル魔の声に、ギョロつと目を剥き身体ごとヒル魔に向く阿含。

「…！」

「小早川セナは、お前のいる天才達の世界へ一歩足をねじ込んできた…どころじゃねえ、とつくの昔に、お前の隣にいやがるのさ、そして今、半歩前を行った」

「…！」

ヒル魔の言葉を聞いた後、血走った目でしばらく無言でいた阿含だったが、ようやく口を開いた。

「…ヒル魔」

「なんだ」

「次…ダイレクトスナップで俺によこせ、小早川セナを…ぶっ殺してやる」

「ケケケ、そーかいそーかい、ま、せーぜー頑張りな」

目が据わって人を殺しそうな阿含の様子に、軽い調子で明るく返すヒル魔。

王城サイドでは、ヒル魔と阿含の会話は聞こえなかったが、笑うヒル魔に高見はいぶかしんでいた。

雲水が懸念していたように、負ける事すらヒル魔の計算ではないのだろうか。

実の所、ヒル魔もかなり驚いていた。

阿含を中学の頃から知っているヒル魔は、阿含の自信が過剰でも不遜でもない、本物の天才であることを理解していた。だからこそ、まさかあの阿含に真正面から勝負して勝つとは実は思っていなかったのである。

(確かに俺の分析では小早川セナは阿含より少し上とみた、だが少しの差だからこそ阿含の目を覚まさせるにはちょうどいいと思っただんだがな、元々阿含は予習も練習も全くといっていいほどしねえ、言っても聞きやあしねえ奴にいくら話しても実感が伴わねえ、小早川：セナの才能を直接体験できるんなら一プレーくれえ安いもんだと思っただけにして阿含を放置してたんだがな、阿含の完敗は予想外だったぜ、本当にたいした奴だ、あのヤロウは、だが驚いてなんかやらねえ、高見がこつち見てやがる、笑えオレ、計算どおりって力才をしろ)

確かに、身体能力のみで見れば、ヒル魔の分析通り、セナと阿含はかなり競っていただろう。

しかし、流石のヒル魔も、セナの前世ともいうべき「泥門時代の記憶」など考え付くわけもなく、

その差が大きな結果の違いとなっていた。

かくして、王城ホワイトナイツがタッチダウンで先制点を取った。しかしトライフォーポイントでタッチダウンを狙ったが失敗し、点差は6点差のまま。

神龍寺ナーガに攻撃権が移る。

18th down 神龍寺ナーガ 其の参

神龍寺ナーガの攻撃。

まだ前半始まったばかりで王城ホワイトナイツが6-0でリードしている。

神龍寺にとって、大会を通じて初めて先取点を許した。

そもそも、タツチダウンで点を取られたこともなかったのである。

これまでの相手とは違う。

と、神龍寺の選手や、神龍寺の試合を応援に来ていた観客は思ったが、ヒル魔は逆に安堵していた。

あまり点を取られなさ過ぎると、逆に取られた時の選手の動揺が大きい。

負けてもいないのに、試合は終わってもいないのに、相手の力を高く評価することなどバカらしいことだ。

100点取られても101点取れば勝ちなのだ。

この先の、対帝黒戦の為にも、この程度の逆境は寧ろ望むところだった。

だからまだ、ヒル魔は切り札を全く切らず、阿含に好きなようにさせた。

阿含のマークに守備にも出ているセナを見て、ヒル魔は思う。

(…小早川セナ、確かにお前はスゲエ奴だよ、だがな、阿含も紛れもなく天才なんだよ、本当に本気になった金剛阿含を相手に…見せてみる、セナ、お前の実力を、お前の限界を)

「HAT」

ヒル魔のコールで神龍寺の攻撃が開始される、ボールはヒル魔から阿含に手渡された。

「あゝあゝ ああああ!!」

凄まじい咆哮と共に放たれた手刀でディフェンスを吹き飛ばし、正面にいるセナに向かって一直線に向かっていく阿含。阿含の気迫を一言で表すのならば、それは「殺意」と呼ぶのが一番相応しいだろう。

「テメーみてえなチビカスがこの俺の半歩前にいるだど？この世界はな、テメーのようなスピードだけのハンパな奴がいていい所じゃあねえんだよ！」

手刀を振る阿含、縦の唐竹割りだとかわされる可能性があるのを考慮したのか、横に薙ぐように水平に手刀を繰り出す。

例え腕でガードしても腕ごと吹き飛ばせるだけの力が籠っていた。

ガツ…と激突音がし、阿含の手刀をセナは腕でブロックした。

が、体格差による力の差はどうしようもなく、真横に吹き飛ばされるセナ。

「…真横？…後ろじゃなく」

飛ばされる方向の違和感に最初に気付いたのは、全試合をビデオ撮影していた姉崎まもりだった。

進との勝負以降から、セナが相手の力の流れを見切つて受け流す技術を身につけていることを知っていたまもりは、すぐにセナの真意にも気付いた。

「…セナ…自分から跳んだのね」

しかし、金剛阿含は気付かなかった。

いや、手刀に思ったより衝撃が少なかったことや、吹き飛んだ方向がおかしいことは、いくらセナに対する復讐に我を忘れていても、そこは天才金剛阿含、数瞬後には気付いただろう。

だが、その数瞬という僅かな間が彼には与えられなかった。

「へっ、オメーみたいな非力じゃ、俺を精々一瞬しか止めれねーよ」

勝ち誇る阿含、しかしそれは油断だった。

「十分だ、一瞬でな」

と、阿含の目の前で言ったのは、進清十郎だった。

「なっ」

驚愕する阿含だが、進はもうどうしようもない距離まで来ていた。更に既に攻撃体勢に入っている。

次の瞬間、弓の様に引き絞った右腕を繰り出した。

隙だらけの阿含の胴体に、進の渾身の力を込めたトライデントタックルが炸裂した。

「ぐああああ!!」

真正面からまともに食らい、水平に吹き飛んでいく阿含。数メートルは空中を滑空し、地面に叩きつけられて更に数メートルをゴロゴロと転がってようやく止まる。

ボールは最初のタツクルの衝撃で阿含の手を離れている。

空中に浮いたボールをすかさずキャッチしたのは、セナだった。

インターセプトしたボールを持ってそのまま走りだす。

攻撃開始直後だった神龍寺にディフェンスをしろと言う方が無茶であり、セナはあつさりとタッチダウンをした。

12―0となった。

「今のところはウチが圧倒してるな、あの神龍寺ナーガに何もさせていないんだから」

高見が言う。

だが、雲水は眉をひそめた。

「ああ、だが……」

と、懐疑的に何か言いかけた雲水を手で制して高見は続けた。

「わかってる、神龍寺は何も仕掛けてきていないんだ、ウチがさせてないだけだと楽観視はしてないさ」

冷静さを失っていない高見に満足そうに頷く雲水。

「それにしても、小早川と進のダブルチームで阿含のマークにつく作戦は上手くいったな」

「ああ、だがいきすぎたと言ったところか、阿含の奴はかなり本気のようにだったがな、これで頭に血が上って冷静さを欠いてくれればいいんだが、阿含はそんな脆い奴じゃあない、これからの阿含は怖いぞ」

そう言っつて雲水は神龍寺サイドにいる阿含を見ると……

阿含は静かに佇んでいた。

さっきまでの激昂は嘘のように止み、冷たい目と静かな殺気でセナを睨んでいる。

それを見て雲水は確信した。

(…阿含は、ようやく認めたんだ…小早川が、自分と同じ場所にいる天

才だと：)

その後のキックが決まって13―0となる。

その後の神龍寺の攻撃は、神龍寺の選手が阿含の完敗で動揺したのか、阿含から放たれる殺気にビビったのか、あつさりと攻撃に失敗し続け、4回目の攻撃で武蔵がキックでなんとか王城サイドまでボールを戻すのが精一杯だった。

王城に攻撃権が移る。

次の王城の攻撃も、セナと阿含の攻防は続いた。

阿含が手刀を繰り出す、速く、鋭く、正確で、体重の乗った力の籠った一撃。

普通の選手ならば、食らえば怪我をして退場することになるであろう強力な攻撃。

それに対してセナは、先ほどのように横っ飛びで弾くようにかわすことができた。

阿含がいくら神速のインパルスを持つ天才でも、すぐにスピードが上がるわけではない。

真横にかわし、そのまま斜め前へ進もうとするが、少し前へ進んだところへ、阿含はすぐに超反応で追いつき、再び手刀、セナ、それを弾き、真横に跳躍、前へ進むとすぐに阿含に回り込まれる。

これの繰り返しで最後にはセナはサイドラインに押し出されてしまった。

しかし、少しずつだが前へ進み、そんな攻撃が4回も続くと：

「ファーストダウン！」

審判による計測の結果、10ヤード進んでいた。

ここまで王城ホワイトナイトは、神龍寺ナーガに何もさせず、得点を重ね、今も着実に進んでいる。

まだ前半始まったばかりとはいえ、圧倒的な展開に声も出ない神龍寺側の応援客。

そして、細川一休も、声が出ないくらい驚いていた。

(…いたのか……阿含さんと互角に戦える奴が、あの小早川セナっていうアイシールド、鬼スゲエ)

そしてセナも、自分自身に少し驚いていた。

(この試合の最初に勝てたのは、僕の泥門時代の記憶があったればこそだけれども、今のファーストダウンは違う、今の僕が阿含さん相手にファーストダウンを取れたんだ…前は一回勝っただけで後は阿含さんの手刀にもんどりうって倒されていただけだったのに、今の僕は違う、戦える、戦えるんだ、あの阿含さんと)

セナは、進と戦った時以来の成長の実感を得、嬉しかった、心が震えるのがわかった。

ここで、神龍寺がタイムアウトを取った。

「このままじゃジリ貧だな、どうするつもりだ、ヒル魔」

武蔵がそうヒル魔に話しかけた。

状況は武蔵の言う通りよくないが、ヒル魔はこれっぽっちも焦っていないかった。

「阿含はこれくらいで心が折れて大人しくなる奴じゃねえ、だからといって口で言っても聞きはしねえ、だから、さらに突っ込ませた、結果として、あのセナの奴が予想以上にすげえ奴だったので阿含は負けちまったが、まあ、想定範囲内ってとこだな」

「負けを知らない天才は挫折しやすいつていうが、大丈夫なんだな、阿含は」

武蔵は言った。本当にそう思っているわけではなく、状況の整理も兼ねての発言だった。

「ケケケ、問題ねえよ、見ろよ阿含のあの顔、楽しそうだろ?」

ヒル魔に言われて阿含を見る武蔵。

「…殺人鬼みたいな顔で小早川を睨んでいるぞ、楽しそうか?」

「ああ、楽しいさ、天才の阿含にとってはな、才能のない一般人を潰すのはただの暇つぶしなのさ、よく言うだろ、敵がいてこそ生き甲斐となり、張りのある人生となるって、今のアイツは倒すべき敵を得た、暇つぶしではなく、戦う理由が出来た、この状態を「充実」してるって

いうんだよ、愉しいさ」

「…苦しいことも、生きることを充実させるスパイスになるってことか…なるほどな…で、阿含はいいんだが、これからどうするんだ、まだ動かんのか？」

そう聞いてくる武蔵に、ヒル魔はニヤリと笑って。

「いや、これ以上離されるのはよくねえ、そろそろ動くかな、攻めるなら黄金世代が抜けて一番弱体しているラインだな……」

神龍寺ナーガの蛭魔妖一が動き出した。

「ヒル魔が攻めてくるとなれば、ラインだろうな、口惜しいが黄金世代の先輩達が抜けて一番力が落ちてている」

高見がヒル魔の作戦を予測して言った。

「そうだな、それに較べて向こうは栗田、山伏と強力な二枚看板で磐石だ、対抗するのは容易ではないぞ」

それに雲水も同意する。

「まあ要するに大崩しなければいいんだ、栗田には当然大田原を当てる、相殺出来ればそれでいい、問題は残った山伏だが、今の王城のラインで彼に対抗できる選手はいない、だから、二人がかりで山伏を止める、これしかないと思う、相手が一人浮くが、数秒持つてくれればいいんだから、なんとかかなるはずだ」

高見はそう判断した。

王城の攻撃、高見のコールでプレイが開始される。

お互いラインの中央にいた大田原と栗田が激突し、動かなくなる、パワーでは栗田が少し上だが、大田原にはスピードがある分、瞬間的には押し合いは互角となっていた。

(よし、ライン持つてる、これなら…)

高見が安堵した次の瞬間、山伏の突撃技「粉碎ヒット」が、大田原に炸裂した。

「え！…山伏が…いや、山伏も大田原マークだと！」

驚愕する高見、驚いている間にも、栗田の相手で一杯一杯だった大

田原は、山伏の攻撃を食らって仰向けに倒されていた。

それを見てヒル魔は笑う。

「大田原は高校アメフト界屈指のラインだ、アイツなら栗田を止められるだろう、ならば後は山伏をなんとかすればラインの崩壊は免れる……と、高見は考えていたはずだ……間違っちゃいねえよ……普通は王城の相手チームは大田原を避ける、奴以外から突破を計る、ある意味、敵味方からそれだけ信頼されている選手だ……」

ヒル魔は一旦言葉を区切ると、はつきりと言いつつ切った。

「だからこそ……大田原を狙う」

高見は何も出来ず、なんとかボールを投げ捨ててパス失敗でこの攻撃は失敗した。

「……二人がかりとはいえ……大田原さんが青天だなんて……」

「これが神龍寺の本気なのか」

「今までは様子見だったってことなの？」

「……ここまで順調な試合運びで押していただけに、この攻撃失敗は、しかも、ラインの要である大田原を抜かれての失敗にチームメイトは動揺を隠せなかった。」

(……嵌った)

ラインの動揺を見て取ったヒル魔はこの時点で勝利を確信した。

ヒル魔は思う。

(アメフトには詰将棋と違って絶対はねえ。だが、そう思わせることができれば勝てる。)

高見は理屈で動いた、あいつの判断は理に叶っている、だがな、守備の柱が負けるというチーム内における動揺を考えていなかった。今まで無敗を誇っていたラインの要が抜かれるというのはメンタルに大きな影響を及ぼす、それはこの試合中に回復するようなもんじゃねえんだよ……いいか高見、カード捌きつてのはな……

「……あの大田原でも抜かれる可能性がある……」

「……って一瞬でも思わせたら勝ちなんだよ……」

神龍寺と王城のラインの選手の力は、栗田、山伏、大田原の三人を別格として除けば実は拮抗している。

だからこそ、ほんの小さな綻びが差を分ける。

一抹の不安は一瞬の迷いとなり、その迷いは踏み出しのコンマ何秒の遅れとなり、その遅れが完璧だった王城のゾーンディフェンスに隙間を作る。

その一瞬の隙間を縫うように攻めることができるのがヒル魔という男だった。

ここから、状況は少しずつ少しずつ神龍寺に傾いていった。

セナと阿含が互いに潰し合っているため、ランはほぼ相殺状態。

ラインは完全に神龍寺が押しているが、雲水と進の連携のフォロワーが効果的に機能し、崩壊には至らずになんとか留まっている。

ここまでなら両チーム点が入らずに膠着していただろう。

しかし、膠着しなかった。大きな差が出た。

桜庭春人と細川一休。

パスにおけるキャッチ勝負。

攻守においてタッチアップしている二人だが、この二人の力の差が、そのまま点に繋がってしまった。

高見の投げるパスは、一休に全て防がれた。

よくて叩き落され、悪いとインターセプトされた。

桜庭春人は、細川一休には全く及ばなかった。

セナに渡してランで攻めようにも、本気の阿含を相手にしている上に、ラインやディフェンスの位置をヒル魔にコントロールされて壁となって進路を塞がれ、一回の攻撃で精々1、2歩ゲインするのが手一杯となっていた。

ファーストダウンを取るためにはパスしかなかったが、ショートパスすら桜庭は一休には勝てないでいた。

そうやってパスをインターセプトされて第一クォーター終了直前にタッチダウンとキックを決められてしまった。

13―7。

第二クォーターに入るも、流れは変わらず、神龍寺にはロングパスを決められてあっさりタッチダウンを取られてしまう。

キックも決まって13―14とあつという間に逆転されてしまっ

た。

高見や雲水、庄司監督も流れを変えようと手を打つが、精々時間稼ぎにしかならず、それ以上の追加点を奪われないようにするのが精一杯だった。

結局、前半は神龍寺が1点リードの13―14のまま終了した。

19th down 神龍寺ナーガ 其の四

神龍寺ナーガのリードで前半が終了した。

両チームの選手が引き上げていく中、桜庭春人の足は重かった。疲労も確かにあるが、それ以上に彼は打ちのめされていた。

（…俺は、何をしているんだ…何も出来ていない、いや、それどころか、これ以上ないくらい足を引っ張っている……せっかく皆が頑張ってるリードしていたのに、俺のせいで逆転されてしまった…高見さんからのパスはまだ一本もキャッチできていない、インターセプトもされた、両面で守備にも出たけど、俺のマークは全て振り切られ、相手のパスを通させている……本当に、何やってるんだ俺は…でも…細川一休…こんな天才相手に、どうしたらいいんだよ…俺…どうしたら…）
「おい、桜庭春人！」
「えっ?」

落ち込んで引きずるような足取りの桜庭に後ろから強い口調で声をかけたのは、桜庭が落ち込む原因となっているその人、細川一休だった。

「え、細川…一休?」

強い口調で声をかけ、こちらを睨みつけてくる一休に、桜庭は驚いた。

さつきまで散々負けていたのは自分の方なのだ、自分は一度も勝っていない。

なのに自分を見る彼の目は明らかに怒っている。

桜庭の動揺など一切無視して一休は続けて言う。

「お前、俺をナメてんのか?」

一休は桜庭に詰め寄り、睨み上げながら言う。

「なめてる…ワケないじゃないか、俺は精一杯…」

怒りを隠さずに睨みつけられ動揺するも、少し自虐的な心情を吐露しようとした桜庭だが、最後まで言い終わる前に一休に遮られた。

「いや、ナメてるね、精一杯?アンタのプレイはビデオで見たよ、見た時はこんなもんかと思ったさ、で、実際に試合で当たってみればよ、

まさか、俺の想定以下だとは思わなかったよ」

「そ、想定以下って言われても…そんなの、俺のせいじゃ…」

一方的ではあるが、言い争う二人に、引き上げかけていた両チームの面々も気付き始めた。

「んだよ、テメエのプレイわよ、鬼入ってねえよ、やる気ねえのかよ！他の事考えてんじやねえよ！」

「え…?!」

ドキリとした。

一休の最後の一言が、桜庭の心に深く突き刺さった。

誰にも言ったことのない深層の思いを見透かされたような気がした。

「他の事考えてんじやねえよ！」

凶星であると自分でわかってしまったが、認めたくなく、桜庭は言い返した。

「他の事なんて、考えてないよ、俺は全力で、なんとか、お前達天才に追いつこうと…」

何とか言い募るが、一休には通じなかった。

「自分自身にも嘘を吐いてんじやねえよ、わからねえとでも思ったのか、だから最初に言ったらう、俺をナメてんじやねえよってな！」

「……………」

一休の迫力に、桜庭はついに何も言えなくなってしまった。「自分が凡人であることを自覚しているくせに、モデルの仕事とアメフトを両立させてやっていけると思ってる事そのものが、アメフトをナメてんだよ、さらにそんなどつちつかずの中途半端で、俺と戦えると思ってること事体、俺をナメてんだよ、いいか……………」

一休は桜庭の目の前に詰め寄り、人差し指を突きつけ、実際に桜庭の鼻に押し当てて捲し立てた。

「どうしたんだ、一休の奴、えらいテンションで桜庭に突っ掛かっているが、いや、突っ掛かるといふより、説教し始めてるぞ」

控え室に戻りかけた所で、後方で一休の声を聞いて戻ってきた武蔵

が少し困惑して言った。

「そうだね、もう説教というより、アドバイスみたいになってるよね」
武蔵と一緒に戻ってきた栗田も同意する。

その二人の後ろにいたヒル魔はそれを聞いて笑った。

「ケケケ、大方、阿含とセナの激しいやり合いにアテられたんだろう。
あの二人はあんなにスゲエ戦いを繰り広げているのに、何で自分の
相手はこんなにショボイんだ…ってな」

そう言っている間にも、一休の説教？は続く。

「いいか、アメフトの神様、いや、仏様はな、なんもかも捧げねえと何
一つ与えてはくれないんだよ、生活の全てをアメフトに捧げて初めて
たった一つのことを成し遂げられるんだよ、そうしないと何も得られ
ない、お前みたいにモデルの仕事しながら女の子にキャーキャー言
われてついでにアメフトするような奴には特にな」

「ヒル魔、止めなくていいのか？一休のアドバイスマイ的な愚痴を聞
いた桜庭が悩みが解決して吹っ切れちゃったら面倒になるぞ」

武蔵が耳をほじりながらそれほど深刻でもなさそうに言う。

「いいさ、ほっとけ、前半の一休はまだまだ本気には程遠い、それに、
無理に話の腰を折ってしまうより、今の一休らしさを損なわない方を
優先する、そっちのほうが、勝つ確率が高けえ」

「…それぞれの人間がソイツらしくいることも確率のうちってか…お
前らしいな」

武蔵はニヒルに少し笑うと、控え室に戻っていった。

武蔵を見送ったヒル魔は、一休が大いにやる気を触発された二人の
様子を見た。見て、驚いた。

金剛阿含が、大きく肩で息をしていたからだ。

腰に手を当てて荒い息を吐きながら歩いている。汗もすごい量だ。
(スタミナ無尽蔵のコイツがここまで息を荒くするのは初めて見る。
前半で走った走行距離だけなら阿含はこれくらいでバテたりしねえ、
相手が今までの凡人じゃない、同格の天才、小早川セナだからだ。ど
んなスポーツでも練習と試合ではスタミナの消費量が段違いだ。そ

れは、緊張と集中のレベルが違うからだ。つまり、スタミナを最も消費する行動は、脳の使うことだからだ：阿含はそれだけ思考して動いてるってことか、単純に超反応しただけではあのセナには対抗出来ねえってことか…)

そして、その阿含をここまでバテさせた相手、小早川セナを見る。「ふ〜〜」

大きく息を吐いていた。汗もかいていた。しかし、阿含に較べるとバテているようには見えなかった。

足取りも全く変わらず、進と打ち合わせしながらスタスタとフィールドを出て行った。

(つまり、この差は才能の差じゃない、日頃積み上げてきた走り込みの差、そして、思考の訓練の差だ：セナの脳は、訓練で鍛えられている、言い換えれば、こんな状況にも慣れてるんだ：その差だ)

阿含の不利を判断したヒル魔だが、彼はニヤリと笑った。

(これで終わるお前じゃねえよな阿含、このまま天才同士でぶつかれば変われるさ、でもな、それだけじゃあモノ足りねえ、変化じゃなく、進化してみせろ)

一方、王城の控え室では後半に向けてのミーティングが始まっていた。

「バリスタは…まだ駄目だな、未完成だ、ただでさえ崩れかけている守備でやっても、ヒル魔にスキをつかれてしまうだけだろう」

雲水が冷静にそう結論した。

「相手はまだ、得意のあのドラゴンフライすら見せていないのに…」
高見が溜息と共に口惜しそうに言う。

「いや、高見、それは違う、見せていないんじゃない、見せられないんだ、出来ないんだよ」

「なんだって…：そうか、金剛阿含と小早川か」

雲水の言葉に驚いた高見だが、すぐにその意図に気付いた。

「そうだ、神龍寺のドラゴンフライは、ヒル魔と阿含の二人のクォーターバックによる連係プレイだ、だが、今その片方のQBの阿含はう

ちの小早川の相手をしていてそんなことをする暇は全くない、出来るわけがないんだよ」

雲水は相変わらず冷静に延々と話す、それを聞いていた高見も落ちてきてきたようだった。周りの部員達は全く気付いていなかったが、ヒル魔にしてやられて逆転されたことで、高見は実は結構落ち込んでいた。

「そうだな、もしドラゴンフライをしようとすれば、小早川はフリーになる、阿含以外の選手で小早川のマークをしようとすれば、3人以上必要になる、そうなれば向こうの陣形は崩れ、こちらのいつもの勝ちパターンに持ち込める。攻撃好きのヒル魔じゃあないが、たとえ100点取られても101点取れば勝ちなのだからな」

「そうだ、問題は、どうやってうちの勝ちパターンに持ち込むかだが……」

「…奇策をしてこないヒル魔がこんなにやっかいだとはな…」

「うくん、王城は黄金世代がいなくなつて弱体化したと思つていたのに、しぶといっすね」

と言つたのは、言いたいことを言つてスッキリして戻つてきた一休だった。

「そりゃあ、弱体化どころか、去年より強くなつてるからな」

ヒル魔が、ノートパソコンに何やら入力しながら画面から目を離さずに答えた。

「あ、そうなんすか、やっぱり」

一休も内心そう思つていたのか、あっさりと納得する。

「ああ、去年の黄金世代は、確かにラインは強力だったが、逆に言えばそこしか強みがなかったんで対抗策が取り易かつたんだよ、同じタイプばかりのチームなんて、カモでしかなかつたな、それに較べりゃあ、今年の王城はラインの粒は小さいが、それぞれのポジションに強力なのが揃つてて、何でもできる、よっぽど強えよ、まあ、その強さも真価を発揮する前にウチが勝っちゃうけどな」

「もう決まりっすか？」

「ケケケ、奇策やギャンブルが大好きなオレが手堅いプレイしかしてこない、まるで詰将棋のように、このままではラチが空かない、思い切ってこつちから仕掛けてみるか、いや、それこそ相手の思う壺かもしれない……って王城が思っているうちはな、まあ、今までのオレの考えやプレイを分析すればそう判断するのが当たり前なんだがな」

そう言いながらもヒル魔は、自分の策を崩すかもしれない人物の姿が頭から離れなかった。

（…小早川セナ、このまま本気の阿含が相手が続ければ、セナ個人の脅威は無視していい、そのはずだ…そのはずなんだが、アイツはこの試合でオレの予想を一度覆している、油断していたとはいえ、一対一で阿含に勝つなんて、オレは考えもしなかった、まあ、皆には予想以上想定内だなんてハツタリかましたが…その後の潰し合いは予想通りだが、その状態が最初から続くと思っていた、たった一度とはいえ、オレの予想外の行動をした、ならば、この試合でもう一度予想を超えるプレーをするかもしれないねえ、だが、今のマジ阿含を相手にどうやって…それこそ想像できねえ…あり得ねえか…考えすぎか…）

そのヒル魔から少し離れた場所では、金剛阿含が栄養補給をしていた。

レモンの蜂蜜漬けやらスポーツドリンクやらを手当たり次第にガツガツ詰め込みながら、

「ゆるさんぞく、ゆるさんぞく、あのカスがく、カスチビがく、ゆるさんぞくく」

と、呪詛のように呟きながら食う姿はあまりに恐ろしく、誰も近づけなかった。

ちなみに、この時点で阿含の頭の中から姉崎まもりをナンパすることなど綺麗に消え去っていた。

ヒル魔の言う通り、今の彼は充実し、愉しんでいるのだろう。
ハーフタイムは終わり、後半が始まる。

20th down 神龍寺ナーガ 其の五

後半に入っても、セナと阿含はほぼ全プレイで激しく遣り合っていた。

そして、ぶつかり合うほどに、阿含はセナの実力の高さを認めざるを得なかった。

(俺の方から安易に先制攻撃するとかわされて進まれてしまう。

ならばと先に仕掛けさせ、その動きを見てから超反応で対応しようとする、最初のプレーのように死角から手が伸びてくる。

このセナは^{チヒカス}どうも、それを計算した上で誘った動きをしているようだ。

つまり、俺の超反応の対応を予想し計算した上での走りだということだ。

ならば、こっちはさらにそれを考慮して上回らなければならぬ。俺が奴の予測を上回った時は、コイツを一步も進ませずに潰せた。

だが、奴が上回った時は、数歩進まれる。だが俺が神速のインパルスで追いついて攻撃し、それをまた…という状態の繰り返し。それが前半だったが、後半に入っては、俺をかわしてもヒル魔のリードブロックで結局は進めずに止められている状態だ。

コイツと戦うには、とんでもない集中力とスタミナが必要だ。

たった1プレーで今までの1試合分のスタミナは消費しているだろう。

集中し、考えて、常に思考を止めず、動き続けなければならぬ…)

「……ククク」

阿含は、知らずに笑っていた。

そして、次の瞬間、笑っていた自分に気づき、愕然とした。

(この俺が…笑っていた、こいつと戦うのが…楽しかったからか…結果的に噛み合っているということか)

金剛阿含は、生まれて初めて、アメフトを、スポーツを純粹に楽しむという行為に触れてそれに気づき…

油断した。

「また一瞬「空いたな」 金剛阿含」

その隙を逃す、進清十郎ではなかった。

「なっー！」

前半の最初のプレーと同じように、阿含がもうどうしようもない距離にまで進は詰めて来ていた。

（くそっ…同じミスをするなんて、俺は馬鹿かよ…もう0.1秒速く気付ければなんとかあったのによ、今のこの疲労状態で食らったら…今度は耐えることも受け身を取ることもできねえ…終わったな…終わるときはこんなにあっけないのかよ…畜生）

諦めが入る阿含に、進は手加減なくトライデントタツクルを放った。

凄まじい激突音があたりに響く。

だがしかし。

それを食らったのは阿含ではなかった。

阿含と進の間に割ってはいる者がいた。

「阿含くんは…ボクが…絶対に護るー！」

阿含をガードしたのは、栗田だった。

「くっ」

栗田に護られた阿含は、一瞬でパスをする相手を見つけて投げた。

パスは綺麗に通る、数ヤード進む。

見事なチームプレイに沸き上がる神龍寺。

「阿含くん、大丈夫？」

栗田が走ってきて阿含を心配する。

「…ふん」

阿含は礼はもちろん、何も言わずに鼻を鳴らすだけだった。しかし。

「ケツ…ラインが壁と言う本来の役割を果たしただけじゃねえかよ」とだけ言った。

「…え、それってどういう…」

戸惑う栗田に、ヒル魔が言った。

「今のを通訳するとだな、お前はちゃんと仕事をしている、よくやつ

たつて言つてんのさ、なあ阿含？」
「うるせえよ」

楽しそうに言うヒル魔に、ぶつきらぼうに目も合わせない阿含だったが、否定もしなかった。

進の一瞬の隙をついたブリッツも防がれ、その後も反撃の糸口が掴めないまま更に神龍寺に追加点を奪われて13―21と点差が広げられて第3クォーターが終わる。

そして最終クォーターである第4Qが始まった早々にタッチダウンが奪われ、13―28になってしまった。

試合も終わりが見えてきた所で、ヒル魔はチラリとセナ以外で自分の予想以上の選手を見た。

それは金剛雲水だった。

進も実力は確かに脅威だったが、予想範囲内だった、人間はそう急激に成長するものではない。

だが雲水の成長は予想外ではなく、予想以上だった。

それは彼が天才ではなく、凡人だったからだった。

凡人にしかできない地道な積み重ねで、彼はヒル魔の予想を上回り、このフィールドに立っていた。

彼のプレイは周りの選手を上手く使い、自分を活かすプレーをしている。

しかも、プレイの合間のハドル（作戦会議）をほとんど行わない。ハンドシグナルでも使っているようだが、それは一朝一夕で可能なものではない。

日頃からの綿密な打ち合わせとコミュニケーションがなければ到底出来ないものだ。

更に雲水はそれをほぼチームメイト全員と行うことが出来る。

ノーハドルによる誰とでも組めるコンビプレイ。

凡人でありながらここまで自分を練り上げた雲水に、ヒル魔は畏敬の念を禁じえなかった。

(…阿含よ、お前の兄ちゃんは凡人だがスゲエ奴だぞ、お前にやあ到底マネ出来ねえ芸当で俺達の前に立ちほだかっている…マジで尊敬するぜ…)

だが、と、ヒル魔は続けて思う。

(もう俺達の勝ちだ)

視線の先には、俯いて荒い呼吸でいるセナがいた。

王城の選手は全員が自分の策に嵌っている。

あの小早川セナにしてもそうだ。

おそらくこの展開に、詰んでいると思っただろう、これは将棋ではないのに。

そう思った次の瞬間、俯いていたセナが弾かれたように顔を上げて自分を見た。

セナは脳内で試合全体を俯瞰視点で見渡して思った。

(…これ、詰んで…る?)

突破口がまるで見えない。

オフエンスもディフェンスも。

ランもパスも。

何をやっても即座に対応されている。

このまま特に何も出来ずに試合が終了してしまうビジョンが明確に見えてしまっている。

庄司監督も、高見さんも、雲水さんも、やれることは全部やっている。

それでも、届かない。

チームメイトの疲労度もかなりのものだ。

自分も限界が近い。

そう考えた時、ふとセナはこう思った。

(でも…これ…これでいいんじゃないか?)
思ってしまった。

一度思うと、思考は止まらなかつた。

この敗北は、更に皆を強くさせる。

泥門時代でも、春大会ではあっさり負け、富士の樹海とかで特訓し、バリスタを完成させ、

秋大会では守備のベストイレブンはほとんどが王城の選手だった。ここでの負けは、次の勝利へのステップとなるのは間違いない。

よく言うだろ、高く飛ぶ前には大きく屈むって。

だから…

だから…

『ここで負けていい、なくって考えてる奴あ泥門にやあいねえだろうなあ！ケケケ』

声が聞こえた。

「えっ!!？」

いつの間にか両手をヒザに当て、俯いて考えてしまっていたセナは、驚いて顔を上げる。

そして、その声の主、ヒル魔を見る。

そこにいるのは、神龍寺ナーガのユニフォームを着たヒル魔妖一。

「…？」

ヒル魔は突然驚いたように自分を見るセナに怪訝な顔をしている。

「…あ…そうか」

そんなヒル魔の顔を見て、ようやくセナは理解した、今聞こえた声の主が。

(僕の中にいる、泥門時代の蛭魔さんだ…うん、そうだ、間違いない、

こんな時、あの人ならこう言う、絶対言う)

セナは、自然と笑みがこぼれていた。

(そうだよ、諦めるなんて、「元」泥門デビルバツツの選手がやることじゃない)

目を閉じると声ははつきりと聞こえる。

『勝ち目が1%でも残っているのに諦める奴に「次」はねえんだよ、

その「次」ってのはな、「今」のことなんだよ、

次なら勝てる？

次ガンバリマス？

じゃあそれを今やれってことだ』

「うん、やろう、今僕に出来ることを、出来る事全てを！」

セナは自分の内から聞こえる声に、力強く答えた。

神龍寺ナーガのヒル魔の策では、この試合はこのまま終わる筈だった。

王城は何もできるわけがなく、何も起こるはずもなく。

しかし。

皮肉なことに、ヒル魔の策を破ったのは蛭魔だった。

(…何をやっても即座に対応されている?)

いや、違う、僕自身が出来る事を全てやっていないんだ、

前提が違ったんだ、阿含さんに対抗してどう動くかではなくて、

僕の全力をただぶつければよかったんだ…

酷いなあ僕は…

手加減しているつもりは全くなかったんだけど、この時点ではまだ早いと勝手に思い込んでいた、もう出し惜しみも後先も考えない…使おう)

「ハットー！」

王城の攻撃、残り時間から考えても、ここで攻撃が失敗に終わればもう勝ち目がない。

セナは、高見からボールを受け取り、サイドから突破を計る。

当然のように阿含が真正面に立ち塞がった。

ここで阿含の攻撃を弾くか避けるかして斜めに少しずつ進むのがこの試合のパターンとなっていた。

しかし、このプレイでのセナの動きは、これまで一度もしなかった動きだった。

それは、セナのプレイを映像で集められる限りでは全てのプレイを見て研究していたヒル魔でさえも一度も見なかったことのない動きだった。

一方、阿含がこのプレイで選択したのは見てから超反応するのではなく、意表を突いての先制攻撃だった。

セナは左右どちらにも動く様子を見せず、阿含の攻撃が成功するよ

うに見えた。

しかし、次の瞬間、この二人を視界に捕らえていた敵味方両方の選手、彼らのプレイを見ていた全ての観客は、夢を見ていたかと思わせるような信じられない事態を目撃する。

激突するかと思われたセナと阿含の二人だったが、

セナが、阿含の体をすり抜けて抜き去ってしまったのだ。

スルリと、まるで身体が透明になったかのように。

「……！」

攻撃に手を伸ばしたままの状態で固まる阿含を尻目に、セナは走っていく。

あっさり和阿含を抜いたセナは無人のフィールドを駆け抜けてタツチダウンした。

19—28。

「…え…何今の？」

呟いた一人の観客の声があたりに聞こえるくらいに静まり返っていた。

二人のプレイが見えていた選手も呆然と動かずにいる。

「普通は真正面からぶつかるとよね？」

「どうしてセナ君は抜けたの？」

「つてゆるーかき、あの二人、一瞬だけど動き止ったように見えなかった？」

「あ、私もそう見えた、まるでさ、時間が止まったみたいなき、二人だけが一瞬だけ」

観客がざわざわと騒ぎ出した。

しかし、観客の中には誰も何が起こったのか理解していなかった。理解出来たのは、選手の中でほんの数人。

間近にいた阿含にヒル魔。

ベンチで見ていた進。

高見や雲水は同じ方向を向いてのプレーであったためによく見えていなかった。理解しきれなかった。

セナの信じられないプレーを目の当たりにしたヒル魔は、呆然としていたが、漸くに我に返った。

(…あり得ねえだろ…無茶苦茶だぜ、目の前で見なきゃあ絶対信じらねえプレーだ…アイツ、本当に人間か?)

ヒル魔は近距離で見えていたのでセナが阿含の身体をすり抜けた技の正体はわかった。

言葉にすればなんのことはない、阿含の腕がセナに触れるその一瞬、その一歩のみ、後ろへバックステップしてかわすというものだった。阿含の腕が伸びきった所で、腕を辿ってすぐ横をすり抜ける。セナが阿含の腕の速度と同じ速さで下がったので、周りにはこの二人が停止したように見えたのだろう。

この一連の動作が瞬時に行われたので、まるで身体をすり抜けたように見えたのだった。

しかし、全力で走っている人間が、たった一歩で後ろへ下がれるものなのか？

止まるだけでも足の裏が地面を滑ってすぐには止まれないし、滑らなければつんのめって転ぶのが普通だ。

それをセナは止まるどころか後ろへ飛んでみせたのだ。常識外の動きである。

(…長期間に渡って鍛えられ続けたセナの脚と、体重の軽いチビだからこそその技か…こりゃあ阿含がいくら天才でもマネんのはむりだな、止まろうとした瞬間に足がオシヤカになるだろうぜ…)

…そもそも、あのプレイの直前まではアイツは諦めかけてたハズだ、いや、諦めていた…なのに、一瞬でメンタルを振り戻しやがった…俯いていたのに俺の顔を急に見た時だ…何があつた…アイツの中で…?)

「……小早川セナ…オマエは一体……何処に辿り着いてんだ?」

ヒル魔の口から出たのはこれだけだった。

キックが決まって、20—28。

21st down 神龍寺ナーガ 其の六

「痛っ！…かなり脚に無理がきてるな、もうあんまりもちそうにないかな…でも、まだいける！」

脚をアイシングしながらも気力十分のセナは走ってフィールドに戻った。

神龍寺の攻撃。

「すごい…」

栗田にはセナがブレたようにしか見えなかった。

「人ってあんな動きも出来るんだ…」

彼は純粹に感動していた。

「でももう、ウチの攻撃でタイムアップになりそうすね、まあもし王城に攻撃権が移ってアイシールドにタッチダウンを取られてもキツクの1点を足しても27点、1点差でウチの勝ちツスね、残り時間は全てハドルで使い切れるし、99%ウチの勝ちっすよ」

一休が少し楽観視して言う。

それに対し、ヒル魔が即言い返した。

「1%…負けるんだぞ」

顔つきが変わる一休。

「すいません、ヒル魔さん、ゆるんでました」

「で、キックではなくタッチダウンで同点を狙ってくるかもしれんが…問題ないな」

あつさり話を戻す武蔵に山伏が落ち着いた口調で答えた。

「ああ、それに対する練習だけは、死ぬほどやっとするからな」

一方阿含、真正面から抜かれるなど生まれて初めての屈辱に頭が沸騰しそうなほど熱くなっていたが、それでも思考は続けていた。ここでの思考放棄は敗北でしかないとわかっていたからだ。

（くそ、あのカスチビめ…バケモノチビめ…あんな動き出来るかよ、い

や、やる必要はねえんだ、止まればいい、下手に突っ込んだら下がって相殺されて抜かれる…ならば…アイツが下がった瞬間にこっちは止まる、その場で堪えるだけならばいけるはずだ、そうすればアイツが下がった分距離があく、そうなればどう動こうと俺は反応出来る。その俺の反応に対してヤツはまた下がるかもしれないねえが、そこから先は繰り返した、こっちも止まればいい、そうやって何とか食らい付いていけばなんとか…：…なんとか…ん？)

ここまで考えた時、阿含は自分が何を考えていたのか気付いて愕然とした。

…何とか食らい付く？…コノオレガ？

神速のインパルスと言われたこの俺が？

100年に一人の天才と言われたこの俺が？

何とか食らい付く？

阿含は意識しないうちに、肩が大きく震え、凄まじい形相で歯を食いしばっていた。

(…：…許せねえ、許せねえぞ、小早川セナ、絶対潰してやる)

「HUT！」

サンゾーがボールを受け取り、中央突破を計る。

ラインに隙間が空けばそのままゲインし、行けなければ真後ろにいる阿含にバックパスをする。

スタート開始直後の自陣内でのプレー、鉄壁のラインの後ろ、失敗の要素のない鉄板の作戦でまずは時間を使って上手く行けば進む。

そんなことを考えてのファーストダウンのプレーだったが、プレーが始まると同時にヒル魔は悪寒がした。

安全で絶対的に安泰な揺ぎ無い大地の上を歩くような作戦のはずなのに、気が付くとそこは大地ではなく薄氷、少しでも身動きすれば氷の下へ落ちるかのような不安定さに襲われた。

何がそう思わせたのか？

セナか？と思ったがすぐに否定した。

プレー直後にはセナのポジションからはサンゾーは見えない。死

角で見えない以上、反応することは阿含でさえ無理だ。不安要素はセナではない、論理的にそう結論付けられるのに、ヒル魔にはそれでもセナがこの悪寒の元だと理屈ではなく気付いた。

阿含も疲労が限界に達していたが、論理的な危険性に気付いた。

そしてセナは見る、阿含の超反応は鏡、阿含の目の動き、手の動き、身体の重心はランではなくパスを受け取るかのような少し後ろにとっている。

セナが身につけているのは察気術とでもいうべきか、彼は相手の僅かな動作から次の行動を予測する。

しかしこのプレーでのセナは、阿含の次の行動を予測すると同時に、「思い出した」。

(そうだ、この状況はあの時と同じだ)

その先は考えたわけではなく、ただ自然と身体が横へ跳んだ。

顔は前を向いたまま、目は阿含を捉えている、にもかかわらず、完全な死角からサンゾーが投げたバックパスを、セナはがっちりとかキャッチした。

泥門時代には人間の動きとは思えない横っ飛びでボールを弾き、こぼれ球を十文字が取ってタッチダウンしたが、無意識とはいえ、二度目のセナはこのボールをキャッチした。

「な、何よ今の、人間の動きじゃないじゃない!」

サンゾーが驚くのも当然だ、全力で阿含のいる方へ走りながらこっちに一瞥もなしに横っ飛びしてボールを奪うという動きも異常だが、それ以上にその反応速度があり得なかった。阿含の神速のインパルスのように見てから反応するのならまだ理解出来るが、今のセナのプレーはサンゾーのパスに対して、見ないで同時に動いたのだ。

ただ驚くサンゾーに対し、阿含はある程度の分析はできた。

(俺の瞳に映ったサンゾー^ハの動きを見ていた…なんてことはあり得ねえが、俺の僅かな動作から次の動き、つまりパスを受け取ろうとしていることを予測することは不可能じゃねえ…不可能じゃねえが、信じられねえよ…俺になら出来るか?…いや、無理だ、勘が当たって更に運が良くてなんとかボールを弾けるかもしれねえってくらいだ、

なのに：コイツは完璧にキャッチしやがった：この：バケモンが）
試合前まではセナのことをカスチビ扱いしていた阿含だが、この時に至るとついに阿含の中ではセナは未知のバケモノとなっていた。

ボールをインターセプトしたセナはそのまま斜め前へ走り出した。

阿含はそれに反応したが、味方の選手が邪魔で思うようにセナに近づけず、セナに一歩先を行かれてしまった。

プレイ開始直後で回りは全員神龍寺の選手、当然潰そうと立ちほだかる。

「潰せー！」

セナに向かって猛然と突撃する神龍寺のディフェンス。

このあたりの切り替えの速さは流石というべきだが、相手が悪かった。

「バカ、行くな、隙間を塞いで阿含を待て！」

ヒル魔が声を掛けるももう遅かった。

進行方向に二人、こつちに向かってくるが、この試合で阿含とばかり遣り合っていたセナにとって、それ以外の選手の動きは止まって見えた。

目の前の選手が自分を捕まえようと手を突き出してくる、正直もどかしいレベルだった。

「どけー！」

次の瞬間、向かっていった神龍寺の選手は、セナの後方でもんどりうって倒れ、セナは更に加速して前方を走っていた。

半歩下がることでその手の動きを相殺する、目の前の動かない腕を掴んで後方へ引っ張って流す、同時に自分はその勢いで前方へ跳躍する。

相手の攻撃を弾くではなく、利用する。

泥門時代の十文字達ラインが使っていた不良殺法。

阿含相手に掴むという行為は危険かもと使うのは控えていたが、セナはここで使った。

囲み潰そうとするディフェンスをあつというまに抜き去り、阿含が

追いつく前に密集地帯を抜けた。

そうなればもうセナに追いつける相手などおらず、そのままタッチダウンを奪った。

26—28。

2点差となった。

ボーナスゲームについてその場で早急に打ち合わせする王城。

「さて、次どうするか？」

「キックなら1点差、タッチダウンなら同点だ…成功したらだが」

「データによると神龍寺はタッチダウン後の2点狙いを許した事がないんだそうだ、創部以来ただの一度も」

「確かに、超反応の阿含、空中戦のスペシャリスト一休、栗田、山伏のライン、セナのホワイトアローでもタッチダウンは不可能と言っていないだろう」

「だからといってキックの1点じゃあ追いつけない、この後は神龍寺の攻撃、ハドルで時間潰してるだけでタイムアップなんだぜ！」

「……………」

誰も良案が浮かばずに沈黙する中、高見が言った。

「ならばキックで1点取っておこう、ギャンプルは好きじゃないが、するとすればここじゃない、次のプレーだ」

セナはヒル魔さんならこんな時どうするだろうかと考えていたので、高見の考えはすぐ察した。

「…オンサイドキック」

「そうだ小早川、それで攻撃権を奪取する、それしかない」

「混戦の中の空中戦か、となると…」

そう言った雲水が見たのは、王城で最も背が高いレシーバー、桜庭春人だった。

今日、桜庭は一休に一度も競り勝っていない、それを当然皆知っていた。

それでも、高見は桜庭に言った。

「…桜庭」

「は、はい」

「任せる」

いつものハドルと変わらぬ口調で高見は静かに桜庭に告げた。

それを聞いた桜庭は、何か言おうとしたが止め、決意の籠った目で答えた。

「……………はい！」

(今日一度も勝ってない俺なのに、高見さんは信じてくれている、どうやったら勝てるかなんて今もわからない、でも、今勝つしかないんだ、かつこ悪くたっていい、マグレでも何でもいい、勝ちたい…いや、勝ちたいじゃない、勝つんだ！)

(泥門時代の西部戦を思い出すな…こんな時にモン太がいればなあ…いや、やめようこんな考え色々な人達に失礼だし)

セナがそう思うのも無理はない、王城の選手となったセナは色々なレシーバーを見てきたが、モン太ほどキャッチに特化した選手は見たことがなかったからだ、その成長の早さも。

(僕は僕で出来る事をしよう、それは、阿含さんを競り合いに参加させないことだ)

キックで着実に得点し、遂に1点差となる。

開始のキックは大田原が低く蹴った。

強く、低い弾道のボールはランダムに跳ね、暴れ馬のように予測がつかなかった。

動きが予測できない以上、モノを言うのが反射神経、当然阿含が一番早く反応した。

その阿含に即座に反応して追いかけるセナ。

しかし、セナが方向転換しようとして一歩踏み出した瞬間。
ビキッ！

「うがっ！」

と足の靱帯あたりのスジが嫌な音を立てた。

踏ん張ることができず、もんどりうって倒れるセナ。

「セナ！」

祈るようにプレイを見ていたまもりや鈴音は驚いて声をあげる。しかし一番驚いたのは阿含だった。

自分の反応に即座に対応し、ぴったりと張り付いてくるだろう、ここからどうするか、先にセナを攻撃するか、無視してボールを取りに行くか、と、ある意味ボールを取るよりセナとの駆け引きばかり考えていた阿含にとって、セナの取った行動は何もせずそのまま転ぶという予想外のものだった。

「え？」

と、驚く阿含。

あ？ではないところが彼の驚きの大きさを表しているといえるだろう。

つい、超反応で振り返ってセナを見てしまう。

咄嗟の反応の速さが仇となり、完全に阿含は出遅れてしまい、ボールの取り合いから脱落してしまった。

そんなボールに一番速く追いついたのは桜庭春人だった。

ちょうどボールが高めに跳ねたところに一番最初にジャンプする。

この試合で桜庭は一休より先に跳んだことすらなかった。

全て先に反応され、前に回りこまれていた、ポジショニングでもことごとく負け、ボールに触れることすらできていなかった。

そんな桜庭にボールの方から跳ねて向かってきてくれるという千載一遇のチャンス。

この試合で初めて先に跳んだ。

(や、やった…俺が走りこんだ所にボールが来てくれた、取れる！)

「よしっ！」

手を伸ばしながら思わず声が出る桜庭だったが、当然そんな簡単ではなかった。

ジャンプした桜庭の首筋に息がかかるくらいの真後ろから声がした。

「んなワケないだろ、俺がいるのに」

この1試合でトラウマになるくらい聞かされた声、細川一休の声。誰かなんて考える必要もなく、振り向いてみる必要もない。

何故なら、桜庭の指の先にはボールではなく、一休の手が見えていたから。

（お、俺のほうがいいポジションで先に跳んだのに、一休は俺より遠くから俺の後に跳んだのに、俺よりボールに速く到達するのか、そこまです差があるのか、俺と一休の差は運が味方についた位では覆せないのか？）

心が絶望に染まりながらも必死に手を伸ばす桜庭だが、スピードで桜庭を遥かに上回る一休は、一瞬で桜庭を空中で追い抜き、ボールを両手でがっちりキャッチした。

桜庭と一休の勝負は、一休の完勝で終わった。

なんと桜庭はこの試合でまだ一度もボールに触っていない。

単純な話、長身の桜庭が垂直にジャンプし、最高到達点でボールをキャッチすれば一休には絶対届かない。

ポジションニングの巧さで一休がまだ格段に上手でまずそんな状況にはならないが。

もし運が良くてなったとしても、全力ジャンプの最高点でボールを取る技術がまだ桜庭にはなかった。

桜庭の主な敗因は、高さでは優っているのに、経験や技術、スピードという相手の得意分野で勝負したことにある。最も、そうなるようにしているのも一休だが。

「よし」

ボールをキャッチした一休は、直後に空中ですばやく両手でボールを懐に抱え込んで確保する。

後は着地してヒザをつけば神龍寺ボールが確定する。
が

一休には地面が見えなかった。

一休の着地点には、

進清十郎が右腕を引き絞って待っていたからだ。

このプレイは確かに王城は運がよかった。

桜庭の前にボールが跳ねたこと。

そして、一休の着地箇所間に合う位置に進がいたこと。

進は、渾身の力をこめてボールを抱えている一休の腹にトライデントタツクル、いや、トライデントアツパーを叩き込んだ。

「ゲツボア〜！」

一休は自分のスピードに進のパワーを加えたカウンターで直撃を食らい、文字通り空中に吹き飛んだ。

肺の中の空気を一瞬で吐き出すような声というより音を口から出す一休。

もし、ボールと言う緩衝材がなければ胃に穴が開いていたかもしれない。

ボールを離さないようにするどころではなく、ボールも一緒に空中に舞い上がった。

ボールが上がる、桜庭の真上に。

それを見たベンチにいた高見が大声をあげる。

「今だ桜庭、跳べ！高さなら、高さならお前より上はいないんだ、飛べ〜！」

高見の声を聞き、ボールが真上にあるのを見た桜庭は、着地してすぐにもう一度跳んだ。

「うおおおおおっ！」

神龍寺の選手も反応が早く、数人競り合いに来ており跳んでいる。

しかし、手を伸ばす神龍寺の選手の腕の位置に、桜庭の顔があった。

それくらい、勝負にならないくらい高い位置で桜庭はボールを両手で掴んだ。

そしてそのまま着地する。

王城ホワイトナイツ、オンサイドキックによるボール奪取に成功。

22nd down 神龍寺ナーガ 其の七

残り時間は15秒、点差は1点、王城ボール。

おそらく1プレー、パス失敗やボールを持った選手がラインの外に出るような時計を止めるプレーなら2、3プレーは出来る微妙な残り時間。

それで試合は終了する。

王城のキッカーの力ではフィールドゴールを狙うのはほぼ不可能な距離と位置。

更に相手が強烈なプレッシャーをかけてくる神龍寺ナーガでは尚更だ。

王城も試合終了間際でのインターセプトに逆転勝利が手の届く位置に見えてきたことにより、接戦に観客は多いに盛り上がっている。

しかしここで王城は最後のタイムアウトを使う。

選手達も心配そうにベンチに集まって来る。

問題はセナ。

エースがここへきて限界に達し、倒れてしまったからだ。

阿含はまだ動けるのにセナが倒れたのは、セナより阿含の方が体力があるからではない。

逃げる者と追う者では走行距離も消費するスタミナも全く違う。

追う者は一直線に追えるだけに足の負担も少なく距離も短い。

相手を避けるために走行ルートは円弧になるセナと、セナという点に向かって直進できる阿含では実際の距離は倍近くの差が出てくる。

そして、セナが実際に走った距離は、泥門時代の対神龍寺戦を遥かに上回っていた。

その時の1試合で走った走行距離を、この試合では実は前半終了次点で超えていた。

「……………」

ベンチに座ってアイシングをしてもらいながら、セナは昔を思い出していた。

(…フィールドで倒れるのって、泥門時代の神龍寺戦以来かな？しかも相手も同じ阿含さんときた。

あの時は確か…そうだ、蛭魔さんと武蔵さんがケンカするフリして、僕が阿含さんと戦うと見せかけて雲水さんにブリッツかけてポールを奪って、そして、阿含さんを初めて抜いてタツチダウンしたんだ…：なんだか懐かしいなあ)

周りの心配を他所に思い出に耽るセナ。

倒れたことは初めてではないため、それほど慌てずに落ち着いていた。

そこからセナは自分の身体との自問自答に入る。

(あの時も倒れたけど、試合に出続けたんだ、プレーの合間にアイシングしながら、なんとか誤魔化しつつだったけれど、試合終了までプレイしたんだ…

…今の僕は、どう？走れる？)

脚に手を置き、自分に問いかける。

色々な返事が返って来る。

(メゲるわ)

(…駄目?)

(…：…つらいよ、もう限界だよ…：でも…：でもね、前と同じだよ)

(うん、前と同じでツライね)

(でも、前と同じなら…)

(だったらイケルぜ！)

(走ろう！)

(…走ろう!!)

(…いろいろ考えた所で、最終的にはやっぱり僕の答えはこれか)

セナは顔を上げると、自分を心配そうに見つめる仲間達にはつきり

と元気良く答えた。

「行けます、走れます!」

おおっと沸き上がる王城ベンチ。

実際は前と同じではなく、走行距離は遥かに長いのだが、それを同じ感覚に思えるくらい、セナは成長していた、本人は自覚してはいなかったが。

しかし、静かにそれを告げる者がいた。

「駄目だ、交代だ、小早川」

「…」

一瞬で静まり返る王城ベンチ。

そんな凍り付いた空気をよそに、その人物は指示を出す。

「猫山、小早川の代わりに入れ」

「か、監督!」

堪らずに高見が声をあげる。

「なんだ高見?」

セナの交代を指示したのは、王城ホワイトナイトの監督、庄司だった。

「あ、あの……ここで小早川を下げるってというのは……」

「小早川は足の筋を痛めている、病院へ連れて行かなければならん、今無理させれば選手生命に関わる、交代は当然だろう」

「か、監督、僕はまだ走れます!」

セナも言うが。

「お前の限界を決めるのは、監督である私だ」

却下された。

「……………」

にべもない監督の対応に、セナやチームメイトは押し黙ってしまふ。

それを見た庄司は、少々の説明の必要を感じたのか、ゆっくりと話し始めた。

「…確かに、あと1プレーくらいなら、と思うかもしれない。だがその1プレーにかかる負担が小早川の場合は桁違いに大きいのだ。あの

後ろへ下がる動きも、小早川以外であれが出来る人間を私は知らない。脚の怪我は取り返しがつかない、多分大丈夫だろうでは駄目なのだ」

周りを見回し、全員が大人しく聞いているのを確認し、庄司は話し続けた。

「さつき、私は限界を決めるのは私だと言った。これはな、実際にプレーしている選手がこれを判断することは不可能に近いからだ。負けても次があるプロと違い、高校の大会は総当りではなくトーナメントであるため1試合1試合が非常に重要だ、更に高校生という短い期間であれば出る試合全てが選手生命を賭ける価値があると考えてしまう。実際に限界を感じていても今までの自分や仲間の努力を思うとどうしても出ようと思ってしまう。ここで足が痛いから止めときます。なんていう人間はいないのだ。一生懸命練習していればいるほどにな。

もう一度言うが、選手に限界を判断することは出来ない、だからこそ私のような監督やコーチが存在するのだ。

「……納得したか？」

「……………」

選手達からは返事がなかった。

しかし、先程までの「どうして？」と納得できない感じではなく、「セナが出れないのはしょうがないのか？」という雰囲気になってきていた。

庄司はセナを見て話す。

「…私とて、小早川のプレーはもつと見ていたい。本当ならばもつと早くに代えるべきだったのだ。

しかし、どんどんよくなるお前のプレーを見ていて、未だ成長を続けるお前のプレーを見ていて、つい、交代させるタイミングを逸してしまった。倒れてから交代させるなど…指導者失格だ」

「……………」

監督にここまで言われて尚、セナを出場させたいなどと言えるわけもなく。

高見や雲水を始め、チームメイトは納得するしかなかった。セナ抜きでどうするか考えよう。そんな流れになりそうな時。

「……………監督、お願いがあります」
話しかけたのは、セナだった。

「セナだ、100%セナで来る」

神龍寺のベンチ。

ヒル魔が確信を持って断言する。

「この土壇場で一番強いカードを切らねえ指揮官はドアホだ、だからセナだ…」

…ただし、さっきのプレーで続行不可能になって交代してたら別だな」

「出てきますかね、アイシールド」

進に殴られたダメージが回復仕切れていないのか、ベンチに座ったままドリンクを飲んでいた一休が言った。

「俺なら出すし、セナ本人の判断でも出るだろう、だがあそこの監督は庄司だ。」

あいつは現役時代、相棒とも言うべき選手を怪我で失っている、あの監督の思考パターンからいって、ここでセナを下げても不思議はねえな」

そう言うヒル魔に即座に否定の声があがった、阿含だった。

「奴は出てくる、必ずな。」

足が痛い？潰れるかもしれない？

そんな甘っちょろい理由で交代なんかしねえよ」

そう言う阿含に苦笑いをしながらヒル魔は言う。

「それを止めんのが監督の仕事なんだよ、セナには未来がある。まあ誰だってあるけどよ、アイツの場合は将来日本のアメフト界を背負って立つ人材だからな、庄司なら出さねえよ」

「だがチームとして勝ちにこだわるなら小早川を出すんじゃないか

「？」

武蔵が言う。

「まあ、そういう選択肢もある…さて、王城はどうするのか、見せてもらおうか」

タイムアウトが終了し、王城ボールで試合が再開する。

フィールドに立つ王城ホワイトナイツの選手の中に、

小早川セナはいた。

交代をせずに、いつも通りにフィールドにいる。

庄司監督は腕を組んだまま無言で立っている。

ポジションにつく王城の選手を見ながら、ヒル魔は考える。

（セナは交代しなかったか、今の王城がウチに勝つにはセナが走る以外の選択肢はねえが…

何かひつかかるな…そこまでかかっている気はするんだが、何だ？ 考える俺）

「HUT！」

高見の声がかかる。

1回目はダミーで誰も動かなかった。

（王城の選手の顔が強張っているな、これは何か奇策をやろうとしているからじゃなくて、土壇場のこの場面にただ単に緊張しているだけだな…じゃあ俺は何に引っかけかっている？）

「HUT！…：HUT！」

ダミーの掛け声が続く。

（そもそも、庄司の奴はどうしてセナを出した？

俺はあの監督なら絶対に下げると思っていた、セナのあの転び方は間違いなく脚を痛めている。

もう一度あの後ろに下がる動きをやったら多分…いや、かなりの高確率でセナは潰れる）

「HUT！」

4 回目のコール、まだ動かない。

(こっちのディフェンスはセナを止めるためのフォーメーションじゃない、スピードを殺すためのものだ、もし阿含が抜かれても隙間のないディフェンスラインでセナを迂回させ、その間に阿含に追いつかせる、あの後ろに下がる動き…仮にフォーメーションでも名付けるか…を2回以上はやらないとタッチダウンには至らねえハズだ、そうしなければまず間違いなくセナは潰れる、選手生命も終わるだろう、高見だってこっちが対セナ用のフォーメーションを組んでいることぐらい予想出来るし、ポジションにつけば確信できるはずだ…)

「HUT!」

(まさか…打つ手がないのでセナに全てを託すという無策…?)

「HUT!」

(いや…高見はそんな奴じゃねえ…ならばセナが出てきたのは…)

…

(………囧)

「HUT!」

このコールの瞬間、プレーが開始された。

同時にヒル魔が叫ぶ。

「パスだ！セナは囧だ」

ヒル魔の言った事を証明するかのように、ボールを受け取った高見は、パスの体勢に入った。

セナは微動だにしていない。

(庄司がセナを下げなかつたのは、囧として使うので動かす気がなかつたからか、こっちの立場としては例え相手が囧ですと教えてくれないでもセナがフィールドにいる以上、対策を取らなければならぬ、パスへの警戒が薄く、更に一休はまださっきのダメージから回復しきっていない、一か八かパスに賭ける価値はあるってことか)

ヒル魔の考察は的を得ており、タイムアウト時にセナが庄司にお願いしたのが正にそうで、役割は囧、絶対に無茶な動きはしないと約束してなんとか出場の許可を得ていたのだった。

(それにしても、俺も気付くのが遅いぜ、焼きが回ったか…いや、衰え

たんじやねえ、俺自身がピンチ慣れしてねえんだ、頼りになる仲間が多くて弱い敵とばかり戦ってきたからな、味方の強さに不満を垂れるほどバカじゃねえし、敵の強さに物足りなさを覚えるのは贅沢だ…そう考えたら、これはむしろ願ったりな状況じゃねえか…だからといって…)

(だからといって、桜庭ごときが一休に競り勝てると思うのは甘いんじゃないか…

…とか思っているんだろう、ヒル魔よ)

ヒル魔の思考とリンクしたかのように読み取ったのは高見。

大きく振りかぶり、投擲に入る。

投げるフォームはいつもより大きく、高く。

(問題は桜庭がキャッチ出来るか否かのみ、一休は問題じゃないんだよ！)

「この…エベレストパスにはな！」

高見は自分の腕の最高地点でボールをリリースした。

エベレストパス。

高見が以前から考えていたパスで、長身同士のQBとレシーバーのコンビで行うプレーで、

誰も届かない高度でパスの遣り取りが行われるため、投げた瞬間からボールのインターセプトが不可能という技だ。

「うわっ、高え！」

観客が驚いて声をあげるほど、高見が投げたボールは大暴投かと思えるような高度で飛んでいく。

高見が心配しているように、問題は桜庭のキャッチの技術。

練習でも桜庭の跳躍の最長地点でのキャッチはほぼ成功したことがない。

成功したのはノーマークでプレッシャーがなく、パスも緩い山なりの場合のみだった。

試合で、しかもこの土壇場の緊張の中で、一休のマークを受けて、ボールの速度は最速。

ぶつつけ本番と言っても差し支えない状況でボールはうなりをあ

げて飛んで行く。
ボールの先には桜庭と一休。

23rd down 神龍寺ナーガ 其の八

才能とは、繰り返し反復練習をして体に覚えさせるというプロセスを飛ばして、

イメージをそのまま体が勝手に正確に動いてくれること。

それを才能というならば、それが出来る人間を天才というのならば。

そして、それ以外の人間を凡人というのならば。

桜庭春人は後者にあたる。

今まで出来なかったことが大事な本番で出来た。

そんなことが都合よく起こるほど、凡人にとっての現実は甘くない。

桜庭とて努力はした。

しかし、ハーフタイムに一休に指摘されたように、全てを捧げたわけではない。

モデルの仕事は辞められなかった。

仕事の日には学校と監督の許可を得て練習を休んだ。

アメフトをはじめ、競技における練習の重要性は理解していた。

なのに休んだ。

モデルの仕事がアメフトより楽しかったからでは断じてない。

ただ、怖かったからだ。

せつかく得たしがらみを壊すのが。

捨て去ることによって期待してくれていた人達の目が失望の色に染まるのが。

だから、どっちも捨てることが出来なかった。

モデルとして売れると喜んでくれたマネージャーがいた。

身長のある自分がアメフト部に入ると喜んでくれた先輩がいた。

モデルをしながらアメフトで活躍する自分を応援してくれるファンがいた。

全ての期待に応えたいと想い続けた。

その何が悪いのか？

何も悪からうはずがない。

桜庭春人は間違っではない。

しかしその結果、彼の辿り着いた未来は、高見の投げたボールをキャッチ出来ずに弾いてしまうという現実だった。

「うわあああー！」

ファンブルしたボールを掴もうと手繰り寄せるように慌てて手を伸ばす。

まだボールは生きている、まだ間に合う、まだ取り返しはつく。

そんな彼に、厳しい現実はこう言った。

「いや、お前はよくやったよ、桜庭春人」

そう優しいに言ったのは、彼にとっての厳しい現実、細川一休だった。

桜庭の最高到達点には一休は届かない。

一休はこれまではそうならないように動いていたが、前のプレーで進から受けた攻撃のダメージでうまく動けず、ポジショニングで先行されて桜庭に先に飛ばれてしまったが、そのアドバンテージがなくなれば彼のフィールドだった、一瞬あればキャッチには十分だった。

「俺に勝てないまでも、心が折れることなく挑み続けた、見た目よりタフだよお前、

ここまで食らい付いてくるとは正直思わなかった」

そう桜庭を褒める一休の両手には、ボールが掴まれていた。

「……………」

声もなく一休が持ったボールを見つめる桜庭。

一休は素早く下を確認する。

今度は誰もいない、そもそも進は攻撃に参加していない。

後は着地し、プレーを終えれば試合は終了する。

そう思い、いつも通りの動作でボールを抱え込もうとした時、腕が動かないことに気付いた。

「？」

見ると、自分のではない長い腕が自分の腕に絡みつき、ボールを掴んでいた。

それは、桜庭の腕だった。

桜庭がその長身に見合う長い腕を伸ばしてボールを掴んでいた。桜庭は普段見せないような鬼のような必死の形相で叫んだ。

「返せえー！」

強引に差し込んだ手で無理矢理にボールを弾き飛ばそうとする。普段の彼からは想像出来ない荒っぽさだった。

「わあああああー！」

獣のような咆哮をあげる桜庭。

なり振りなど彼は全く構っていないかった。

「守備の技、リーチ&プルだ…あいつめ、教えてもおらんのに…」

呟いたのは庄司監督。

試合後、この時のことを桜庭はほとんど憶えていなかった。

ボールをキャッチし損なって、後は夢中でボールを追いかけたとしか記憶していなかった。

ギリギリと音を立て、一瞬だけ膠着するが。

「さ…くら…バァー！」

一休の叫びと同時にバチつと音がして両者からボールが弾かれた。

ボールはフワリと浮き上がって宙を舞った。

競り合いをした桜庭と一休は体勢を崩し、胴体から地面に落ちていった。

ここでタイムアップとなる。

このプレーが終了すれば、試合は終わる。

王城が勝利するには、このボールを取って、そのままタッチダウンするしかない。

そして、そのボールを取りに一番最初に来たのは…

観客から歓声があがる。

「最初に追いついたのは王城だ！…アイツは…アイツは、えくつと、誰だっけ？」

「何言ってるんだよ、あいつは…ほらあれ…アレ？」

「あんな奴いたっけ？」

「いたよ！ずっといたよ…いたよね？」

石丸だった。

試合終盤で攻撃面でフル出場中の彼に観客のあんまりな言葉だった。

神龍寺側にも当然ボールに寄せてくる選手が何人かいる。

その中で真っ先に石丸と競り合う選手はを見て、高見が叫んだ。

「ばっ…馬鹿な、何故…一休がそこにいるんだ?!」

それは、細川一休だった。

つい今、桜庭と空中で競り合って体勢を崩し、倒れたはずの彼。

事実、桜庭は背中から地面に落ち、今も立ち上がれていない。

ただ倒れた桜庭と違い、一休は次を考えた。その瞬時の判断が彼らを分けた。

一休は背中から落ちずに、猫のように空中で身体を半回転させてうつ伏せになって身体を丸め、地面に落ちると同時に前に回った。

柔道で言う前周り受身である。

そして、半回転して立ち上がると同時に2，3歩助走しジャンプして石丸との競り合いに参加したのだった。

石丸と一休の競り合い。

ランニングバックの石丸は当然一休とは初対決。

器用貧乏な石丸はキャッチもそこそこ出来たが、走ることが専門なため、レシーバーが相手では分が悪い、しかも、相手が関東最強のコーナーバックとなれば、勝率は推して然るべきとなる。

石丸のジャンプのタイミングも高さも悪くない、言うれば普通だった。

並では、最強の相手にはならず、健闘するも勝負にならず、石丸はあっさり一休にボールを獲られてしまった。

キャッチした瞬間、一休はまず桜庭を見た。

桜庭は片膝立ちの状態でまだ立ち上がってすらいない。

次に下を見る。

当然下には誰もいない。

「よっ」

一休は問題なしと確信する。

(今度こそは大丈夫、さん……?)

一休は「三度目の正直」と思おうとしたのだが、頭をよぎったのは別の言葉だった。

「二度あることは三度ある」と。

何故なら、一休はまたボールを抱え込めなかったからだ。

またしてもボールと自分の身体の間腕が差し込まれていた。

それは…

セナの腕だった。

脚も限界で、囨だと思われていたセナがいつの間にか来ていた。

「来たあ！アイシールド21！」

観客から大きな歓声上がる。

「あいつめ……無理はしないと云っておいて…」

庄司が苦虫を潰したような表情で呟く。

そして、セナの次の行動に観客や他の選手はもう何度目かの度肝を抜かれる。

客観的にセナの動きを見ると、その動きは一休の直後にジャンプし、ぶつかっていったが、次の瞬間には弾き飛ばされてコマの様に回転しながら吹き飛ばされるという動きに見えた。

だが実際の内容はまるで違う。

前述のように、セナはぶつかった瞬間に手を差し入れている。

そして、右手で一休の抱えるボールを掴んでいるセナは、左の掌を一休の身体に当て、その左手を支点にして体を半回転させ、一気に右手を引き抜いた。

その右手には、ボールが抜き取られていた。

スクリーバイト

力づくでボールを掻き出すストリップングに、回転を加えた難易度の高い技。

これが出来るのは、セナの記憶の中にもみいる白秋ダイナソーズのマルコのみ。

セナはこれを、空中で成功させた。

(出来た…マルコさんのスクリーバイトは練習すらしたことがな

かったけど、食らったことはあったから技の理屈は頭の中で理解はしていたのでぶつつけ本番でやってみたらうまくいった、やれば出来るものなんだな、握力がギリギリだったけどなんとかあった、進さんとやってる秘密練習のおかげだな)

才能とは、繰り返し反復練習をして体に覚えさせるというプロセスを飛ばして、

イメージをそのまま体が勝手に正確に動いてくれること。

それを才能というならば、それが出来る人間を天才というのならば。

そして、それ以外の人間を凡人というのならば。

小早川セナは前者にあたる。

セナのこのプレーを観客席から目玉が飛び出るほどの驚愕の表情で見ている人物がいた。

固まって動かないその人物に、一緒に来ていた女性が声をかける。

「どうしたの？…確かにすごいプレーだけど…マルコ？」

氷室丸子が円子令司に声をかけていた。

隣からの声も気にならない程、マルコは驚いていた。

(あ…あれは、俺が考えて今現在特訓中の技、スクリューバイトじゃないか！)

…同じことを思いつく奴がいたのか…俺はまだ未完成なのに…完成してやがる…完璧に…

しかも空中でやるって…出来ねえよそんなもん…でも)

驚いていただけのマルコだったが、次第にその表情は笑みに変わっていった。

(彼のプレーを見て、未完成だった俺のスクリューバイトも完成させることが出来る。

そうか…腕を引き抜く際には腕の力より腰の回転が重要なんだ…見事すぎるぜ、小早川セナ、もうここまで来ると、彼のプレーは芸術だな)

白秋ダイナソーズのQB、円子令司。

秋大会へ向けて必殺技「スクリューバイト」を思いつき、練習を重ねてきたが、イマイチ完成せず、ここしばらく停滞していた時に見た試合で思わぬ収穫を得る。

しかし、その参考になったプレーをしたセナ自身は、泥門時代に対戦したマルコから食らって憶えていたわけなので、ある意味マルコは自分で自分に教えたことになる。

「…ねえ、マルコ、どうしたの?」

「ああ、マリア、いやね、秋大会までに完成出来たらいいなって技が今出来ちやっただんでね、おかげでもう1個考えていた技の練習に入れそうなんで、嬉しくてね」

「もう1個のって何?」

「ん〜…ナイショ」

「あ、そう、ならいいわ」

「いや、そこはもうちょっと食い付こうよマリア」

「そういうノリ嫌いなもの、それとマリアってやめて」

温度差は違えど仲のいい二人だった。

このマルコがセナの前に現れるのはもう少し先になる。

（よし、あとは着地して走ろう…でも、ここまでただ走るだけだったのに脚がかなりキツイ、さつき倒れたのって、本当に限界だったのかな?この状態でカットとかがしたらヤバイかもしれない…でもやるしかない。

限界「かも」しれないという理由で走るのを止めたらもう二度と走れない気がする、もうこれくらいで充分だろう、僕は頑張ったんだ…って言い訳をしてこの先の人生ずっと逃げてしまう気がする。

…すいません監督、監督の言った通り、止まれません…ここで僕のアメフト人生が終わってもいい、行きます!」

覚悟を決めるセナ。

そして、監督の庄司はこのセナの覚悟を正確に察していた。

無理をしないというセナの言葉を鵜呑みにして試合に出させたわけではない。

では大事な選手が潰れるかもしれないという危険を認識しておきながらフィールドに送り出したのは何故か？

王城ホワイトナイトのエースランナー、アイシールド21という選手としてなら庄司は100%止めていた。しかし、人間、小早川セナを止めることが出来なかったのだ。

セナの強い覚悟を感じ取った庄司は、例えここでセナの選手生命が終わろうとも、試合に負けようとも、彼の覚悟を無にすることは彼自身の為にならない。

彼を人生の敗北者にしてはならないと思ったのだ。

実の所、セナの脚は本当に限界だった。

着地後、一度でもフォースドレイメンションのような脚に大きな負担が掛かる動きをしていれば、セナの脚は潰れていた。

そこで、彼の選手生命は終わっていた。

それくらい危機だったのだが、そうはならなかった。

彼を救った人物がいた。

「うおおおおおおお！」

セナが着地する寸前に、雄叫びをあげて横から猛然とタックルしてくる選手がいた。

セナの足が地に着く寸前、タックルを決めてセナを背中から地面に押し倒した選手がいた。

金剛阿含だった。

このプレーが始まる前。

阿含はセナしか見ていなかった。

ただセナだけを見ていた。

プレーが開始された時も変わらなかった。

ヒル魔がパスを見破り、セナは囷と言った時も、阿含は全く無視し、セナから目を離さなかった。

実際にセナを囷にし、高見がパスを投げた時にも、それをキャッチしようとして競り合う桜庭にも、一休にも目もくれなかった。

ただセナだけを見ていた。

だから、セナが自分から注目が逸れたのを見計らったかのように静かに走り出すのを阿含だけは見逃さなかった。

阿含は考えながら走る。

(カスチ：小早川セナが限界かどうかなんて関係ねえ、走れると考える。ヒル魔のフォーメーションなら奴は大回りさせられる、その間に俺は例え一度は抜かれても追いつくことが出来る：いや、前提が違う、そもそも走らせなければいい、走り出されるとコイツは何をするかわからねえ、そうなる前に、潰すしかねえ！)

そう考えている間に、セナは一休から空中でボールを奪い取っていた。

空中戦においては阿含ですら認めている一休から、空中で、一瞬で奪い取った。

鳥肌が立つ阿含。

(やはり奴は死んでなんかいいねえ、ここだ！ここしかねえ、着地前に：間に合え！)

「うおおおおおおお！」

それは、阿含は意識していなかったが、彼にとっては初めての必死で全力のタックルだった。

試合終了のホイッスルが吹かれた。

王城ホワイトナイツ 27 | 28 神龍寺ナーガ

試合が終了した。

24th down 明日への決意

試合終了後、引き上げる王城ホワイトナイツの面々を乗せたバスは一路王城高校へ向けて走っていた。

バスの中、喋っている人間は誰もいなかった。皆うなだれている。僅かに聞こえてくるのは嗚咽。

席の一番後ろに一人で座り、タオルを頭から被って俯いたまま泣いている選手が一人。

桜庭春人。

誰も声を掛けなかった、かける言葉がなかった。

そんな重苦しい空気の中で高見は思う。

(…完敗だった…点差だけを見れば1点差の僅差だが、実情は違う、神龍寺と互角だったのはセナと進だけだった、特にセナ、彼がいたから試合になっていたといってもいい、もしセナがいなければ、進がいたとしてもかなりの大差で負けていたことは間違いない。

桜庭は責任を感じて落ち込んでいるが、全員同じ思いだろう…俺も、正直情けない思いで一杯だ…畜生、もつと…もつと強くならなければ…ヒル魔…秋大会には…10倍にして返してやるぞ)

高見は落ち込んではいたが、俯いてはいなかった。

金剛雲水も結果を冷静に受け止め、周りの選手を見回して明日以降のことを考えていた。

(この試合で、全体のレベルアップはもちろん、今後やるべきことがはっきりした。

正直言つてこの敗北はチームを飛躍的に強くさせるだろう…とないと問題は…やはり桜庭か、このままでは潰れかねない、彼にはケアが必要か……少し背を押してやるか)

幼少の頃より阿含と比較され、負け続けてきた彼の人生。

一度は戦うことを諦め、阿含のために尽くそうと折れたこともあったが、結局雲水は再び立ち上がり、戦うことに決めた。この試合の敗北は確かに無念であったが、それで阿含に勝つことを諦めるはずもな

く、ただ、勝つまで戦い続けるのみ、と、決意を新たにするのであった。そしてチームメイトにもそうであって欲しいと願っていた。バスの車内で落ち込んでいるチームメイトを見回し、その様子にまだまだ上へ行けるといふ手応えを感じ取っていた)

(…強くなるう…みんなで)

進清十郎はいつものように腕を組んで目を閉じていた。

(俺はまだ甘い、弱い…だから負けたのだ…もつと、強くならなくては)

彼も自省していたが、他の選手と違い、彼のそれはいつものことなので落ち込んではいなかった。

小早川セナは、疲れているのだろう、バスに乗り込んで座った直後から寝てしまっていた。

ケアするために隣に座っているまもりの肩にもたれ掛かったまま気絶したかのように微動だにしない。

まもりも普段ならセナが隣でくっついていてる状態は嬉しいはずなのだが、今はそれどころではなく、心配そうにセナの顔をじっと見つめている。

セナの脚は試合後にすぐ王城専属医師には見せた。

緊急な治療の必要はないとの診断で、明日病院へ行くことになっている。

セナの強靱で柔軟な筋肉が足の筋を守ったらしい。

奇跡のように質のいいセナの脚の筋肉に医者は驚愕し感動すらしていた。

一方、神龍寺のバスの中。

王城と同じで静かだが、勝った為に車内の雰囲気はいい。

金剛阿含は眠っていた、爆睡だった、セナと同じように。

最後尾のソファを一列独占し、横に寝転がって寝ていた。

「いつもは付き合っている女の人の車でどこかへ行っちゃうのに、今

日は帰るんだね阿含君」

栗田はおにぎりを口一杯に頬張ったまま話す。

「まあ、それだけ疲れたってことだな」

ノートPCに何やら打ち込みながら答えるヒル魔。

「次の相手はどこになったのかな？」

「岬ウルブズだ、今日に較べれば問題ねえ、ま、油断はしねえがな」

「その次は？」

「まだ決まってねえよ糞デブ…まあ多分、太陽スフィックスだろうな」

「で、その次がいよいよ帝黒かあ、前は完敗だったし、今度も厳しい戦いになるね」

「そうだな、パワーアップの手は打っているが…もう少し相手のデータが欲しいな、出来れば大和猛を生で見たい…だがそうするには…そうだ、そうしようケケケ」

口に出しながら考え込んでいたヒル魔だが、何か思いついたのか、楽しそうに笑い出した。

少しすると栗田も寝てしまい、バスの中はヒル魔以外は全員寝てしまったようで、車内で聞こえるのはヒル魔が打っているノートパソコンのキー音だけとなっていた。

ヒル魔は今日の試合を思い返す。

(…収穫の多い一戦だった…まず阿含、アイツはこれで勝つ喜びとプレーをする楽しさを実感できただろう。もうアイツにとってアメフトは暇潰しではなくなつた。

…ウチの他の面子も最近は勝ち慣れてきつつあったのでいい発奮材料になったはずだ。総合力でこっちが優っていたとはいえ、阿含がいなければセナに誰も対応できず、結果は逆になっていたろう、そう確信出来るほど小早川セナはプレーヤーとしての完成度が高い。

収穫が多かったのはウチだけじゃなくて王城もだろうがな…それにしても、小早川セナ)

ヒル魔はデータ入力を止め、大きく伸びをすると窓の外の景色を見た。

「セナのプレーは前半と後半ではプレー内容がまるで違っていた…手を抜いていたという感じではなかった…あれは、なんとというか、ようやく目覚めたって感じだったな…つまり、本人も無自覚だったがアイツは本気ではなかったってことか…しかも、まだ成長する」

ヒル魔はそう口にしながら、いつもの動作でポケットからガムを取り出して口にしました。

「ククク…やっぱオモシレエや、アメフトは」

・
王城のバスが学校に到着した。

この日は軽いミーティングのみで解散することになっていた。

明日は休日で練習禁止日となっている。

王城は部活の休みはあるが、大抵の部員は用事でもない限り自主練に出てくるので休みになっていない。

だがハードトレーニング後の超回復等を考えると、休息を取ったほうが良い場合があるので、庄司監督の意向で休みの他に練習禁止日というのが作られていた。

ミーティングは本当に簡単に終わり、解散となった。

反省は重要だが疲れている脳と身体では自虐的な発想にしかならないと庄司監督は判断したためだ。

・
セナは起こさずに家に送り、部屋に運んで寝かせた。

疲れきっていたのかその間も全く目を覚まさなかったセナ。

部屋に一人残ったまもりは上着や靴下を脱がせたり荷物を整理したりと世話をする。

一通り終わらせると、ベッドに眠るセナの隣に跪き、布団を掛けてあげる。

「ふう」

一息ついたまもりは、ベッドに肘をついてセナの寝顔を見つめる。

試合の激闘が嘘のような穏やかな顔でセナは眠っている。

「…こうして見ると昔から知っている幼馴染のセナなんだけどな…」

指でセナの頬をツンツンと突くが、相当深く眠っているようで、セ

ナは全く起きる気配がない。

「…試合になるとあんなにカツコ良くなるんだから…セナも男の子なんだな……もう…惚れ直しちゃったじゃない」

部屋に二人きりだがまもりは周りをキョロキョロと見回すと立ち上がり、セナに覆い被さるように顔を寄せていった。

「がんばったね、セナ」

チュッ

まもりはセナの頬にキスすると、立ち上がって部屋を出て行く。ドアを閉める前に顔を覗かせて、もう一度セナの顔を見て言う。

「おやすみなさい」

桜庭は部屋のベッドに腰掛けたまま項垂れたままだった。

バスの中も、ミーティング中も、帰宅してからもずっと一言も喋っていなかった。

反省、後悔、自己嫌悪、それらが交じり合って結局は頭の中が真っ白になって何も考えられなくなっていた。

「…俺は……」

その後は言葉が続かない。そもそも何を言いたいのか自身でもわからない。

茫然自失していた桜庭に、下の階にいる母親から呼ぶ声がした、来客らしい。

「客……こんな時間に……ジャリプロのマネージャーかな……そういうえば明日は事務所のファン感謝イベントだっけ……」

桜庭は自分が声に出して独り言を言っていることさえ気付いていなかった。

そして、その来客が部屋に入ってきたことすら気付いていなかった。

「落ち込んでいるというより、迷っているな」

いきなり声を掛けられ、驚いて弾かれたように顔を上げ、入ってきた人物を見る。

「お……お前は……！」

翌々日

「おはよう、高見」

登校中の高見を校門の前で後ろから声をかけたのは雲水だった。

「やあ、おはよう雲水、こんな風に会うのは久しぶりだな」

「まあ、今日は朝練がないからな」

二人は話しながら歩いて行く。

校門をくぐったあたりで、後ろからガラガラと騒がしい車輪の音が聞こえてきた。

「リアカー？かなりの速さでこっちへ来るな」

そう言っている間にそのリアカーは視界に入る。

「引いているのは…瀧じゃないか、リアカーをローラーブレードを履いて引いているのか、どおりで速いわけだ」

「どくんがくどんがらがった、セクナ様のおっ通りだ〜い」

鈴音は元気に歌いながらノンストップで校門をくぐり、そこで二人に気付いて急ブレーキをかけて止まった。

「あ、おはよう〜ございます」

「やあ、おはよう瀧…って後ろに乗っているのは小早川じゃないか」

「お、おはようございます、高見さん、雲水さん」

リアカーの荷台に座布団を敷いて正座して座っていたセナはペコリと挨拶した。

「で、何しているんだ、これ？」

「いえね、昨日王城の医者には1週間は走るのを禁止されていたのですが、禁止されるまでもなく筋肉痛で歩くのも辛い状態だったので鈴音が迎えに来てくれました、強引にリアカーに乗せられてこの状態です」

「流石の小早川も筋肉痛になったか」

「はい、かなり無茶な動きを繰り返しましたので」

「足の具合はどうだ？」

高見が尋ねる。

「はい、僕は今日の放課後は念のためにもう一度病院へ行くことになつていますが大丈夫です」

そんな風に話していると、周りに他の生徒が集まってきた。

王城高校といえばアメフトで有名で、その部員のキャプテンやエースといえは学校で知らぬ者はいない程の有名な。つい昨日試合があつたばかりで応援に行つた生徒も大勢いれば、当事者に話を聞きたくて寄つて来るのは当然といえた。

「おはよう高見、昨日は惜しかったな」

「あ、金剛君、試合見たよ、かつこよかつたじゃない」

「セナ君も昨日目茶苦茶すごかつたよねえ、一緒に見てた私の友達なんて泣いちゃつたのよ」

友人やクラスメイトやファンが集まつてきて声を掛けてくる。

大騒ぎになつて揉みくちやにしたりしない所が品の良いとされる王城の生徒らしいと言えるだろう。

「登校中の他の生徒の迷惑になるから授業が始まるまで部室に行つてよう」

如才なく周りに受け答えしながら高見はセナと雲水に言った。

「そうですね」

秋の関東大会決勝、相手は神龍寺ナーガ。

セナが叫ぶ。

「これが、俺の新技、『舞空術』だ!!」

身体を鍛え続けたセナは、ついに気のコントロールを見につけ、空を飛ぶことが出来るようになった。

「おつと、アイシールド21選手、ついに空を飛んだ、上空を飛ばれては相手の選手は届かないく！」

そのままタッチダウンかと思われた時、知将ヒル魔がニヤリと笑つた。

「フツ、アイシールド21、お前が空を飛ぶことは…予想済みだぜ!、やれい阿含!」

「おつしやあ！任せろ…かゝめゝはゝめゝゝゝ」

「おゝつと、これは阿含選手の必殺技「かめはめ波」だあゝゝ！」

「波あゝゝゝ!!!」

「で、撃墜された所で目が覚めたんです」

「ニヤハハハハ、その夢オモシレゝ」

「昨日見た夢の内容を語ったセナに猫山君が笑い転げている。

「…小早川、お前、なんちゆう夢を…しかも負けてるし」

「そうなんですよ、次の秋大会で負ける夢なんて縁起でもない夢でしたよ」

「いや、その前に空を飛ぶって…」

「夢ですから、夢」

「まあ、そう言っても、試合の影響を受けた夢だな、小早川があれだけランで止められたのは初めてだろうしな」

「そんなことを話している間にも部室に続々と集まってくる部員達。

「はは…示し合わせたワケでもないのに皆来るねえ」

猫山が苦笑いしながら言った。

「居ても立ってもいられないのさ、僕もそうだからね」

高見がそれに答え、一拍置いてから尋ねた。

「……………桜庭は？」

「桜庭は昨日はジャリプロのイベントだそうで、今日はまだ来ていませんね」

高見の問いに同じクラスの石丸が答える。

「……………そうか」

高見はそれだけを言って目を伏せて考え込んでしまった。

「せつかく来たんだ、練習はしないまでもミーティングをするか」
雲水が雰囲気をかえるように言い、ミーティングが始まった。

ミーティングも終わり、始業ベルが鳴るまでもう少しという頃、ドアが勢い良く開いた。

「遅くなりました」

入ってきたのは桜庭だった。

「遅くなりましたって、今日は別に無理してこなくても…つつつ!!!」

挨拶した桜庭にツッコもうとした猫山が言い終わる前に絶句した。

「来たか桜庭、今日は朝練がないから部室に来る必要はなかつ…」

TA」

猫山の次に桜庭に声を掛けた高見も同様に絶句する。

そこにいた部員全員が二人同様に言葉を失っていた。

何故なら、桜庭春人の見た目が大きく変わっていたからだだった。

桜庭の髪型はいつもの流行のお洒落な髪型ではなく、坊主頭だった。

「…さ、桜庭」

高見がなんとか声を絞り出して問う。

「はい」

「お前、その頭は？」

「見ての通り剃ってきました、一昨日の試合は俺のせいで負けたようなものだからね、坊主にしたぐらいで責任が取れるとは思っていませんが、ケジメってやつです」

頭を撫でながら迷わずに朗々と話す。

シヤリシヤリと小気味の良い音がする。

「そ、そうか…しかし、そんな頭でモデルの仕事はどうするつもりなんだ？」

桜庭の頭を見た時点である程度の予想がつきながらも高見は問うた。

「廃業届け、出してきました、ファンには昨日イベント会場で土下座してきました」

という、高見の予想以上の答えが返って来た。

しばらくはアメフトに専念するという決意だけでなく、行動済であることに驚いた。

(…桜庭の奴、完全に逃げ道を絶っている、自分の信じた道を進む為に他人に疎まれることを恐れていない、今までとは覚悟の量が違う…あ

の状態からよくここまで…)

高見は首を振って途中で考えるのをやめた。

それよりも今の桜庭に声をかけたかった、ずっと言いたかったことがあるのだ。

「…そうか」

高見は立ち上がり、桜庭に寄って行って肩をバンバンと叩いた。

「桜庭…とうとう来たな、俺はこの日をずっと待っていた…三年間ずっとだ」

おまけ

桜庭の坊主頭に驚いていたのは部員全員ではなく。

「桜庭は何か変わったのか？」

進だけは気付いておらず、さっきはただ黙っていただけだった。

25th down 漢の選択

話は一昨日の夜へと遡る。

試合後、部屋で一人落ち込む桜庭に会いにやって来たのは…金剛雲水だった。

「ど、どうしたんだ雲水、こんな時間に？」

「うん、迷っているお前に渡したい物があったな」

動揺する桜庭に対し、いつも通り淡々と話す雲水。

「わ、渡したい…物？」

明後日学校で会うのにわざわざ来た雲水に怪訝な表情になる桜庭。

「ああ」

そう言うとき雲水は、何か入った紙袋を差し出した。

「…」

ベッドに腰掛けたまま、とりあえず両手で受け取る桜庭。

「軽いな、木？」

軽く振ってみるとカラカラと音がした。

「中に二つ入っている、片方だけ受け取ってくれ…そして、選ばなかった方は…捨ててくれ」

「あ…うん、わかった」

試合でのショックで思考停止状態の桜庭は、ほとんど反射的に返事をした。

「それだけだ…じゃあな、また学校で会おう」

そう言うとき雲水はさっさと帰ってしまった。

「……なんだったんだ」

結局最後までベッドから立ち上がることがなかった桜庭、見送る気力すら今の彼にはなかった。

とりあえず中を見てみようとき袋を開け、逆さにすると中から表札くらの大きさの木の札が二枚出てきた。

木札には文字が書いてあり、それを読んだ瞬間、桜庭は全身に鳥肌が立った。

それぞれの札にはこう書かれていた。

【アメリカンフットボール】

【モデルの仕事】

思わずベッドの端に逃げてしまう桜庭。

混乱した頭を抱えてうずくまってしまった。

「……………ううう……………」

恐怖の表情で低い呻き声をあげる桜庭だったが、

「うわあああ~~~~!!」

自身も気付かずにいつの間にか悲鳴をあげていた。

雲水がさつき言った言葉が頭をよぎる。

（中に二つ入っている、片方だけ受け取ってくれ、そして、選ばなかった方は…捨ててくれ）

選ばなかった方は捨ててくれ

捨ててくれ

どちらかを。

唐突に試合中の一休の言葉が鮮明に蘇ってくる。

（いいか、アメフトの神様、いや、仏様はな、なんもかも捧げねえと何一つ与えてはくれないんだよ、生活の全てをアメフトに捧げて初めてたった一つのことを成し遂げられるんだよ、そうしないと何も得られない、お前みたいにモデルの仕事をしながら女の子にキヤーキヤー言われてついでにアメフトするような奴には特にな）

一休の言っていたことが今ようやく身に染みてわかった。

（雲水の贈り物と、一休の言っていることは同じなんだ）

更に一休の言葉が勝手にどんどん思い出してくる。

ハーftimeでの一休の説教は、聞いてはいたが、そんな本気で暗記しようとしていたつもりもないのに、一言一句誤らず正確に憶えていた。桜庭本人には自覚はなかったが、一休が言った言葉は彼の心に深く刻みつけていた。

（自分が凡人であることを自覚しているくせに、モデルの仕事とアメフトを両立させてやっていけると思っている事そのものが、アメフトをナメてんだよ、さらにそんなどっちつかずの中途半端で、俺と戦えると思ってること事体、俺をナメてんだよ、いいか……………）

一休の言葉をBGMのように思い出しながら桜庭は思った。

(雲水:そういうことなんだな:俺に:選べと:そして、どちらか捨てろと)

桜庭はゆっくりと這うように床に落ちた木札に近づいて拾うとテーブルに並べて置いた。

そして、正座して座ると真上から睨みつけるように二つの木札を凝視した。

(俺がこれからやらなきゃいけないこと:ヒントはあったんだ、一休の言葉とか、それを雲水は形にして示してくれた:でも、俺に選べるのか:)

30分経過。

桜庭は微動だにせず汗をダラダラ流しながら木札を睨み続けている。

(え、選べない!!!)

心の中で彼は悲鳴をあげていた。

(正直、アメフトを辞めるなんて考えもつかない、そんな選択考えたくもない、じゃあモデルの仕事を辞めるしかない:でも、モデルの仕事だって大事だ、そもそも始めたのはマネージャーがスカウトしてくれたからだけど、俺自身の意思でやると決めたんだ、それをこんな中途半端なところで辞めるなんて、俺に言えるのか?言う資格があるのか?ならアメフト辞める?いや、それはない)

桜庭はさつきからずつとこんな思考で無限ループをしていた。

「このままでは埒があかない、考え方を変えよう、この選択は俺の一生を左右する人生の分岐点かもしれない気がする」

桜庭は正座していた足を胡座に変え、腕を組んで考え始めた。

「一生の問題となると、そもそも俺はいつまでアメフトが出来るんだろう、高校は当然だが:大学は:やってるだろうな、ならその先は、社会人になってやっているかといえば、就職先がアメフト部のある会社ならやってるだろうと思うが、プロに行くというのは俺にはいくらなんでも現実的ではない気がするのでこんなところか、アメフトは運動

量が激しいので選手の寿命はそんなに長くない……一生の問題として考えればモデルやつてるほうがマシか、タレントに転進して芸能界に入れば一生食いつぶぐれはないし……じゃあこっちか！」

そう言うとき桜庭は「モデルの仕事」の方の木札に手を伸ばした。

しかし、手に触れる直前にピタリと止まる。

「いや待て……待てよ俺、こんな安易な考えで選んでしまったら一生後悔する気がする」

伸ばしていた手を戻すとまた腕を組んで唸り始めた。

更に一時間後。

考えがまとまらず、堂々巡りを延々と繰り返していた。

そしてそのうちに、今日は試合で疲労困憊し、精神的にも落ち込んで飽和状態だった桜庭の心につきか妥協する考えが芽生え出した。どうしても選ばなきゃいけないの？

（雲水はどっちか選べって言ってたけど、別に選ばなくたっていいんだ、適当に楽しく部活をやって、楽しくモデルの仕事をして、俺もマネージャーもファンもみんな幸せに過ごして、誰も辛い思いもなくて、何の悩みもない、苦しみもない、それは幸せってやつじゃないか……そうだよ、ファンやジャリプロの人達の思いを踏みにじってまで苦しい思いをする必要がどこにあるんだよ……俺は今ここで何も選ばないだけで、幸せな人生を手に入れられるんだ、高見さんや雲水だって、俺が真剣に考えて出した答えなら認めてくれるハズだ、天才になんて勝てないんだから、身の程を知ってわきまえただけ……それでいいじゃないか、そんな選択肢だってあるさ）

水は低きに流れるように、思考も低きに流れ易い、そのほうが楽だから。

だがその実の半分は思考放棄であることに気付かない。

何でも一人で抱え込んで悩む人間は一度低く流れ出した思考の修正がきかない。

しかし、そうでない場合、修正がきく場合は、その人間は一人では

ない。

そんな選択肢だつてあるさと考え、少し心が軽くなつた次の瞬間に心に浮かんだのは、

セナの姿だつた。

(なんでここでセナを思いだすんだ?)

桜庭自身にもどうしてセナが心に浮かんだのかわからなかつた。

今日彼が見せたプレーの数々がビデオ映像のように次々と思いついてくる。

(さつき一休の言葉を思い出したのも意味はあつた：ならばセナのプレーを思い出したのも何か意味があるのかもしれない：少し考えてみよう)

相変わらず木札を見つめたままだが、腕を組んで考え出した。

少し冷静になつて考えてみると、疑問点が浮かび上がってきた。

(あの最後のプレー、セナはどうしてあんなボロボロだつたのに出場したのだろう、交代を告げた監督を説得してまで：どうして?)

疲労と絶望から煮えていた頭が少しずつ冷えてきた桜庭はゆつくりと順序だてて考えていく。

(俺が見たつて無茶だつたのはわかるくらいだ、セナがわかつてないはずがない：もし怪我なんかしたらアイツは将来プロになれるかもしれないくらい有望なのにそれを棒に振るような……)

自分はたつた今将来のことを計算してモデルの仕事を取ろうとした。

だが今日の試合のセナはこの先のことだつてわかっているはずなのに出場を強行した。

…つまり

「……………そんなことはどうでもよかつたのか?」

頭に湧き上がってきた答えらしきものに困惑する。

「でも、そんな…その場限りの感情に任せた迂闊な選択じゃないか…賢明じゃない」

それを必死に否定しようとするが、自分の中の何かが出てきた答え

を肯定していた。

「…セナとは知り合ってそんなに経っていないけど、彼はそんな迂闊な判断をする人間とは到底思えない…ならば、この答えは合っているのかな？」

でも何がどう合っているのかわからない、後少しで納得する答えに辿り着けそうなのに届かない。

もどかしい思いに頭を掻き毟る。

「頭で理解することと心が納得することは違うということなのか…」

更に時間が経過したが、未だ納得できる答えには至っていないかった。

「何が正しいんだろう？…答えって何だろう？…真実って…一体何なんだろう？」

胡座をかいて座って考えていたが、とうとう後ろに倒れこんで大の字に寝転がった。

「…わかんねえよ……………」

そう呟き、そのままうつらうつらとうたた寝をはじめた。

そんな中で桜庭は夢を見た。
旅をする男の話。

（あ、この夢覚えてる…子供の頃に読んだ絵本だ…確かタイトルは…「エルドラドの旅人」だったっけ？）

明晰夢というやつなのだろう、自分が夢を見ているということを感じているが、その時はそれを疑問とも思わずに夢の続きを見ている。

くエルドラドの旅人く

いつかどこかの時と場所。

理想郷エルドラドを探して放浪する旅人がいました。

エルとは国。

ドラドとは黄金。

そこは全てが満たされた国。

争いもなく、苦しいことも悲しいこともない。

人々は笑いさざめき、暖かく穏やかな日々を享受している。

そんな国があるはずだと旅人は信じ、放浪を続けていました。

だが一向に見つかりません。

どこに行こうと争いは絶えず、人々の顔は暗く、世界は残酷でした。

それでも旅人は諦めず探し続けていました。

そんなある日、旅人は一人の男と出会いました。

長い銀髪の不遜な態度の若く美しい男。

その男は旅人の目的を聞くと、鼻で笑ってこう言いました。

「はっ、そんな都合のいいモン、この世にあるワケないだろう！」

真っ向から否定されましたが、それで諦める旅人ではありませんでした。

銀髪の男の言うことに揺るがず、理想郷の存在を信じていました。

男と別れ、旅人は放浪を続けます。

エルドラドを探して。

探して

探して

見つからず、挫けそうになるも

それでも探して

旅人はボロボロになりながらも放浪を続けましたが見つかりません。

ある雨の日、疲れ切った旅人は、這うように進んでなんとか大きな

木の下に辿り着いて身体を休めます。

疲れた旅人は止まぬ雨を見つつ、とうとう思ってしまう。

あの銀髪の男の言うとおり、理想郷などないのではないかと。

だがすぐ否定します。

「そんなはずはない、もしそうならば、この世は絶望しかないではないか、希望はあるはずなのだ、人には必要なのだ、なければならぬのだ、

だ」

雨空に向かい、大声で叫ぶ旅人。

旅人は天に向かって放った叫びだったのに、驚くことに返事がありました。

「それで、見つかったかい、理想郷は？」

旅人が休んでいた大木の木の枝に腰掛けてそう言ったのは、以前出合った銀髪の男でした。

旅人は疲れていましたが氣力を振り絞って言い返しました。

「まだだ、だがないのではない、未だ見つかっていないだけだ」

それに対し、銀髪の男は以前と同じように不遜で皮肉めいた顔と口調で言います。

「理想郷ねえ…それってつまり、争いは全く無く、全ての生き物が平等な世界ってことかい？」

そう尋ねる銀髪の男に旅人はそうだと肯定します。

それを聞いた銀髪の男は、不遜な表情が消え、憐れみの表情になると、こう言いました。

「もし、そんな世界があつたとしたら、そこに住んでいるのはもう…人じゃあないよ」

言われた事の意味がわからない旅人に、銀髪の男は続けて言います。

「君はさあ、自分の愛する家族と、会った事も無い大地の裏側にいる人殺しを平等に公平に見ることができるのかい？出来るわけないよね、極論すればつまりそう言うことさ」

旅人は絶句し、何も言えませんでした。

「愛する人には幸せになつて欲しい、他の人よりも…それって言い換えれば差別なんだよね、平等なんかじゃない、人間の根本には「愛」があるのは認めるけど、愛があるからこそ争いは生まれるのさ」

「つまり、完全な平等ってことは、人間が愛を捨て去らなければ実現不可能なんだ」

「矛盾しているんだよ、理想郷の存在そのものが、だって…人間の愛は…壊れているんだから」

「…はっ！」

ここで桜庭は目が覚めた。

「うたた寝しちゃったか…しかし、今の夢…」

起き上がって身体を伸ばす。

時間はもう深夜になっていた。

「なんであんな昔に読んだ絵本の夢なんかを…」

またその場で座り込んで考え出す。

「…俺が今悩んでいて出せない答えと似てたからリンクして思い出したのか？」

「結末なんだっけ？ 読んだの子供の頃だし、内容が小難しかったのでよく覚えてないけど確か…旅人が幸せになってめでたしめでたしで終わったような気がする……なんであの状態からハッピーエンドになるんだ？」

何とか思い出そうとまた立ち上がって部屋の中をウロウロする。

「駄目だ、思い出せない…くそ、今の俺の求めている答えのヒントになりそうなのに…あ！」

桜庭は走って部屋を出て行った。

「あの絵本、まだ捨ててなかったはずだ」

26th down 葦(あし)

「あったー！」

桜庭は物置を引つ掻き回して梱包されていた絵本を見つけた。
深夜にやる行動ではないが、彼は全く気にしていなかった。

檻樓を纏った旅人が果てしない道を歩いて行く後姿が表紙の絵本。

「子供の頃に読んだ時は、なんとなく流して読んで終わってたけど、これに何かヒントがあるのかな？」

部屋に戻ると、椅子に座って絵本を開く。

ペラペラとページをめくる。

「お、ここまでではさつき夢で見たな、続きは…と」

「平等で平和な世界なんて矛盾しているんだ、だって…人間の愛は…壊れているんだから」

それからも、旅人は放浪を続けます。

しかし、銀髪の男の言ったことが頭から離れず、徐々に気力が失われていきました。

今の旅人はただ、あてどなく彷徨っているだけでした。

この世界は何処に行こうとも何も変わりはないのだ。

理想郷とは夢幻なのだ。

届かないものを追ってどうする？

無いものを探してどうする？

何の意味がある？

行く先に希望が見えない旅人は、ついに倒れてしまい、

そのまま起き上がる気力も無く、意識が遠くなっていきました。

旅人が次に目を覚ましたのは、粗末なベッドの上でした。

近くにいた老農夫がたまたま旅人を見つけて介抱してくれたよう

でした。

「ああ、ここ思い出した、仲良くなつて農作業を手伝いながらしばらく一緒に暮らすんだ、ここはいいや」

桜庭はそう言うのとパラパラとページを捲る。

「このあたりだ、ここから先は全然覚えてない」

ある日、旅人と老農夫は諍います。

といつても旅人の一方的な、八つ当たりに近いものでした。

この世界に希望はない、どうせ死ぬのだから何をやっても無駄だ。理想郷が見つからないことからついそう言ってしまいます。

出来ればそうじゃないよと、理想郷はあるよと言って欲しかった。

それに対して老農夫はこう言いました。

「知っている」と。

絶句する旅人に老農夫は更に言います。

「でも、例え今日の終わりが世界の終わりでも、そして私が死のうとも、私は明日のために今日種を撒くよ」

老農夫は優しくそう言うと、いつものように農作業に出て行きました。

残された旅人は、呆然と座り込んでいました。

明日世界が終わっても、自分が死のうとも今日種を撒くなんて、無駄な行為じゃないか？

そう思いましたが、老農夫を見ているととても間違っているようには見えません。

長い時間そうやって動かずにいました。

そしてついに、旅人は悟りました。

老農夫の言葉と行動が自分の求めていた答えなのだ。

「理想郷などないのだ、あの銀髪の男が言ったように、この世に実現することなど不可能：だがしかし、近づけることは出来るのだ、目指す

ことはできるのだ、例え届かなくともそれに意味はあるのだ」

旅人はいつの間にか涙を流していました。

「理想郷とは探すものではなく、目指すものだったのだ！」

どうすればもっと良い国になるだろう？

こうすれば更に皆が幸せになるのではないか？

考えて、実行し、一歩でも理想郷に近づけることこそが重要だったのだ。

届かぬからこそ挑むのだ。

例え探した先に理想郷があったとしても。

例え魔人や聖杯という強大な力で理想郷を実現させたとしても。

そんなものに何の意味があろう。

より良い未来を目指して考え続けることこそに意味があるのだ。

その想いが人間をより良い世界へと導くのだ」

旅人は喜び勇み、立ち上がって叫びました。

「私はついに答えを得たぞ！」

真実とは、問い掛けることにこそ意味もあれば価値もあるのだ！」

答えを得た旅人は、生まれ故郷へ帰っていききました。

理想郷という決して届かない夢に挑むために。

おしまい

・
・
・

絵本を読み終わったが、閉じもせず呆然としている桜庭の中で、本の中の旅人とセナがリンクした。

点と点が繋がり、線となった。

「そうか…そうだったのか…自分の行いを問いかけ続け現状に満足せず進み続ける…それが「問い掛ける真実」か、それが、セナがやってきたことだったのか」

実際にセナがそこまで考えて動いていたかは別として、桜庭春人は彼の中で結論に至った。

目を閉じてパターンと本を閉じる。

「ならばオレは…」

床に転がる木札を見る。

「俺は……」

夜がうつすらと明けてきた、スズメの鳴き声が聞こえる。

「春人ちやくん、マネージャーさんが来てるわよ」

母親が部屋まで来て呼ぶ。

「……つてくれ」

「えっ？」

聞き返す母親に今度ははつきりと、泣きながら叫んだ。

「帰ってもらつてくれ〜！」

そうはつきりと大声で言った彼の手には、

「アメフト」と書かれた木札がしっかりと握られていた。

そこから先の桜庭は行動が速かった。

子供の頃使っていた家にあつたバリカンで頭を剃り、帽子を被つてダッシュでイベント会場へ走つて行った。

剃つてる途中、入ってきたマネージャーが泡を吹いて気絶したが放置した。

会場ではジャリプロのファン感謝イベントが始まつており、客席の後ろから走つて現れた桜庭が舞台上に上がると、ファンから黄色い声援がとんだ。

だがその声援が止まぬうちに、舞台上で桜庭はいきなり帽子を取り、土下座した。

ファンから上がっていた大きな声援は、一瞬のうちに凄まじい悲鳴に取つて代わつた。

桜庭の坊主頭を見たファンの中には泡を吹いて倒れる者もいた。

そこで桜庭は全く飾らず、偽らずに正直に今の心境を吐露した。

「アメフトで勝ちたいからモデルの仕事は出来ない！ごめんなさい」と、床に額を擦り付けて叫んだ。

さつきまでの悲鳴から一転して、水を打ったように会場は静まり返る。

土下座の体勢のまま桜庭は思った。

(何の説明にもなっていない、ただ俺がワガママを言ったただけだ、石を投げられたって文句は言えない)

何十秒かの時間がそのまま経過する。

非難や罵声はもちろん、物をぶつけられることすら覚悟していた桜庭に返ってきたのは、

拍手だった。

パチパチパチ、と誰か一人の拍手が少しずつ広がり、会場全体の大きな拍手となっていた。

「えっ?」

驚いて顔を上げる桜庭。

「桜庭君のやりたいことなら応援する」

「丸刈りもカツコイ」

「モデルじゃなくなっても桜庭君を追っかけるよ」

「ワイルド系もステキ」

「試合応援に行きます、がんばって」

真つ正直で飾らない態度が良かったのか、ファンには概ね好意的に受け入れられた。

「あ、ありがとう」

立ち上がり、呆然としながらも礼を言う桜庭。

ここは暖かった。

この場所が、この仕事で自分は実は結構好きだったことがこうしているとわかった。

だからこそあまり長居してはいけないと思った。

甘えてはいけない。

何度も礼を言うと、舞台袖ではなく客席に降り、来た道に戻った。会場を出ると、走り出した。

暖かく見送ってくれたファンを振り切るように。

「やってやる、やってやるぞ」

桜庭は走った、学校へ向かって。

「これ以上やったら死ぬってどこまでやってやる！」

回想終了。

嬉しそうに肩を叩いてくる高見に対し、桜庭は正面を向く。

「高見さん」

「ん、何だ桜庭」

桜庭は一呼吸置くと、はつきりと力強い言葉でこう言った。

「俺は……もう二度と負けません！」

必ず日本一のレシーバーになります、誰にも負けません！

細川一休にも！

鉄馬丈にも！

本庄鷹にも！

誰にも、相手が誰でも、必ず勝ちます！」

それは桜庭にとつての、誓いであり、決意表明であり、今までの自分との決別であった。

それからの桜庭は別人のようだった。

一番変わったのはその積極性だった。

今まではモデルの仕事もあり、皆と同じ練習時間ではなかったことからの遠慮からか、いまいち積極性にかけていたが、今ではランニングでは先頭を走り、一番大きな声を出し、倒れるまで動いた。

「じゃあ練習量を二倍にするか？」

気合の入っている桜庭に高見が言ってみる。

今でも充分に厳しい練習をしているのに倍というのは無茶だが、練習時間を増やしたり、内容を更に考えて密度を濃くしたりとやれることは沢山ある。

「望むところですよ！」

と、今ハイテンションの桜庭からそう返事が来ると思いきや違っ

た。

「二倍?…いや、三倍…四倍…いやいや、この際景気よく10倍にしましよう!」

と、真顔で言ってきた。

「え?…ちよ…え、本気?」

マジな桜庭に流石に驚く高見。

「桜庭さん変わったなあ、ってゆうかはっちゃけすぎじゃね?」

と感想を漏らす猫山。

皆同意見だったが。

「変わった?何がだ?」

と相変わらず筋肉でしか見分けせず気付いていない人もいた。

おまけ

「おくい、この前の試合、雑誌に載ってるぞ」

部員の一人が買ってきたアメフト雑誌を部室で皆で見た時のこと。

「どうせ神龍寺ばつかだろ?」

「まあそうだけど、ウチも載ってるよ、あの試合は春大会のベストバウトだってさ」

「バウトって格闘技で使う単語じゃ…ってアメフトには逆に似合う表現だね、誰だこの記事書いた記者…熊袋って人か」

「セナは当然すごいページ割かれて特集組まれてるよ、なんかあだ名もついてる、熊袋記者がつけたのかな?」

「なんて?」

「えくとね、「閃光の騎士」だってさ」

「お、かっこいい」

「そうか、技だけじゃなくて人そのものにもあだ名をつけるのも効果的なのだな」

「高見さん、だからって部員全員のあだ名とかつけるのやめてくださいね」

「駄目か?」

「「いやです」」

ほぼ全員の部員がハモって言った。

「それですね、この雑誌であだ名がついているのがもう一人いるんですよ」

「へえ」

「それがこの試合で影のMVPと評価されている…石丸さんなんです」

「石丸が！…まあ、セナと阿含が相殺している間にかなり走ったからなあ、納得だ」

「いつの間にか結構な距離走ってたからね、石丸は」

「実はあのヒル魔が試合中唯一キレた相手だしな、石丸は」

「え、そうなの？」

「ああ、「テメーはジミすぎんだよ、走るなら事前に手え挙げろ！」ってワケのわからんキレ方してたよ」

「常時ステルスモード発動してるからな」

「で、どんなあだ名だ、「存在自体光学迷彩」とかか？」

「お前な…」

「いいいいいよ〜」

「よかったな石丸、異名がつくとはこれでお前も目立ってるぞ」

「う…うん、そうだね」

「で、なんてあだ名なんだ？」

「えくとね…「幻の12人目」だつてさ」

「……………」

「……………」

「……………石丸さんって、スタメンレギュラーだよね」

「いいいいいよ〜」

セナはその雑誌の片隅に載っている記事を偶々見つけて驚いた。

NASAエイリアンズ、来日をドタキャン

「これって…春大会で勝ち残っているヒル魔さんが画策するわけないし…じゃあパンサー君はどうなるんだろう？」

27th down そうだ大阪へ行く

春の関東大会が神龍寺の優勝で幕を閉じ、西の優勝チーム帝黒との東西対決が決まっていた。

セナが医者から全力で走ってもよいと許可が出てから数日経過したある日の夜。

自室で寝ていたセナは真夜中に何か気配のようなものを感じてふと目が覚めた。

目を開けると、枕元に悪魔が立っていた。

「いゝっー！」

声を上げる前に悪魔に口を塞がれた。

(…つて、ヒル魔さんじゃないか！)

ヒル魔の容姿は尖った髪に裂けた口、薄明かりの室内で悪魔と間違えても無理は無い。

ヒル魔はセナが自分を認識したのを察すると手を放した。

「おはようセナクン、目が覚めたかい？」

ヒル魔はいつものようにケケケと笑っている。

釣り上がった口角は正に悪魔のようだった。

「お、おはようございませすヒル魔さん」

とりあえずなんとか挨拶した。

何故こんな時間にセナの部屋にいるのか？

セナが疑問を口にする前にヒル魔は、

「じゃあ……行くこうか」

とだけ言った。

「へっ？」

と言うしかセナには出来なかった。

車は西へ時速180キロで走っていた。

運転しているのは阿含さんの知り合いらしい女性。

乗っているのは僕と、僕を問答無用で連れ出したヒル魔さん、何故か阿含さん、まもり姉ちゃん、鈴音の計6人。

何の説明もないまま、あれよという間にこうなっていた。

最初はヒル魔さんは僕と二人で行く予定だったらしいが、どこから知った阿含さんが強引に参加し、その阿含さんからのメールでもり姉ちゃんが知って急遽乗り込み、そのまもり姉ちゃんが今日の練習休むことを伝えておいてという意味でしたメールを受け取った鈴音が速攻でやってきて参加してこの面子。

小型のバスのような車で座席が3列あり、2列目を後ろ向きにして3列目と向かい合うようにして運転手以外の5人が座っている。

どうやら大阪へ向かっているらしい。

「で、そろそろ教えてくれませんかヒル魔さん？」

と、まもり姉ちゃんが聞いた。一応笑顔だが声が硬いしコメカミに青筋がビキビキ立っている。

僕が誘拐同然に連れ出されたことに半端なく怒っているようだ。

今はなんとか抑えてはいるようだけど。

「あ？」

「どうしてこんな暴挙を？」

「別にテメーなんざ呼んじやいねーよ」

「私じゃありません、セナのことに決まってるでしょ！」

まもり姉ちゃん、抑えきれず叫んだ。

ヒル魔さんとは相性悪いのかな？

「ちよ〜とやってほしいことがあってな」

そう言ったヒル魔さんは僕を見てビシッと指差し言った。

「セナ、オマエちよ〜と帝黒のエースである大和猛にケンカ売って来い！」

「……は？」

僕とまもり姉ちゃんの声がハモった。

ちなみに鈴音はこういった旅行が大好きなのか、何かや〜や〜歌いながら超ハイテンションで外の景色を見ている。

阿含さんは運転手の女性と何やら話をしている。

どうやらこの車の持ち主らしき女性、大阪へ行くから東京まで来いと長野から呼び出されたらしい。

これを知ったまもり姉ちゃんはすぐ恐縮して礼を言っていたが、この女性本人は「ワハハ」と笑って気にもしていないようだった。意味がわからず声も出ない僕とまもり姉ちゃんを尻目にヒル魔さんは続ける。

「もうすぐウチと帝黒の試合があるだろう？データは集めるだけ集めたんだけど、エースの大和猛だけは関西大会でもただの一度も本気を出してねーんだよな。」

だから、奴の本気を見てみたい、それも生で…となると本気を出させる奴が必要になる、関西にはどうやらいねえ、ウチの阿含をぶつけてみすみす敵にこっちの情報を与えるのは嫌だ…

…つてことになるよ、消去法でセナをぶつけるしかないってわけだ、お解かり？」

言い終わるとヒル魔さんは足を組みなおして座席に深く座り、ガムを噛みはじめた。

まあ、理屈は分かるけど納得できるかと言われれば無理っぽい、でもなんか…ヒル魔さんらしい自分勝手な理由だなあとはい、それほど腹も立たなかった。

まもり姉ちゃんを見るとそうは思わなかったようで、拳をひざの上で握り締め、下を向いてブルブル震えている。

自分勝手に他人に迷惑をかけることを屁とも思わない。

これはまもり姉ちゃんが最も嫌うタイプの人間だ。

案の定、まもり姉ちゃんは鋭い目でギリつとヒル魔さんを睨みつけると叫んだ。

「あ、あなたねえ…私のセナを何だと思ってるの！」

「は？」

私のつて…まもり姉ちゃん。

「はっ…私つたらつい…え、えと…じゃなくて、ウチのエースを何だと思ってるんですか！」

まもり姉ちゃんは慌てて言い直した。うん、ただのいい間違いだよ、ね、驚いた。

「ほれ」

と、激昂するまもり姉ちゃんにヒル魔さんがしれっと一枚の紙を出して見せた。

「え、何これ…誓約書？」

目の前に出された紙を読んでまもり姉ちゃんが驚く。

僕も見ている。

「えーと…『どのチームが関東を制しても他のチームは全国制覇に協力する』ってか、あ、高見さんのサインがしてある」

そういえば泥門時代は秋大会後に皆が練習に協力してくれてたけど、ここのヒル魔さんは春大会からこれやってたんだ。

「…だ、だからと言って、セナの人権は？」

「知らん、ケケケ」

なんとか抵抗しようとするまもり姉ちゃんにヒル魔さんは誓約書をヒラヒラとかざしながら言う。

「むう〜〜」

ほっぺたをふくらませて誓約書を睨んでいたまもり姉ちゃんに、

「まーまー」

と阿含さんがナンパ用の白阿含笑顔で宥めていた。

「エガオキモチワルイ…．．あたた」

それを見たハイテンションの鈴音が阿含さんを指差して言ったが、言い終わる前に阿含さんに顔面をアイアンクローされていた。あたたで済むということは阿含さんは本気で掴んではないのだろうか。

「えい」

と、その隙にまもり姉ちゃんが目の前のヒル魔さんの手にある誓約書を奪い、ビリビリに破いてしまった。

まもり姉ちゃん、曲がったことが嫌いなのにずいぶん子供染みたことするなあ。

「ほほほほほ、これで証拠はないわ」

高笑いするまもり姉ちゃんに、ほんの一瞬も驚かなかったヒル魔さんは次の瞬間、両手から10枚近い誓約書を手品のように一瞬で出して見せた。

「ケケケ、どーした？まだ何百枚もあるぜ」

「むむ、もう！」

してやったりのヒル魔さんと、地団駄を踏むまもり姉ちゃん、二人を見て僕は思った。

「うーん、やっぱりこの二人って相性悪いよね」

この呟きに鈴音が答えた。

「だね、まも姉えが許せないタイプを具現化したような人だもんねあの」

セナと鈴音がそう納得している隣で、全く別の感想を持った男がいた。

金剛阿含である。

阿含は思った。

(アレ？コイツらひよつとして…相性よくね？)

喧嘩している様にしか見えない二人だが、ナンパ経験の多い阿含にはその裏というか先が見えていた。

(確かにセナとこのフシギ生物の言うように相性はよくねえだろう、オレの集めてきた情報でも姉崎は不良を嫌う、ヒル魔は正にそれに合致する。)

だが俺は知っている、ヒル魔はアメフトにだけは誠実な男なのだと、その誠実な部分を姉崎が見てしまったら……

裏返る！嫌悪が好意に裏返っちまう。

不良だと思っていた奴が実は誠実な人だった…こう思わせることが出来ればそのギャップでほぼその女は落ちる。俺がよくナンパで使ってきた手口だから間違いないえ。

これはオレの「思いがけない一面作戦」そのものだ。

普段は素行の悪い乱暴者だが、誰も見ていない所…標的の女が見ているのは確認済…で捨て犬に傘を差してやったり、ごみを拾ったりしてあの人は不良みたいだけど実は優しい心を持っているのねと思わせる俺の得意作戦。ヒル魔はそれを意識しないでやってやがるんだ。

…マズイ、マズイぞ、ほんのちよつとの切っ掛けで姉崎はヒル魔に転ぶ！)

まもりとヒル魔がカップルになる可能性に気付き、阿含は本気で

焦っていた。

(なら潰してやるぜ、そんな可能性、これ以上一步も進展なんかさせねえ)

阿含は決意も新たにニヤリと笑った。

そもそも阿含が来たのはまもりをナンパするのが目的だ。

ヒル魔がセナを連れて大阪へ行くという情報を得ると、雲水から強引に聞き出していたまもりの携帯番号へ掛け、それを知らせてままとまもりを今回の旅に参加させることに成功した。

(ここは俺も大和猛と勝負した方がいいのか？セナを庇うという点で間違いなく感謝されるだろう…それをありがとうで終わらせない為にももう一押し何か…)

こちらの情報は出したくないというヒル魔の思惑なんぞ知ったこつちやない阿含はこれからの予定を考えていた。

そんな阿含を見て鈴音が一言。

「酷く悪い顔してるね」

それに対しヒル魔が、

「ああ、よくこうなるんだ、ほつといてやれ」

と、フォローにもならないことを言っていた。

パーキングエリアで休憩中、まもりは車を離れ、事情を説明するために庄司監督に電話していた。

車に戻ってきたまもり姉ちゃんに声をかける。

「どうだったまもり姉ちゃん、庄司監督は何て言ってたの？」

「うん、それがね、ちょうどいいから帝黒を偵察してデータ取ってこいって言われたわ」

「じゃあサボったことにはならないね、よかった」

「そうね、セナもレベルの高い西側のプレイを勉強してくるといって監督がおっしゃってたわ、後くれぐれも無理はするなって」

「うん、わかってる」

その会話を聞いていたヒル魔さんがからかう様に口を挟んだ。

「へえ、何でいるのそんなデータ、キミたちには関係ないよね」

からかわれていることを瞬時に察したまもり姉ちゃんは、キツとヒル魔さんを睨んで言い返した。

「秋に必要なになりますので」

睨み合う二人。

といつても片方は笑っているが。

（だから喧嘩すんじゃないやねえよテメーらわよ、後で裏返った時の反動がでかくなるじゃねーか！）

阿含は一人焦っていた。

セナはそんな皆を見ながら一人考えていた。

（大和くんか：久しぶりだな、進さんに相手してもらおうかと思っただけど、ちよūdいいいや、試してみたい技があったんだ：もう決めたんだ、出し惜しみはしないって、確かに技を見せてしまうと相手に対抗策を取られてしまう、でもいずれ見られてしまうものだ、それに相手に選択肢を増やすことで駆け引きに使うことも出来る、デメリツトばかりを見ているは進めない、まあそもそも大和くんは初めて見た技でもその試合中に対抗策を考えて即実行出来るんじゃない人だから出し惜しみしても関係ないんだけどね：それにしても）

セナは走り出した車の座席に深く座ると、「んふ」と堪えきれずに少し笑った。

（大和くんと戦える：面白くなってきたなあ）

車は帝黒学園へ向かう。

車は帝黒学園の校門前に到着した。

「ここって通天閣のすぐ南じゃないですか、帝黒学園ってこんなところにあったんですね」

階段の下から校舎を見上げてセナが言った。

元スパワールド世界の大温泉の入り口の階段を昇降口とし、ホテルや温泉施設が校舎、グラウンドが天王寺動物園と周囲一帯の必要な施設を買い取ったのが帝黒学園だった。

「じゃ、どっか行ってる阿含」

さらつとヒル魔が言う。

阿含を帝黒に見せたくないのだからセナを連れてきたのだからそういう言うのは当然だろう。

「姉崎さんが街を案内してくれるならいいぜ」

と阿含が当然のように返す。

ヒル魔にそう言われてあっさり承諾するくらいならそもそも一緒に来ていない。

「私は監督に偵察してこいって言われているので無理です」
(だろーな)

即答で断るまもりに心中で納得する阿含。

まもりの返答は阿含も予想していた。

では次にどうするか？

阿含の脳内で選択肢が表示される。

①「そんなこと言わずにさ、カニの美味しい店知ってるんだ、行くよ」と更に誘う。

②「しよーがねーな、一つ貸しだぜ」とヒル魔の言う通り大人しく去る。

③「俺も戦うぜ」と残ってセナと一緒に大和と戦う。

④「ここは俺に任せて行けセナ」と言って一人で大和と戦う。

(その辺の女なら①で充分だろう、しかし姉崎は雲水に匹敵するほどクソ真面目のようなので間違いなく断られる上に俺の好感度も激減

する、駄目だ。

②だと何しに来たのかわからるので問題外と。

③だと間違いなく好感度アップだが正直メンドクセエ。大体なんでも俺があんなチビカスバケモンと組まなきゃならんのだ、これもなし。

④は③より更にメンドクセエが姉崎が俺だけを見てくれる点が美味しい。セナを助けたことで感謝もされる、これか。

：超やりたくねえが、高く飛ぶ前にかがむのだ。今は耐えるのだ俺、あんな上玉滅多にいねえ、今でもその辺のグラビアアイドルよりいいスタイルしてるのに後数年もすればすげえ美人に成長するのは間違いない。あの女をゲットするためには打てる手は全部打つぜ、答えは④だ)

まもりが即答してからここまでの阿含の思考時間は1秒足らず、相変わらず神速のインパルスの名に恥じない才能の無駄遣いをしていった。

「ここは俺に：」ねえ、おなか空いたんでちよつとその辺ブラブラして来ていい?」

4番を選んだ阿含がまもりを意識してキザッぽく言い始めたのを被せるように言ったのは鈴音だった。

大阪へ来たのは初めてだったのか、車の中よりもテンションが高い、ウズウズしているのかその場で足踏みしながら今にも飛んでいきそうだ。

「鈴音ちゃんお腹空いてたの?でも一人じゃ危ないんじゃないかしら、新世界の中でも通天閣付近は明るい雰囲気なので大丈夫っぽいけど、あの道幅の狭いアーケード通り、南陽通商店街って言う所はちよつと怖くない?」

まもりが鈴音を心配して言う。

「全然大丈夫だよまも姉え、ジャンジャン横丁って言われててレトロな雰囲気観光客を集めて家族連れとかも来てるんだよ」

車内で携帯で調べてたのか既に行く気満々な鈴音。

実際は一人でアメリカに行つて兄を探して放浪するくらいの気概

を持った娘なので大阪の街くらい全く問題ないのだが。

「だからって一人で行くのは…」

そんなまもりと鈴音のやりとりを聞いていたヒル魔だが、何かピンときたのか口を挟んだ。

「確かに一人じゃく危ないな、誰か付き添ってくれる親切な人いないかなー」

と、わざとらしく言うのと露骨に阿含を見た。

全員が釣られて阿含を見る。

考えてみればこの中で暇なのは阿含しかいない。

阿含は全員の視線を確認すると大きく溜息を吐く。

「阿含さん…」

「いーよ、姉崎さん、今回は一つ貸しだぜ」

何か言おうとするまもりを制して阿含がヤレヤレという感じではあるがあっさり承諾した。

「あ、はい」

(なんだかんだで鈴音ちゃんの面倒を見てくれるみたいだし、貸しか言ってるのは照れ隠しみたいなものだろうから、思ってたよりいい人なのかな?)

と、まもりの中で阿含の好感度が上がった。

しかしこれはまもりから貸しを作るとい言わばヒル魔と阿含のコンビプレイだった。

当然打ち合わせなどしていないが、ヒル魔が無意味な言動をしないのは阿含はよく知っているのでヒル魔の露骨なセリフに意味があると考え、ベストのセリフを選択した結果だった。

(よっしゃあー結果オーライ、でかしたぞヒル魔あ、彼女から譲歩を引き出せるなんて来た甲斐があったってもんだ、これは大事に使わんな、ザコな奴ならデートしてくれとか言うところだろうが、俺は違うぜ)

面倒そうな表情をしていたが内心は大喜びな阿含だった。

まもりの方も貸しだと言われてあっさり引き受けたのは彼女自身の自己評価にある。

自分の評価が低いのだ。彼女は自分がどれだけハイスペックなのか自覚していない。

成績も学年上位だし、容姿は男子生徒の間で秘密裏に行われている王城美少女コンテストでトップ3に必ず挙げられるくらいなのだが、彼女は気付かない、気にもならない、それはセナがいたから。

小学生の頃から日本屈指の才能を見てきたまもりにとって、少々の成績の良さや容姿など彼の圧倒的な天才の前では如何程の価値も感じなかったのだ。

この関係は阿含と雲水に似ているが、性別が違った為に拗れなかった例といえよう。

更に周囲から自分に向けられる好意に鈍感であった為に今回のような安請け合いをしてしまったのもある。

「えくと、鈴音だったな、何か食いたいのあるか？」

「カ〜〜ニ〜〜!!!」

二人は何か話しながらズンズン行ってしまった。

「じゃあ行くぞ」

二人を見送るとヒル魔達は帝黒学園に入ってしまった。

「おう、ヒル魔やないか、久しぶりやな、また偵察か？」

出迎えたのは帝黒アレキサンダーズの主将、ヘラクレスこと平良呉二だった。

「おう、来てやったぜ、プレイブックが更新されたそうだな、寄こせ」

当然のように手を出すヒル魔にまもりは苦笑いして、

「ヒル魔さん、いくらなんでもそれは…」

と言いかけたところ。

「ほいよ」

と、あっさりとヘラクレスは電話帳くらいあるプレイブックを渡した。

「え、いいんですか？プレイブックってチームにとって重要なんじゃない？」

尋ねるまもりにヘラクレスは手をぶんぶん振って。

「ああ、ええねんええねん、研究でも何でもしたらええねん、やれるもんならやつてみいつてゆうこつちや」

朗らかに答えるヘラクレス。

「それにな…自分の手の内は明かし、正々堂々と戦う…これが横綱の矜持つちゆうもんや」

「……」

「つて横綱つて相撲やんか〜い!」

誰もツツコんでくれなかつたのでセルフツツコミするヘラクレスだった。

「…は…はは」

「…」

圧倒されて愛想笑いというか苦笑いしか出来ないセナとまもり。

これどうするんだとヒル魔を見れば彼はスルーしてプレイブックをパラパラめくつて見ている。

ヘラクレスは何故かドヤ顔でこちらのリアクションを待っている。

そんな凍りかけた空気を救ってくれたのはこの場に響き渡った女性の悲鳴だった。

「あ〜〜!セ、セナ君やあ〜!」

と、奇声をあげながら走ってくる女生徒がいた。

スラリと背の高い髪の長い女性、知った顔だった。

「おお、花梨やないか、そう言えば花梨はセナ君のファンやったっけな」

「ええつ、何で知ってるんですか?」

「ブログで書いたやつたやないか」

「アドレス誰にも教えてへんのに」

「ブログ立ち上げて三分で見つけたで。次からは足跡残しといたるわ」

「う〜わ〜、見られてたんか、知られてたんか〜!」

ヘラクレスと花梨の漫才みたいなやりとりのおかげで凍りかけた空気は霧散した。

小泉花梨はアメフトどころかスポーツをやるようには全く見えな

い華奢で儂げな雰囲気を持った美人だ。

阿含がこの場にいたら、こんな美人のQBがいたのなら引き抜かれてやってもよかったなと思うだろう。

この二人のやりとりは見てて和むなあとセナが思っていると、花梨がハツと思い出したようにセナを見ると、カバンの中をぐそぐそ探りながらセナの前までやってきた。心なしか震えているように見えた。

花梨がカバンから取り出したのは色紙だった。

それを両手でセナに差し出すと、

「せ、セナく…小早川さん、ウチ、大ファンなんです、サインくださいやい」

と、大きな声で囁んだ。

「やあ、セナ君が来てるんだって？」

グラウンドに移動した一同の所に長身の爽やかなイケメンがやってきた。

「来やがったな、大和猛」

それを見たヒル魔がニヤリと笑う。

彼の本気を見てみたい。

そう考えてヒル魔が立てた今回の大阪遠征の目的がやって来た。

その大和猛はまっすぐにセナの前までやってくると、セナの手を取って笑顔で言った。

「始めまして、小早川セナ君、ボクは大和猛、会えて嬉しいよ」

歯がキラリと光るような爽やかな笑顔で挨拶した。

「始めまして大和くん、小早川セナです、お邪魔しています」

しっかりと手を握り返して挨拶を返すセナ。

もちろんセナの記憶の中では高校大学と何度も対戦している所謂戦友とも呼べる間柄だが、

ここでは当然そう挨拶した。

「ん？ところで花梨はどうしてあんなに落ち込んでいるのかな？」

「ああ、そつとしいたり、憧れのセナ君相手に囁んでもうてな」

「気にすることないじゃないか、相手に誠意が伝われば囁んだって問

題ないさ」

「…噛んだって言わんといて」

ズンと沈んだままの花梨、セナも気にしてないとフォローしていたが、そこは乙女的に恥かしかつたのかなかなか立ち直る切っ掛けがないようだった。

「そうか、わかった、言わないよ」

あっさりとな得する大和。

(この二人つてずっとこんな感じだよな、大和くんが空気を読めないのか読まないのかわからないけど微妙に会話の焦点というか立ち位置というか世界が違う感じがするな)

とセナは思った。

「さて、ヒル魔氏がわざわざ来たってことは偵察で対象は僕だね、そして僕に本気を出させるための相手にセナ君を連れて来たってことで合っているのかな?」

大和はあっさりとしてヒル魔達の大阪遠征の目的を言い当てた。

「ああ、まーな、でも別に俺に見せたくねーってんなら無理してやんなくてもいいぜ」

と、ヒル魔は大和に今回の目的を当てられてことに全く驚かずに軽く返した。

(あれ?いつものヒル魔さんならもつと過激に挑発したりするのにずいぶんあっさりしてるわね)

と、まもりが疑問に思うほどヒル魔の返事は普通だった。

だがこれはヒル魔にとって別に策でもなんでもなく、ただ結果が判りきっていたために余計なことを言わなかっただけだった。

「まさか、わざわざ来てもらったのに手ぶらで帰すなんてするわけないじゃないか」

大和は喜んでセナとの勝負を受諾した。

「でもね…まず僕に挑む資格があるのかどうか、セナ君を試させてもらおうよ」

「試す?」

「そう、ウチの四軍のQBである棘田氏と勝負して勝てたら僕が本気

でお相手しようじゃないか」

「……………なるほどね、いいぜ」

大和の提案に少し考えたヒル魔は納得したのかそれを受けた。

「それでいいな、セナ」

「うん、ぜんぜんおつけくだよ」

セナも気軽に受け、両チーム合意となり、フィールドの半面を使って勝負することになった。

ゲスト用のロッカールームでユニフォームに着替えている最中にセナがヒル魔に聞いた。

「ヒル魔さん、さっき大和くんの提案になるほどねって答えてましたけどあれはなんですか？」

「ああ、あれか、大和猛って男はな、いつ誰の挑戦でも受けるってマジで言ってる奴なんだ、こっちから挑戦してるってのに条件つける奴じゃねえ、セナの実力だって知らねえハズはねえしな、そう考えるとわかったんだ」

プレイブックを見ながら話していたヒル魔は顔を上げ、セナを見て言った。

「これはウォームアップだ、オマエの為のな」

「僕の？」

「そうだ、お前には肩慣らしさせ、ついでにさっきまで練習していた自分は一息つく、両者ベストの状態で勝負したいってことだよアイツは」

「そのとおりやヒル魔、ようわかつとるなあ！」

と言いつつドアを開けて入ってきたのはヘラクレスだった。

「あ、ヘラクレスさん」

「話は聞いたで」

「どこで聞いてたんだお前は」

「どこって、別にドアに耳当てて今のセリフを言うタイミングを計ってたわけやないで」

「計ってたんだタイミング」

「まーえーやん、まず4軍と戦えなんて言われて氣イ悪うしてへんかと思つてフォローに来たんやけど必要なかつたようやな」

「氣を悪くするわけじゃないですか、受けてくれただけでも感謝してるのに」

「そう言うてくれると助かるわ、大和の奴かてセナ君と戦うのめっちゃ楽しみにしとつてんで」

「神龍寺と王城の試合は皆で生中継を見とつてんけど、大和の奴前半はセナ君のプレーみて大はしゃぎでな、関東にはボクと互角に戦えるプレーヤーがいるんだ、本氣を出すに値する選手だよ彼はつてそれは嬉しそうでな」

「でも後半になったらな、君がああ後ろに下がるプレー、なんて言うんやったつけ？雑誌に書いてたな、フォースデイメンションやったつけをやつてからは黙つてもうてな、マジ顔でじーつと見てるだけになつたんや」

「動かんようになったんでどうしたんか聞いてみたらな、これを見ていなかったら自分もあの金剛阿含氏と同様に完璧に抜かれていたよつて言うんよ」

「互角？本氣を出すに値する？僕は増長していたよつて自嘲めいてあの大和が言うんよ、マジ驚いたわ」

「なのに王城負けてもうたやろ、チームとしては神龍寺の方が強いのは確かやけど、セナ君個人と戦えへんのは残念やつて落ち込んでつてな、今日尋ねてきてもらたんはホンマ嬉しかったと思うで大和は」

「いやー、それにしても今日はホンマに……」

ヘラクレスは聞いているセナやヒル魔が口を挟む間もなく立て続けてしゃべり続けた。

29th down 帝王 対 四次元の騎士（前編）

「僕が露払いをしよう、セナ君は心置きなく戦ってくれ」

ユニフォームに着替えてグラウンドに現れたセナに大和が言う。

フィールドに散らばる4軍に対し、セナと大和は二人で相対した。

「大和お！俺が勝ったら1軍って約束マジなんだな！」

棘田が叫んだ。

「もちろん、勝てれば…の話だけどね」

大和は迷い無く確信を持って爽やかな笑顔で断言した。

それを聞いた棘田はほくそ笑む。

（よし、やってやるぜ、確かにあの小早川セナはバケモンだ、ビデオで見たけど俺じゃあ勝てない、だが最初の1プレーのみならなんとか、4軍の俺の得意技なんざアイツは知らねえだろ、俺のローズウィップに初見で対応するなんて出来るワケがねえ、大和の奴舐めやがってみてやがれ！）

プレーが始まった。

大和は流すように走りながらも相手選手を圧倒していく。

あつという間にセナと棘田の一騎打ちの状態になった。

走りながらセナは思った。

（棘田さんって何年生だっけ？ 忘れた。確か以前に対決した時は彼が横っ飛びした瞬間にタックルが決まって僕が勝ったんだっけな、何か技名があったはずだけど…うーん…忘れた）

考えながらも体はいつも通り動いている。

前回とは比べ物にならないくらい上がった身体能力。

加えて二度目の対決。

パソコンが複数のアプリケーションを同時起動できるように、セナも豊富な経験と長期の訓練によっていくつもの別々な状況に対し同時に判断出来る様になっていた。

そんな彼にとって今見るのは棘田の動きのみ、自分の動きも走るルートも味方の動きも敵の動きも見なくてもよいのだから試合に較べれば非常に楽な状況だった。

過去の知識から横へ飛ぶだろうことは知っていたが、念のために相手の動きを確認する。

棘田の動きが走ろうとする動きではなく、飛ばうとするかのように重心が下がる。

これを見た瞬間、セナは猛烈なダッシュを開始した。

棘田が横つ飛びをしながらボールを投げようと腕を振りかぶる。

並みの選手ではこんな動きは出来ない、彼も伊達に帝黒に引き抜かれていないという証だった。

しかし、その振りかぶった腕にボールはなく、目の前にセナはいなかった。

「へ？」

棘田は状況が理解できずに声をあげる。

棘田がダイビングした瞬間にはセナは瞬時に距離を詰め、彼からボールを奪い、通り過ぎていた。

そして、彼がグラウンドに倒れた時にはセナは彼のすぐ背後でピタリと立ち止まっていた。

一瞬で勝負はついた。

「うわ…」

ヘラクレスが呻き声をあげる。

「生で見たらホンマすごいなカレ、速すぎるやろ」

「ああ、それに判断も的確だ、予想通り、いや、予想以上だよ」

そう言う大和は笑っていた。

だがそれはさっきまでの爽やかな笑顔ではなく、獰猛な戦う戦士の笑みだった。

そのまま息一つ乱さずに戻ってきたセナに声をかける。

「じゃあ…やろうかセナ君」

一方、鈴音と阿含。

「はっ、しまった、セナの応援に来たのに私は何してんだろ？」

鈴音がたつた今我に返ったかのように驚いて叫んだ。

「さんっさんカニ食べまくって今も口一杯に頬張りながら言うセリフじゃねーだろそれ」

阿含、テーブルに頬杖をついたまま呆れて言う。

二人はあちこちの店を渡り歩いて食べ歩き、今はカニの専門店を食べ散らかしていた。

「いや〜大阪は怖いね〜、見どころ多すぎ」

「まー食うだけなら東京にも築地とかあるが雰囲気なんか独特だな」

律儀に会話する阿含。

当然鈴音に対する好意ではなく、将を得んとすればまず馬からの諺に従ってここで鈴音の好感度を上げておけばコイツがまもりに伝えて結果的にまもりの好感度が上がるという計算によるものだった。

阿含にとって鈴音は女性ではなく、不可思議な生物であって人間ですらない。

「この後はデザートにたこ焼きと回転焼きと焼きソバかな？」

「それデザートじゃねーし、ってゆーかどうでもいいけどお前何しに来たの？」

阿含の一言に鈴音がピタリと止まった。

さっきまでのハイテンションが嘘のように静まり、下を向いてしまう。

「ん？」

鈴音の様子がおかしいのに気付いた阿含が頬杖をついていた顔を上げる。

しばらく停止していた鈴音はポツリポツリと言いはじめた。

「……やっぱり寂しいよ…応援しか出来ないって、ワガママだってわかってる…でもね、私はもつと…もつとセナと支え合って生きて行きたいって思ってるの、一方的に頑張れ〜って言うだけじゃなくて…もつと…もつと、頼ったり頼られたり、何て言えばいいのかわかんないけど…今回だっただけのこととしてないし…」

「……………」

阿含は自分に話すでもなく心情を吐露する鈴音を見ながら思った。(あれ?…コイツ、セナにマジで惚れてんじゃないか、俺みてーに恋愛はゲームだなんて考えてるんじゃない?…軽い奴かと思っただら中身は雲水並みの堅物かよ…いや、恋愛に関してだけはウブなだけか…)

鈴音は少しスッキリしたのか、下を向いたまま目だけ動かして阿含を見上げて言う。

「…だから私はあなたが羨ましいよ、フィールドの上でセナと解かり合えるなんて…」

「ハア?…解り合う?俺が?アイツと?」

鈴音の予想外の一言に全く理解できない阿含。

「うん、だって楽しかったでしょ?」

「楽しかねーよ、あんなバケモノチビ、忌々しいっいたらなかったぜ」
別に強がりでもなんでもなく、思ったことを阿含はそのまま口にした。

鈴音はそれを聞いてもまったく揺るがず、続けて言った。

「ふーん、でもさ、覚えてる?あの試合の最後のプレー…あの時、セナの動きを理解していたのって…あなただけだったんだよ」

「…」

絶句する阿含に鈴音は続けた。

「あなただけが、セナを理解できていた…それってすごいことだよ、すっごく羨ましかった」

鈴音は両の目でまっすぐ阿含の目を見て言った。

「……………」

阿含はそれを聞きながら、先日王城との試合後にヒル魔が言ったことを思い出していた。

「他の事が考えられないくらい集中出来たろ?」と。

「周りの雑音が消えて気持ちよかったろ?」と。

「それが「楽しい」ってことだ」

そんなことをヒル魔はいつものように笑いながら言っていた。

「…わかんねーよヒル魔、テメーの言うことはいつつもわけわかん

ねー」

阿含は静かにそれだけ言った。

「ねえ」

鈴音が阿含に呼びかけた。

「なんだ？」

「そろそろ戻ろつか、もういいと思うんで」

「もういい？まあいいだろう、このままいても気持ち悪いってゆーか
つまんねーしな」

心情を言いかけて状況をに言い直した阿含だった。

「戻るぞ、鈴音」

立ち上がって言う阿含に鈴音がにっこり笑って返事する。

「うん、ゴン兄」

「…あ、ごんにい？」

「呼びやすいし」

「やめろ、殺すぞ」

「まーたまた、照れちゃって」

「…駄目だコイツ」

二人は帝黒学園に戻るため、来た道を折り返した。

「二対一の勝負、セナ君がボールを持って走る、僕がそれを止める、それ
れだけだ、いいね」

グラウンドに立っているのはセナと大和の二人のみ。

「うん」

そうセナは返事をするフィールドの中央にボールを持って立った。
た。

大和はゆっくりと歩いて自陣の手前に立つ。

「さあ、いつでもいいよセナ君、僕を抜いてタッチダウンできれば君の
勝ちだ」

「…」

「…」

距離を置いて二人は無言で向かい合う。

そして、開始の合図も特にないまま、二人は同時にお互いに向かって走り出した。

「ボール持つてる方がディフェンスにまっすぐ向かって行くなんて、やっぱりセナ君…」

「普通やないな」

花梨の言葉にヘラクレスが続けた。

「まあ当然、アレ使うよな、出し惜しみしてる場合じゃねえし」

「フォースディメンション…でしたっけ、大丈夫かなセナ」

ヒル魔とまもりが並んで見ている。

「問題ねえよ、さつき棘田相手にボール取った直後に奴の後ろで止まっただろ？」

「ああ、なるほど、セナはあのプレーで試してたのね、急停止しても足が大丈夫かどうか」

「そうだ、それにクロスオーバーステップじゃあ大和は絶対かわせねえ、捕まったらお終いだ」

ビデオで撮影しつつ語るヒル魔とまもり。

「一方大和も普通に向かって行くだけじゃセナを捕らえられない、反応速度で大和を上回る阿含でさえ止められなかったんだ、その試合を見ている大和が策なしとは考えられない」

「つまり、大和君がこの勝負を受けたのは彼なりに勝ち目があると、ヒル魔さんはそれが見たかったのよね」

「ケケケ、そうだ、秘策かなんか知らんが実行するには本気出さなきゃセナレベルには対応できねえ、見せてもらうぜ大和猛、お前の全力をな」

ヒル魔とまもりが話している間にもセナと大和の距離は縮まっていた。

お互いに全く脇目も振らずにまっすぐに向かって行く。

カニの店を出て帝黒に戻る道中での阿含と鈴音。

一緒にいる鈴音に全く歩幅を合わせようとしない阿含だが、鈴音はローラーブレードを履いているので問題なく並走していた。

「そーいやお前、さつきも聞いたがホント何しに来たんだ、セナの応援しか出来ないつつつといて今はそれすらしねえで俺と食べ歩きしてんじゃねえか」

「応援といってもね、ただ声をかけるだけじゃあないんだよゴン兄」
「だからその呼び方は…つてもういい勝手にしろ…で、どういうことだ？」

「ここへ来る行きの車内でね、私はセナが大和って人と戦うのを楽しみにしているのに気付いたのよ、サービスエリアで休憩してる時だったかな、セナってば楽しそうに笑ってたのよ」

鈴音はローラーブレードで走りながら楽しそうに話す。

阿含は歩く速さも歩幅も自分のペースだが、話は聞いているようだった。

「だったら私はセナにその大和って人と一対一で戦えるように邪魔が入らないようにする、これが私の応援なんだと考えたの、今回はチアはいらないしね」

「…その邪魔つてのはひよつとして俺のことか？」

「ピンポーン、正解！」

「ハッ！俺は元々やる気なんざねえさ、無駄な努力だったな」

「そーかなー、じゃあゴン兄は何しに来たのよ？」

「姉崎のナンパだ」

「うわ、ヨコシマな想いを清清しい程堂々と言うね」

「ああ、お前には下手な取り繕いは逆効果だと判断した、だから姉崎には俺の好感度が下がるようなことは言うなよ」

「まあ別に言わないけどさ」

（少々好感度が上がろうが下がろうがまも姉えにとってセナ以外は眼中にないし）

「最初に帝黒に着いた時に何か言おうとしてたよね、私が口を挟まなかったら邪魔してたでしょ、まも姉えの好感度を上げるためだけに」
「あー、そういえばそんなことしようとしてたっけな」

当然阿含は覚えていたが白々しくしらばっくれた。

「やっぱり、私の直感は正しかったんだ」

「だがよ、ヒル魔が俺について行く様に仕向けなかったらどうしてたんだ？」

「妖兄が何も言わなかったら私が自分でゴン兄について来てっってお願
いしてたよ」

「腹が減ったというのも咄嗟に考えたのか？」

「いんや、あれはどっちにしても後で行くつもりだったのをあの時
言っただけ」

「ほー、見かけより頭の回転速いな、顔に似合わず身体に似合わず、お
前漫画の主人公みたいだな」

「何それ？」

「見た目は子供、頭脳は大人みたいなアレ、テレビでやってるだろ」

「見た目は子供ってゴン兄、レディーに失礼だよ」

「れでいー？クハツハツハツハ」

お互い取り繕う必要が無い相手であるためか、会話が弾んでいた。

30th down 帝王 対 四次元の騎士（後編）

セナと大和がものすごいスピードで接近していく。

二人が激突しそうな瞬間、大和の突進と同じ速さでセナが一步下がった。

フォースデイメンション

「ひゃっ！」

セナが下がると予想していても二人のそのスピードと迫力に思わず手で目を覆って悲鳴をあげてしまったのは花梨。

一方目の前でこれを見た大和は衝撃を受けつつも冷静に思考していた。

（素晴らしい！…君はまぎれも無く天才だよセナ君、僕にだってこれは出来ない…でもこれはね…一度見たよ！）

セナの動きに動揺せず、更に強くもう一步踏み込み、加速した。

勝負の前に既にヘラクレスはここまでの展開は予想していた。

始まる前の花梨との会話。

「相手が下がるんや、自分も止まれば距離が開いてとりあえず抜かれることはない、まずは負けの可能性を潰しといてから勝負する…つてのが普通の人間の思考やろう」

ヘラクレスが腕を組みながら話す。

「だが大和は違う、勝つために負うリスクなんてこれっぽっちも恐れない、いや、恐れてないんやのうて、そもそも比較すらしてへんのやろう、勝敗を天秤にかけへんのや、自分が勝つことに疑問の余地がないんや」

「天才やからですか？」

花梨が聞く。

「いや、これは天才っていうより、天然って言うたほうが合つとるかな、ほらアイツって偶にハナシが通じん時があるやろ？」

「偶にじゃなくてしよっちゆうですよ、私がアメフト部入る前にボール投げ返してあげて以来一度もちゃんと話が通じたことがないんですよ」

「そうなん？」

「そうですよ、じゃなきやなんで今私がアメフト部にいるんですか」

「いややったら辞める言うたらええやん」

「言いましたよ、怖いからもうイヤですって、そしたらラインとの連携がどうこういって勝手に盛り上がって、よし今から特訓だ〜ってなつて…」

身振り手振りを浴えてバタバタと手を動かしながら懸命に話す花梨。

「ああ、アイツなりに何故花梨がそんなこと言うのか真面目に考えとるんやろうけど、アイツの思考は最後には全てアメフトに帰結するからなあ…まあ、アドバイスするとすれば…人間諦めが肝心やってこどちやうかな」

手の平を額に当ててしよっちゆうがないなあといった感じでのたまうヘラクレスだが、すぐに素に戻って諭す。

「選択の余地なしですか、まあ今辞めるなんて大会中にそんなみんなに迷惑かけるようなマネしたりはしませんけど…セナ君にだって会えたし」

「いや、大会終わってからでも同じやで、辞めんのは無理や」

「いえ、大会後はつきりとさせます、私にはアメフトは向いてないんですよ」

「向いとるし、才能あると思うけどなあ、帝黒の一軍は伊達やないで少し話が逸れつつもこんな会話がされていた。

セナとしても、この状況で大和が停止するとは考えていなかった。関東大会で一度見せた技なのだ、驚くなんてのは論外で、必ず対応してくると確信していた。

万が一止まった場合は距離が開いて状況に余裕が出来るのでその時考えればいい。

そしてその予想通りに大和は停止せず、逆に加速してきた。

ここでセナは大和はもちろん「この世界」では誰にも見せていない技を使った。

泥門時代の対帝黒戦の最後で大和を抜き去った技。

その時は特に技の名前は決めていなかったが、セナは、

「フォースディメンション縦横無尽バージョン」

ととりえず名付けていた。

フォースディメンションで後ろに下がっている途中でクロスオーバーステップを組み合わせる。

前後左右に選択肢が出来ることでそのバリエーションはほぼ無限と言ってよいこの技。

大学に進学後もこれが破られたのは大和や阿含、進等の一流プレーヤーの「勘」が当たった時のみだった。

今回は初めて見せる技であるだけに抜けるはずだと思うセナ。

突っ込んでくる大和をクロスオーバーステップで横にかわしながらそう思ったが、

しかしその直後、セナは大和に対する評価がまだ甘かったと思い知らされる。

突っ込んでくる大和に合わせて横に跳んだつもりが、タイミングをずらされてしまったのだ。

(これは……グースステップ……ってことは、トライデントタックル?!) 既に一步踏み出してしまっていたので次の動作が可能な次の一步までのほんの僅かな時間、

その瞬間を狙って大和はセナに向かってダイブした。

大和はこの時の行動を後にこう語った。

「一度出来たことを二度出来ないとは限らないだろ？」

後ろに動くより横のほうが若干楽だ、セナ君なら続けて動くことが出来るかもしれないと考えたんだ。

一度も見せていないからってあり得る以上、予想は可能さ」

そこから繰り出された技は正にトライデントタックルそのものだった。

これに関しても後にこう語る。

「セナ氏と対戦する以上、王城にはもう一人の天才がいる、言うまでも無く、進清十郎氏だね、

彼に対抗するには、彼の技に対応するには、その特性を見極めるためには、

その技を身につけるのが一番なのさ、だから練習したんだよ、トライデントタツクルを」

と、進対策に身につけた技がセナ対策にも使えるとわかったということだった。

伸ばされた大和の指先、人差し指一本がセナのユニフォームに引っ掛かる。

同時にセナは次の一步を踏み出し、大和から距離をとろうとする。

掴んだのはたかが指一本、通常の相手ならそれで引き剥がされたはずだが、相手が悪かった。

「え?!」

セナが驚く、なんとビクリとも動けなかったのだ。

大和は一本でセナの動きを止めていた。

そして、一瞬停止した間を利用してダイビングしていた体勢を建て直した大和は両手でセナの肩を掴んだ。

真正面から組み合う形になる両者。

完全に捕まってしまった。

「…セナ」

ここまで完璧に捕まるとは全く予想すらしておらず呆然とするまでもり。

一方ヒル魔は冷静に状況を分析していた。

(…あのスピードからのトライデントタツクル…強引な停止…指先一本でセナの動きを止める力…大和猛はスピードだけじゃねえ、進に匹敵するほどのパワーもありやがる、関西での大会では速さで翻弄していたからパワーは目立たなかったが、寧ろこっちが本当の姿…いや、というよりスピードとパワーが高次元のレベルで融合したプレーこそが大和猛だつてところか…どっちにしても…)

そこまで思考したヒル魔は目の前の状況を見る。

指一本でも動きを止められていたのに今は両手でがっちりと肩を掴まえている。

(…どつちにしても、この勝負はセナの負け…か)

ヒル魔もそう結論するしかなかった。

スピードではややセナが上かもしれないが、パワーでは全く相手にならない。

(セナの奴も今回のことを教訓に捕まらないことを前提に練習しているくしか…ん?)

ここでヒル魔はあることに気付いた。

「…セナの奴…なんで……………笑ってやがるんだ」

セナを捕まえた大和は止まっていたわけではなく、そのまま間髪入れずフィールドに倒そうとしていた。

大和はセナの両肩を掴んでいる、セナは片腕でボールを抱え、もう片腕は大和の胸辺りを押している。

しかし腕力も体格も大和が圧倒している以上、片手で押されても全く問題にならない。

「終わりだ、セナ君」

そう言いつつ、最後の一步を踏み込んだ瞬間。

セナは…微かに微笑んだ。

(この時を待っていた…僕が捕まってしまった時の対処方法、それを試すに大和君以上の適任者はいない…彼なら、僕が全力で動いても捕まえてくれると信じてた…今だ!)

それは、セナがこの世界に生まれてからはもちろん、泥門時代にも一度も使ったことのない技だった。

スパイダーボイスン
蜘蛛の毒

と言われていたこの技。

相手が踏み込む際、一瞬後ろに体重が掛かる瞬間を狙って押すこと

で筋力や体格が上の相手にも押し勝てるという驚愕の技。

泥門時代に完璧に使えたのは盤戸スパイダーズの赤羽隼人ただ一人。

「なっ！」

踏み出すその一瞬にセナからの圧力が急激に増し、大和は押し倒すはずが何と逆に押し倒されてしまった。

「は？」

「え？」

ヘラクレスと花梨は目の前で起こった状況が理解出来ず、口をあけて固まっていた。

セナは大和を倒してそのまま走り去り、タッチダウンを決めた。

「……」

勝負は終わったが誰も一言も無く沈黙がフィールドを覆っていた。

「…セナ…勝っちゃった、ねえヒル魔さん、これはどうして…」

ようやくにしてもまもりは呆然としながらも隣のヒル魔に聞くが、

「……」

ヒル魔は無言で目を見開いたまま微動だにしなかった。

今彼の頭脳は高速で回転しセナの行動を分析しているのだろうが、答えには辿り着いていなかった。

「……」

大和自身もグラウンドに大の字に倒れたまま動けなかった。

何が起こったのか理解出来なかったからだ。

セナはなんとか上手く出来たことに安堵していた。

（よかった、成功した…大和君は泥門時代の高校から大学まで何度も対戦してたから彼のクセとかよくわかってたからだな）

セナが皆の所へ戻ってくると同時に、大和はガバリと起き上がり、猛然と走ってきてセナに抱きついた。

その顔は、子供のように目をキラキラさせて笑っていた。

「セナ君、すごいよセナ君、今のどうやったのさ、何今の？必殺技？あ、

わかった、気をコントロールして力を一瞬だけ何倍にもする技を世界の王様とかに教わったの？教えてくれ、ねえ…」

「落ち着け大和お！」

セナをガツクンガツクン揺すりながら興奮して捲し立てる大和を宥めるヘラクレス。

セナがそんな大和に圧倒されている間に口を開いたのはヒル魔だった。

「セナ……今のは……合気……か？」

確信がないのか珍しく少し疑問符が混じっていたが、この短時間でヒル魔は正しくセナの技を理解し、正解に辿りついていた。

「はい、そうですヒル魔さん」

セナはあっさり認めめた。

ここで正体不明の技にしておけば次に対戦するときには少しは有利になれるかも。

とは全く考えず、セナは今見せた技の術理を説明した。

「……………と言うわけで、まとめると相手のクセを見切った後の先を取る…といったところでしょうか、イメージ的には僕が押してるんじゃないかと大和君が壁に手を当てて思いっきり押しして後ろに吹っ飛ばすて感じかな」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……………出来んの、そんなこと？」

「まあ、なんとか運良く出来ましたね」

「反射神経でどうこう出来るモンじゃねーな」

そう言ったのは帰って来た阿含だった、後ろに鈴音もいる。

「いたのかよ阿含」

「いたよ、で、クセってなんだよセナ？」

「えーっと、なんとなく来るかなって感じがそこはかとなくわかるっ

ていうか、確實じゃないし」

「つまり才能と」

「まあ、クセを知れば誰だって出来るつつう技じゃねえな」

そう言いながらもヒル魔はセナの評価とこの技の対策について考えていた。

（正に天才と呼ぶに相応しい奴だな、コイツが合気道やってたら実践で使用できる達人になってたろうぜ、だがこの天才にしか使えない技だが防ぐのは俺でもなんとかなりそうだ、タイミングをずらせばいい、自分のクセを自覚してダミーの体重移動をすればそれだけで単純な力の押し合いになる、セナもそんなことわかってんだろうな、だからいちいち説明したりするんだろう、いずれ術理はバレる、勝負はそこからだって考えてそれを含めた攻防を楽しむんだろうな、手の内を明かすことも戦術の一環ってわけだ）

東京に帰ろうかと皆が準備してる時にヒル魔と阿含が話をしていた。

「出来るか阿含？」

何が出来るのかという主語を省いてのヒル魔の問いだったが、阿含は当然のように返事した。

「…ん、まずクセってのを掴めるかどうかだな、反射神経でどうにかなるレベルの技じゃねえし、セナの奴は後の先なんて簡単に言ってるがそんなもんほとんど予知能力に近い、そんな簡単に実践で合気が使えらるなら大相撲の力士は皆合気道の有段者だ」

皮肉げに口を歪ませて話す阿含。

「で？」

「このオレが他人の動きなんざ気にしてるワケねーだろ、知るかよ対戦相手のクセなんざ」

「あく、お前は相手がどう動こうと神速のインパルスで対応出来るからな、しょうがねえか」

吐き捨てるように言う阿含に納得するヒル魔。

「大体クセって何だよ、個人個人で明確にあるとは思えねえんだがな」
「そうだな…、クセつつうか、その人間が一番力を出しやすい体勢と言ったところか、付き合いの長い相手なら習慣として理解出来るかもしれないねえな、アイツならこんな時はこう動く…とか、テメエで例えると雲水ならある程度行動パターンがわかるんじゃないか？」

「…まあ、ある程度ならな」

「その更に一歩先に進んだのがクセを見切るってことなのかもしれない、曖昧すぎてとても定義できねえがな」

「…だがよヒル魔、セナの奴は大和の野郎に今日初めて会ったんだぜ、それでクセがわかるってのは…」

正に天才ってやつじゃねえか。

と阿含は思ってしまったが、彼のプライドがそれを認められず、口には別の言葉が出た。

「…アイツ、バカじゃねえの」

「…まーな、ケケケ」

それを理解したのかヒル魔の返事は肯定しながらも若干からかうような響きがあった。

もう一回勝負しようとは何故かハイテンションで迫ってくる大和を宥め、

花梨の提案でメールアドレスと電話番号を交換しようとはヒル魔以外の全員（ヒル魔は既に全員の個人情報を知っていた）が交換しあい。

今回の大阪遠征は幕を閉じた。

31st down はじめの一步

夏休み前の期末試験まで後一週間になった。

普通の高校は試験前は部活が休みになるのが通例だが、王城高校には試験休みはない。

それはこの学校が文武両道を目指しているからだ。

普段から勉学を継続していれば試験前になって慌てる必要はないはずだ。

ということらしい。

もちろん赤点を取れば補習であり、その間は部活禁止となる。当然、試験後から始まる長期の合宿にも参加できなくなる。

セナや大田原といった特待生は赤点を取っても補習は除外される、特別待遇生徒とは入試や学費だけではなく、赤点による追試も除外される。

特に大田原は全教科ほぼ0点なため、この待遇がないと話にならない。

セナの成績は悪くはなく、中の上といったところ、王城はレベルが高いのでそのくらいであって、もし泥門高校に入学していたら上の上にあいたろう。

当然、赤点とも無縁だった。

そこへ鈴音がヤバイ教科があるとセナに泣きついてきたので、まもりを交えて3人で勉強会を開いた。

チア部は夏休みの合宿には参加しないが、日頃からまもりの手伝いをしてきた鈴音は臨時マネージャーとして同行が決まっていた。赤点を取れば合宿に同行できないのでなんとか試験をクリアしようと頑張っている。

最初、チア部の方も夏休みは練習があるのでどうしようと鈴音は思ったが、チア部のキャプテンが、

「応援の練習をするので手伝えませんでは応援部として本末転倒です、行って来なさい」

と、むしろ積極的に送り出された。

試験前の放課後の練習のある日、部員全員で校外をランニングをしていた。

マラソンのような競争ではなく、3列縦隊で声を出しながら軍隊さながらに整然と走っている。

付近では有名な王城アメフト部であるため、よく下校時の生徒や一般市民から声を掛けられる。

そしてその中で声を掛けられるのが一番多いのが桜庭であった。

モデル廃業宣言をしたにも関わらず応援してくれるファンは全く減らなかった。

桜庭に黄色い声援が飛ぶ。

その光景は以前と何も変わっていないなかった。しかし。

桜庭が変わっていた。

以前の桜庭なら、ランニング中に声を掛けられたら、

「ど、どうもありがとう」

と、戸惑ったように頭を下げるくらいだったろう。

アメフトとモデルの仕事の両立に引け目を感じての自信のなさがどうしても出ていた。

だが今は違った、まるで違った。

街道から声を掛けるファンの声援に迷いなく拳を突き上げ、

「おおーありがとうおおー」

と大声で返事していた。

それを見ていた高見は、

「ははは、吹っ切れたなあ桜庭は」

と朗らかに笑い。

「いや、ちよつと吹っ切れすぎじゃん、もう別人じゃん」

と猫山がツツコむくらい桜庭のテンションは常時高かった。

(桜庭視点による独白)

俺は許さない

今日も街道からファンの人達が声を掛けてくれる、以前と同じように

俺はアメフトとモデルの仕事を天秤にかけ、アメフトを取ったのだ

それでもファンの人達は俺を責める訳でもなく、いなくなる訳でもなく、応援し続けてくれている

以前と同じように、俺がしたことなど無かったかのように

俺は裏切ったのに

俺は見捨てたのに

俺を赦してくれている

ならばせめて

俺は

俺だけは

俺自身を決して赦さない

試験が終了し、ミーティングルームにアメフト部全員が集まっていた。

庄司監督が部員を前に声を張り上げる。

「よし、全員揃ったな、当たり前だが赤点を取った奴などいなくて安心したぞ、これで心置きなく合宿に入れるというものだ」

一旦話すのを止め、周りを見回す。

全員がまっすぐに自分を見ており、気の抜けている部員などいないのを確認して満足そうに頷き、続きを話した。

「今年の夏休みは秋大会に向けて長期の合宿を行う、今までは高地トレーニングが行える海外の一箇所で行っていたが、今年はそれでは足らぬ、神龍寺に勝つために、いや、日本一になるためには今までと同じレベルのトレーニングでは絶対に届かない！お前達も前回の大会でそれが骨身に染みてわかっただろう」

全部員がそれを自覚しているのだろう、ぐつと臍を噛む。

「今回の合宿では、やれることは全てやる！」

連携やサインプレー等の反復が必要な通常練習は合宿中も絶えず行うが、更に練習量を増やし、現地では普段の合宿メニューに加えて特別訓練も行う、かなり過酷な工程になるだろう、ついて来れない奴は容赦なく置いていく！だが一つ約束しよう、この合宿を終えた時、お前達は現在と比べ物にならないくらい強くなっていると」

「……………」

誰一人気負される者はいなかった。皆静かに監督の次の言葉を待っている。

桜庭に至っては「そうでなくては困る」と言わんばかりに不敵な笑みすら浮かべていた。

自分自身に対する容赦がなくなっている彼にとって、強くなれるのならどんな過酷な練習でもそれは寧ろ歓迎すべきことだった。

「今回の合宿では……………死の行軍を実施する！」

庄司から放たれる不吉な単語に部員達がざわめく。

「か、監督」

高見が代表して手を上げる。

「それは…その不吉な名前の特訓は…監督が大学時代にやったという噂のアレですか？」

「そうだ、そしてその特訓で同期の部員が…いや、相棒とも言うべき友が一人潰れている」

脅かすような庄司の言葉に動揺する部員達。

だが、それに構わずに庄司は話を続ける。

「死の行軍の舞台はアメリカ！ロサンゼルスからテキサス州ヒューストンまでの約2200キロを横断する、無論、ただ走るなどという甘っちょろい内容ではない！」

「な…何をされるのですか？」

「…ふ、それは行ってからのお楽しみだ、まあ、期待は絶対に裏切らんから安心しておけ」

ニヤリと笑ったのたまう庄司。

それを聞いたセナは、

(…やっぱりトラックとか押したりするんだろなあ)

と知っていたのでほぼ正解を当てていたが言わなかった。

庄司の言葉に対し部員達が口々に庄司監督に対して質問や意見を述べ出した。

「でも監督、実際の所、夏休み中に2200キロ走破は無理じゃないんですか？」

「そうですね、それにアメリカは日本と較べて治安が悪いって言いますし…」

「確かに、OB会とか父兄会とかが反対するかもしれませんね」

反対はしていないがビビり気味の部員を尻目に、1人の男が静かに立ち上がると。

「やりたくない奴は、ここから出て行け！」

そう一喝した。

桜庭だった。

喧々轟々だったミーティングルームは一瞬で静まり返った。

桜庭は監督の方に向き直ると、「監督」と話し続ける。

「足りるんですか、それで…それで強くなれるんですね」

「ああ、約束しよう」

そうのためう桜庭にニヤリと笑った庄司はキツパリと言い切った。

デスマーチには当然潰れる危険が伴う、事実として学生時代に親友が潰れているのだ。

だがあれは他のチームメイトが彼を見捨てて逃げたからに他ならない。

皆で挑めばそんな事態になる前にフォローできるはずなのだ。

それでも危険はある以上、打てる手は打っておこうとは考えている庄司ではある。

今の部員とのやりとりを見て庄司は思う。

(…神龍寺に完敗した部員達にもう一度自信をつけさせる必要がある。

今のやりとりにしても、神龍寺と戦う前はあそこまで後ろ向きな発言はしなかったはずだ。

自らの自信と誇りを取り戻すためには、勝利と、もう一つ土台となる信念を植えつけるのがよい。

自分達は強いという確固たる信念があれば、さっきのようにうろたえずに構えていられるのだ」

「デスマーチの後、その成果を試すために現地で練習試合を行う、相手はN A S A高校のN A S Aエイリアンズだ」

それを聞いた瞬間、セナは気付いた。

（エイリアンズって、パンサー君のチームだ！）

「練習試合の相手がN A S Aエイリアンズなのはそのチームがデスマーチのゴール地点にある学校だからですか？」

理由を聞く高見に庄司はすぐに返事をした。

「いや逆だ、デスマーチのルートはいくらでもあったが、ゴールをヒューストンにしたのはこのチームと試合をするためだ」

偶々ゴール地点にいるチームに練習試合を申し込んだ訳ではなく、最初からN A S Aエイリアンズと戦うつもりだったということらしい。

それは何故？という疑問は当然なので、庄司が続けて話す。

「まあ、これについては少し個人的な事情があつてな、お前達はある雑誌社の主催でこのN A S Aエイリアンズが来日して太陽スフィックスと親善試合をする予定があつたのを知っているか？」

「ああ、思い出しましたN A S Aエイリアンズ、雑誌で告知を見てました、でもそのエイリアンズの都合で急遽中止になったんですよ？」

「そうだ、その主催した雑誌社の編集長がワシの学生時代からの知り合いでな、前に会った時にその中止理由を話してくれたのだ、泣きながらな」

「泣いてたんですか」

「ああ、なんでもドタキャンの理由を要約すると「黄色い猿となんか試合してられん」だったそうだ」

「なんですかそれ」

「あのアポロ監督って人種差別主義者らしいよ」

「それでその編集長はキャンセルでかかった費用より舐められている

のが悔しいと、それで仇を討ってほしいと泣きながら頼まれてな、監督はクズでも実力は折り紙つきのチームで合宿の仕上げにはちよどいい、何より舐めた発言は許せんのでその鼻っ柱をへし折ってやりたいので引き受けたわけだ」

「なるほど」

庄司の言葉に納得する部員達だが、次の言葉にまだ驚く。

「その練習試合、もし勝てなかったら…負けは勿論引き分けでも秋大会は辞退するからな」

「ええっ!？」

さらりと衝撃的な発言をする庄司に固まる部員達。

「どうした? 自信がないのか?」

「……………」

少し言葉を言い募っただけの安い挑発で言葉も出ない部員達に、思ったより重症だなと思う庄司。

すると高見が立ち上がり、部員達に向かって話し掛けた。

「みんな…まずは我々に出来る事を全てやろうじゃないか。後悔とは後で悔やむことだけど、俺達はまだ始めてもいないんだ…まずは、一歩踏み出そう」

そう言う高見の言葉を受けて雲水が続けた。

「そうだな、勝つにしろ負けるにしろ、俺達がまず最初にしなければならぬのは…戦うことだ」

「まず戦うって…何と?」

「自分自身とさ」

「……………」

そうして、少しずつではあるが、王城ホワイトナイツは前進を始めた。

32nd down それぞれの目標

ミーティング後に部室に残って高見と雲水が話し合っていた。

「それにしても、ラインにもう一枚強力なのが欲しいな」

「ああ、いくら合宿で強くなるという前提でも、大田原レベルとまでは言わないがそれに準じた選手を加えたいと思うのは今の切実なチーム事情だよ」

「だがそう都合よく強力なラインが入部してくれるわけもなし」

「今から外にヘッドハンティング：まあやりたくはないが、仮にやっただとしても規則で秋大会は出場出来ない、今王城の生徒でないと無理だ」

「王城の生徒で他の部活に所属していないラインを任せられる人材というわけか」

「……………」

「……………」

二人はフツと息を吐き。

「……………いるわけないか」

と、ハモった瞬間、ドカンという大きな音と共にドアが破壊される勢いで開けられた。

そこには、何故か全身に鎖を巻きつけた鬼のような形相の筋骨隆々の大男が立っていた。

「……………」

言葉も無く唾然とする二人をジロリと見ると、その男は容姿に似合った大きな声で叫んだ。

「押忍！俺は猪狩大吾といいます！入学式からずっと停学食らって謹慎してましたが今日解けたので入部します!!!尊敬する選手は大田原先輩です!!!」

教室が震えるような大音量で一気に言うとその男は大きく頭を下げた。

「……………」

声の余韻が残るような静寂が教室を支配する。

「……………」

反応がないことにその男が訝しがり、頭を上げた時、ようやく室内の二人から反応があった。

中の二人、高見と雲水は入ってきた男の容姿や大声に驚いていた訳ではない、それくらいで怯んだりする二人ではない。

ただ、降って沸いたような幸運が信じられなかったただけだった。

「……………き」

「はっ」

「キタコレ〜！来たよ、都合良くラインがああ〜！」

猪狩大吾が入部しました。

夏休みの合宿における目標を考えてみた。

まず僕個人の目標としては。

まずは1試合を全力で走り続けられるようになる。

かなり無茶な目標だが、その為のスタミナ作りに身体強化など、目指して近づけることは出来る。

それにより、4デイメンションの使用可能回数も増えるし。

「あの技」を使えるようになりたいが、僕が使った所で怪我するだけなので後で進さんに教えに行こう。

次にラインは監督の方針としてはデスマーチでトラックかバスをpushさせて下半身の強化に専念するらしい。

これをクリアすることで「自分はこんなキツイ特訓を耐えてきたんだ」という自信に繋がるといふ。

脱落者が出ないことを祈るしかない。

ならばと蜘蛛の毒を覚えさせるのはどうかと提案した。

やり方を監督と高見さん雲水さんに説明したら、

「絶・対・無・理」

と3人ハモって反対されたので断念した。

次に攻撃陣だけど、これは何と言ってもバリスタの完成がメインに

なる。

進さんを加えた力押し of 攻撃方法。

わかっていても止められないというのは本当にすごい。

そして、僕と高見さん雲水さんによるゴールデンドラゴンフライ。

これは雲水さんからの提案だった。

「QBが二人いるのならどちらかではなく、両方使えばいい、セナも出来るだろう、進と練習していたのは知っている、ならば3人でQBをやるのも面白いかもしれんな」

ということに既に練習を始めている。

脳内師匠にクリフオードさんを想定し、全力で走りながらパスが投げられるよう練習中。

さらに帝黒で対戦した横っ飛びする人の技も加えてどんな状況でも投げられるようにしたい。

桜庭さんはエベレストパスを完璧に捕れるようにするのがメイン。

攻守両面に出ると言っているのでやらなければならぬことは多いが、今の桜庭さんは気合が入りすぎてちよつと怖い。

ついこの前は「死ぬ寸前までやってやる!」と言って本当に実践し、疲労と脱水症状で死にかけてたので流石に庄司監督に怒られていた。

こんなところだろうか。

後は進さんに話をしに行こう。

・
↳石丸の目標

石丸は考える、自分の存在は目立たないらしい。

自覚はなかったが、これだけ敵味方から言われ続けると流石に自覚する。

実践でも最近では神龍寺戦で自分でも驚くくらいあつさりとゲイン出来たことは一度ではないことから疑問の余地はないと思っっている。

だが理由はさっぱりわからない。

わからないが事実のようだ。

ならば

それを利用することは出来ないだろうか？

その自分の存在感の無さというのを意識的に使いこなせないだろうか？

まずは自分の動きを研究しようとマネージャーから試合のビデオを借り、自分のプレーを繰り返し何度も見てみた。少し進めたプレー、すぐ止められたプレー、びっくりするくらい進めたプレー。

これらを分類分けして編集し、差異はないかと何度もチェックする。

あらゆる角度から何度も見ているうちに、ある共通点のようなものを見つけた。

それは対戦相手の「視線」だった。

自分のいる場所からズレているのだ。

見ていないのだから自分が進めるのは当たり前だ。

では何故ズレる。

ここにいるのに何故見ない。

地味だから

目立たないから

確かにそうだろうが、それだけでは答えとしては弱いような気がする。

それ以上、考えを進めることが出来ず、しばらく停滞していたが、ある日たまたま見ていたテレビで手品師が見せた技に、視線誘導（ミスディレクション）というテクニックがあることを知った。

「あ、UFOだ！」と空を指差すことも視線誘導だという。

野球の投手が投げるクセ球のように、打者の予想の軌道を通らないために打ち損なう。

これもある種の視線誘導だという。

では相手選手の視線が自分からズレるのはコレなんじゃないか。

そんな気がしてきた。

だが実際に自分が何をしたのかわからない。

注意を逸らすための動作を何もしていないのに何故？

いくら自分のプレービデオを見ても、いくら考えても納得のいく答

えは出なかった。

せめて自分がどんな存在なのか客観的に見れたらまた違うアップローチも出来るのだろうに。

答えが出ず、悩んだまま石丸は合宿に入る。

その後、彼がアメリカでジミィ・シマールと邂逅し、奥義開眼するまであと少し。

石丸哲生にチートフラグが立ちました。

「兄さんは大丈夫かなあ」

鈴音が溜息をついて悩んでいたので話を聞いてみた。

「ああ、瀧くんね、アメリカに行ってから連絡は取れてるの?」

「うん、何故か電話は通じなくてたまにメールが来るけれど、何て言うか…埒があかなくて…」

「どういうこと?」

「えつとね、兄さんから来るメールが

『今踊ったらウケたよ』

とか

『ハンバーガーが美味しかったよ』

とか、どうでもいい内容ばかりで、今どこにいるの? って聞いても、

『スパゲッティ屋』

とか、こつちが聞きたいことを全然理解してくれないのよ」

「ああ、ある意味瀧くんらしいっていうか…はつきり地名を聞いたら?」

「聞いたわよ、そしたら何て答えたと思う?」

『えくと、何て読むのこれ?』

って私に聞いて来るのよ、信じられる?」

「はは…何かごめんだけど容易に想像できる」

「なので読めなくてもいいから英語をそのままメールに書いてって言ったら…」

『E I G O H A M U Z U K A S I I N E』

「つて返事が英語になっただけだし、しかもこれ英語じゃないし、ローマ字にしただけだし、やっぱりこっちの質問の意味理解してないし！」

「落ち着いて鈴音」

「もうこうなったら根気よく続けるしかないって思って、まずは住んでいる場所を書いてよってメールして返事待ちなの」

「写メ撮って送ってもらうのは？」

「無理、兄さんに撮った写真をメールに添付するなんて高等技術は不可能なの」

さすが兄のスペックを完全に見切っている妹、一瞬の迷いもなく断言した。

「そうなんだ、両親はどう言ってるの？」

「元気に暮らしていることは間違いないので心配してないみたい」

「瀧くんの両親もわかってるなあ」

「監督に話して時間貰って探しに行った方がいいのかなあ…」

「うくん、一人で行くのは危険だよ、一緒に行つてあげたいけど…」

その時、鈴音の携帯にメールの着信音が鳴った。

個別に着信音を設定しているようで、彼女の兄の着信音は「1／6の夢旅人2002」だった。

この音源からするに鈴音は文句の割には兄の評価は悪くないようだ。

いや、むしろ自由に旅する兄を憎からず想っているような。

「メールには何て？」

聞くと鈴音は無言で携帯を見せてくれた、そこには…

『あれ？言つてなかったっけ、アメリカだよ』

「……………そこから？」

呆然と呟く鈴音。

「根気よくやるって言ってたけど無限ループするような気がするんだけど」

「うう…」

残念な兄の返事に鈴音の顔はシワシワになっていた。

今回の遠征では迷子から寄り道などないハズなので瀧君には会えないかなと思っていたが、ある場所であっさりと再会することになる。

・

・

「進さん、僕と付き合ってくれませんか？」

「ウホおっ！」

「わ、何を変な叫び声を上げてるのさ、まもり姉ちゃん」

セナと進の会話をたまたま近くにおいて聞こえたまもりの動揺はハシパなかった。

「せ…せ…セナ？…つ…つゆきあうって…何を言ってるの？…そういうのはね…ホラ、アレよ…そっちの道は…アレだからダメしなさいって言ったでしょ」

汗をダラダラかきながら手をワタワタさせてうろたえるまもりはいつもとはまるで違っていた。

「えくと、何を言っているのか全然わからないよまもり姉ちゃん」

ろれつも回っていないまもりにキョトンとして言うセナ。

「だから…付き合おうって…」

「うん、だから練習に付き合って欲しいって進さんに…」

「ソーダヨネエ!!!」

セナが言い終わる前に大きな声で相槌をうつまもり。

益々の挙動不審さに首を傾げるセナ。

「何だと思ったのまもり姉ちゃん？」

「はあん？何を言ってるのセナ、練習に決まってるデシヨ、他に何があるってのYO、あ、いけない、私仕事しなくちゃ、忙しい忙しい!!」
そうしてまもりはバタバタと慌てて走って行き。

ベシヤ

転んだ。

・

「何だったんだまもり姉ちゃん…」

「それで、話とは何だセナ」

呆然と見送る僕に対し、全く気にも留めていない進さんは続きを促した。

「うん、進さん、合宿中に1つ技を覚えてみませんか？」

「技？セナが大阪でやった蜘蛛の毒というやつか？」

「いえ、あれはかなり相手を知っていないと成功率は低いというのが監督の結論ですので違います」

進さんは腕組みをしたまま僕が続きを話すのを待っている。

「パワーが3倍になるっていう便利な技なんですよ」

「ほう、技で力が増すというのか、興味があるな」

さすが進さん、全く疑問を持たずに信じてくれている。

「使いこなすには高い技術と頑強な身体が必要なので、僕では怪我するので無理ですが進さんなら全く問題なく会得出来るはずですよ」

続けて簡単に内容の説明をする。

「基本はショルダータックルなので相手が避けない状況でのみしか使えません、ぶつかる相手に対して頭と肩と腕の三箇所を同時に当てることで……」

「…ええと、内容はというわけで、とりあえず名前をつけてみるとですね…」

「【デルタダイナマイトスパア】と名付けました」

進清十郎に超絶チートフラグが確定しました。

おまけ

「でも、進さんのスパアタックルとかトライデントタックルとかは、

伸ばした腕を槍に見立てたから付けられた名前なんですよ？そのデルタダイナマイトって腕伸ばささないじゃないか、それをスピアーって言うのはちよつと違うんじゃないかなあ」

と、後に部員全員に技の説明をした時に猫山君が言った。

「うん、でもまあ、身体は槍のように伸びてるわけだし、あながち全然違うってわけでも…」

石丸さんもそんなフォローをしてくれている。

そんなみんなに高見さんが言った。

「そんなことはどうでもいいんだよ、必要なのは相手がどう思うかだ、対戦相手への心理的影響が大事なんだよ、それを優先して考えた場合、進の技にはとにかくなんでもかんでも「スピアー」をつけるべきなんだ」

「なんでもかんでもって…じゃあ進さんがレシーバーでボールをキャッチしたら？」

「スピアーキャッチだ」

「QBでボールを投げたら？」

「スピアーレーザーとかだ」

「くしゃみしたら？」

「スピアー……achoo……だ」

「アチョー？…なんですかそれ？」

『『ハクション』は英語で『achoo!』だからだ、『くしゃみ』の英語名詞は『sneeze』だが、イマイチ迫力がないのでこっちのほうのマシと判断したんだよ、咄嗟に考えたにしてはよく出来ているだろう」

「いえ、高見さんは捻りすぎて逆に名前が覚えにくくなるので出来の良し悪しで言えばよくないんじゃない？」

「ってゆーか、どっちにしてもそこにスピアーはいらないでしょ」